大正六年九月十四日（第三種郵便物認可）
大正十五年六月一日發行（毎月一回一日發行）

建築と社會

（第九輯第六號）

第九輯
第六號

日本建築協會
大正十五年六月一日

世界的冠絶せる國產優良品

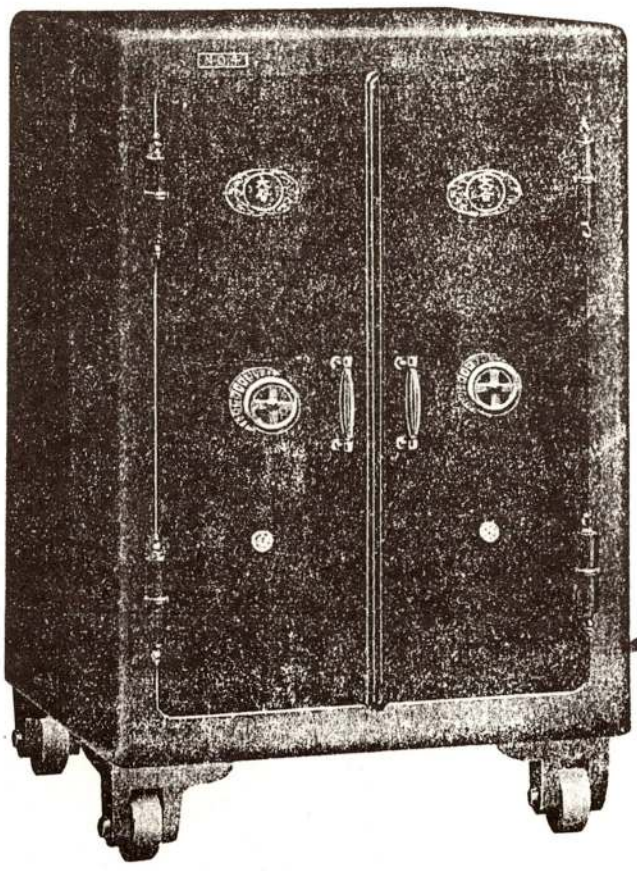
大谷金庫店技師



專賣特許

大谷製金庫

東京國立工業試驗所
檢定濟



危險!!

安全第一ハ平素ノ設備ガ肝要デス！
大谷金庫ハ此使命ヲ確實ニ果シマス
一日ノ躊躇ガ千歲ノ悔ヲ胎ム即時御照會下サイ

東京　東京
大阪　京都
神戸

日米板硝子株式會社

本　社　大阪市西區阿波堀通一丁目
工　場　九州若松市外二島（鐵道省指定工場）
大阪販賣店　本　社　内
東京販賣店　東京市丸ノ内ビルディング七階
九州販賣店　門司市大毎ビルディング三階

製品解說

製造方法　世界最新コールボーン式自働連續板狀伸延製造法ト稱シ幅六呎ノ板硝子ヲ長サ無限ニ連續製出ス

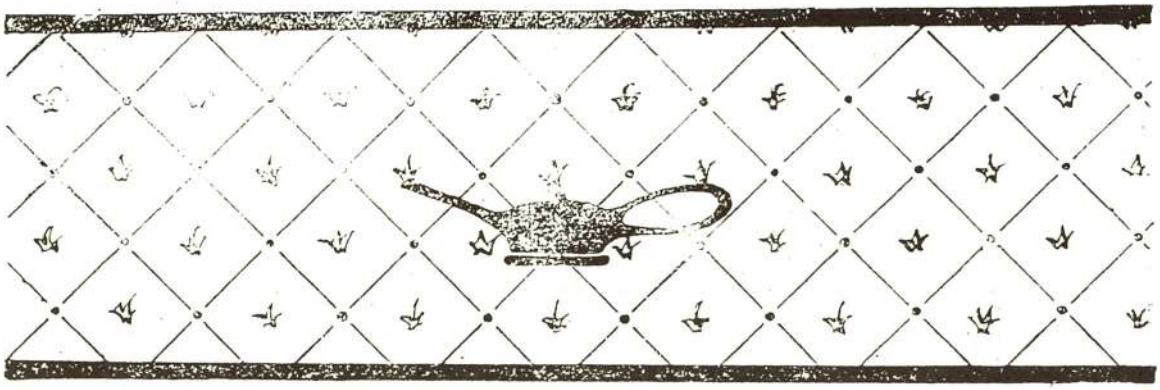
特　徴　精密ナル機械ノ標準ト硬化作用ニヨリ板面ハ反リ歪ミ無ク厚サ整等ニシテ質强靱ナルヲ以テ破損ノ虞少シ

厚　味　二十四オンス品　並板（十六オンス）ニ比シ二倍ノ破壞强度及耐久力ヲ有スルヲ以テ學校病院工場會堂ビルディング等ノ高級建築及ショウウインドウ用トシテ最適品ナリ

三十四オンス品　汽車電車等ノ窓硝子トシテ賞用セラル

加工品　摺　結霜　春霞

和洋建築窓、家具等ニ使用シテ頗ル優美ナリ



〔口繪〕住友ビルデイングー
- 建物外觀
- 一階廣間
- 六階廻廊
- 一階及び四階平面間

□□　□□　□□

▼不可視物と可視物の結合……（一）

●北米に於ける建築施行法の實狀……下浦　光衛…（二）

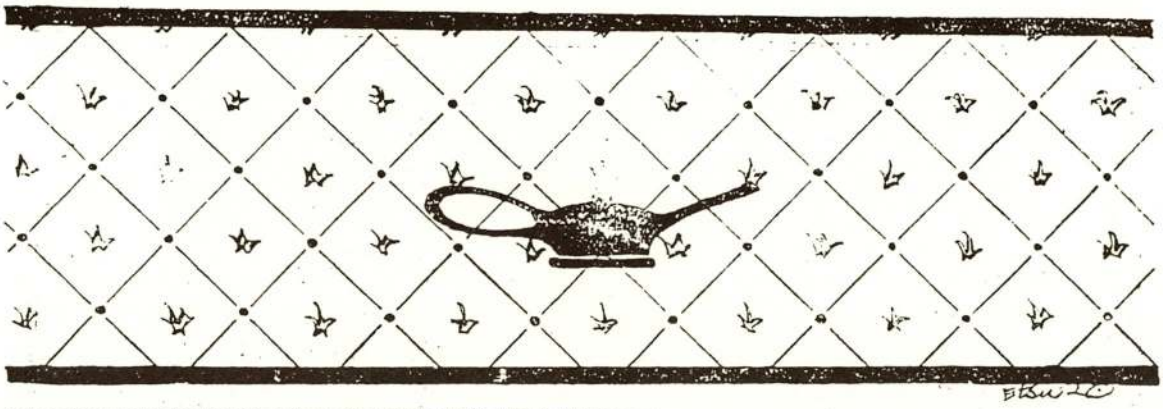
●所謂實費の範圍について米國に於ける實狀……岡田　宗一…（一九）

▼住宅私案（一―三）……（二四）

◎構造計算のシステムとチエツクの方法……池田　宮彦…（二七）

●大戰後の住宅難と新住宅の建築……上野伊三郎…（三三）

▼〔羅辭緒〕……（四二）
- 鎌倉時代の建築
- 天平時代の建築



九輯第六號目次

●現代的墓地園の施設……椎原兵市…(三六)
□□□□□□
●劇場はエールへと趨く……DIXONM MORTN…(四四)
池田谷久吉
●建築の本質(二)……本野精吾…(五二)
●古代建築と木材……江崎政忠…(五六)
▼(五分間)素人ばかりで行くホテル……(六六)
▼住友ビルデイング新築工事概要……(七二)
□□□□□□
●綠の霞を追ふて……江村恒一…(八七)
(長野から錦溪温泉へ)
▼(俳壇と俳話)・若葉—初夏……齋藤溪舟…(九四)
・風流茶碗
□□□□□□
■日本建築協會々報……

新革之料材「壁」



專賣
特許



專賣
特許

乞御試用

特長
- ○施工迅速　○色澤高尚
- ○安全堅固　○工費低廉
- ○耐濕耐火　○防錆防腐

アサダセメント、プラスター

兵庫縣飾磨港

飾磨化學工業株式會社

東京販賣所　東京市日本橋區本町三丁目山口ビルヂング五階　建興社

電話飾磨（二）〇六一番
電話大手（自九七五七番 至五七九番）

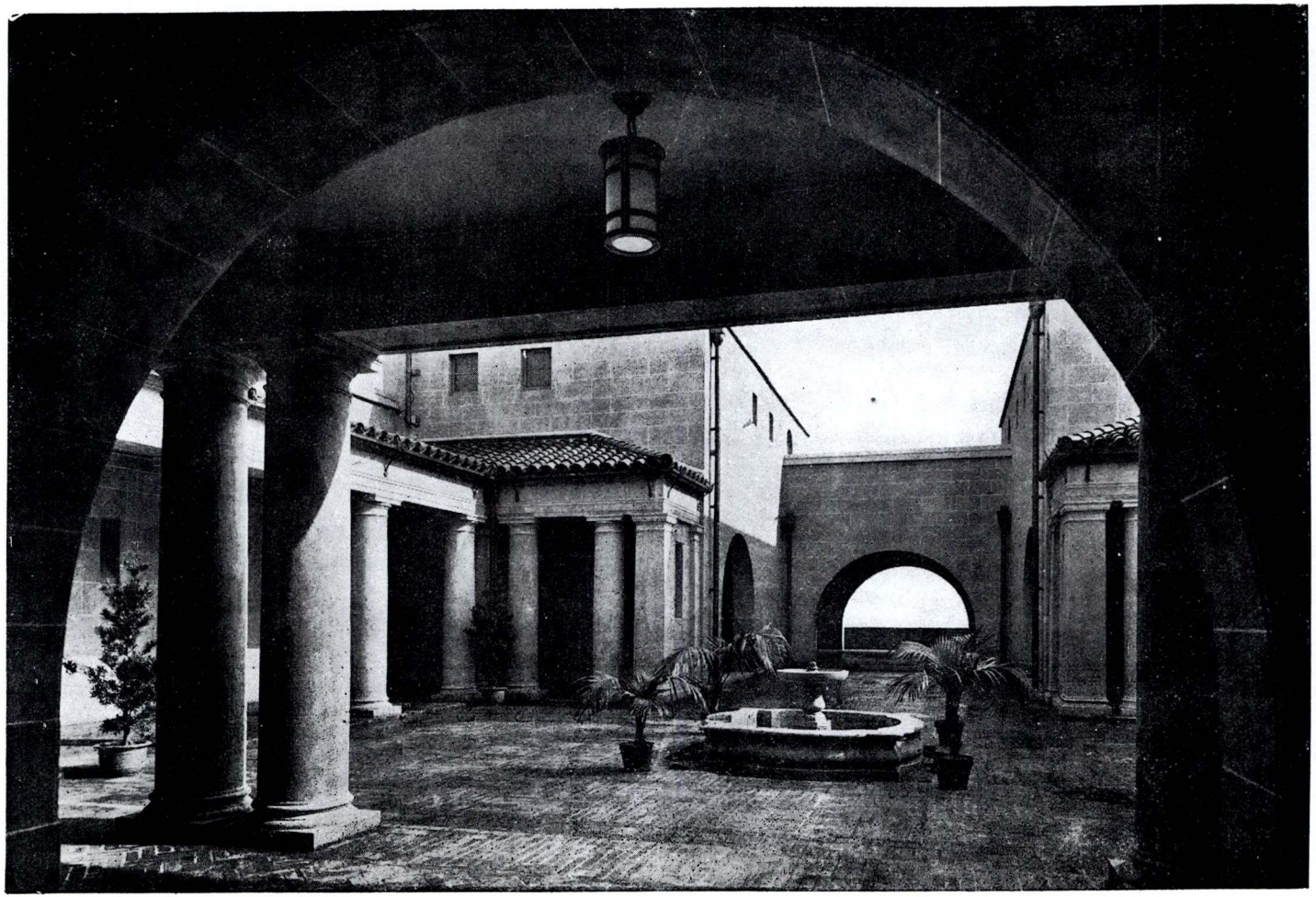
特長
- ○高尚ナル純白色
- ○強力甚大、膨脹龜裂ノ虞ナシ
- ○結性ニシテ使用容易
- ○緩凡テノ性狀普通「セメント」同等以上

アサダ・白色ポートランド・セメント

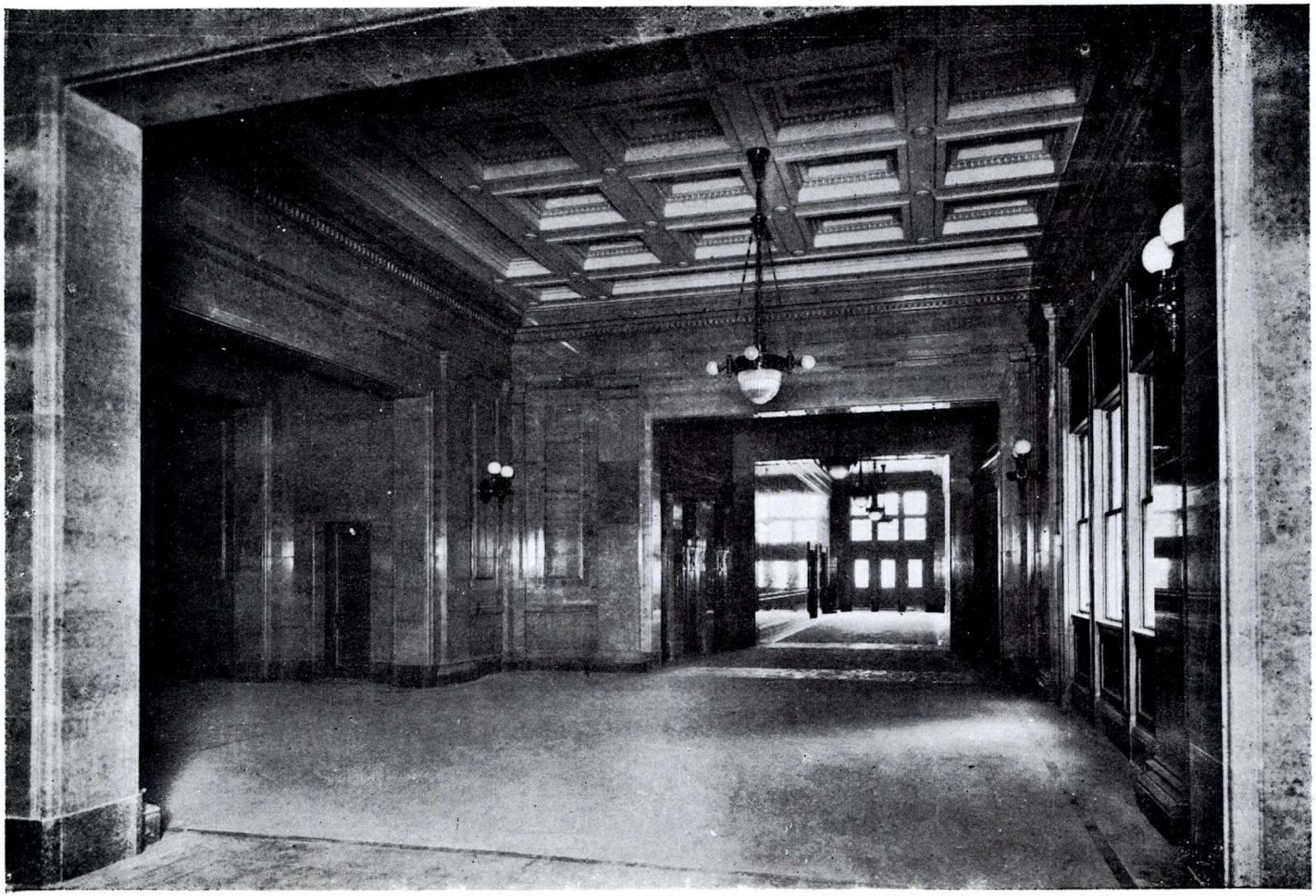


住友ビルディング

——大阪市東區大川町——

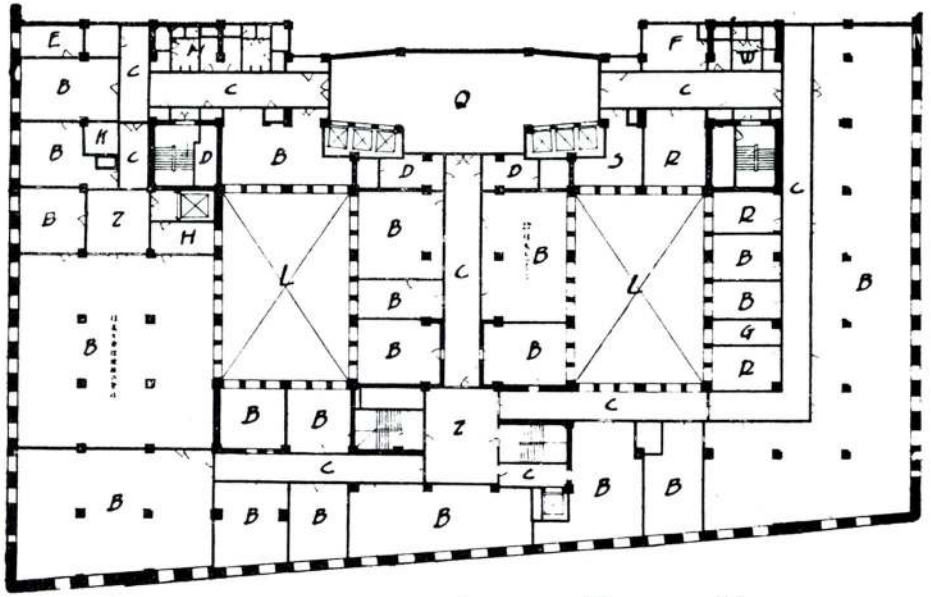


住友ビルディングの六階廻廊



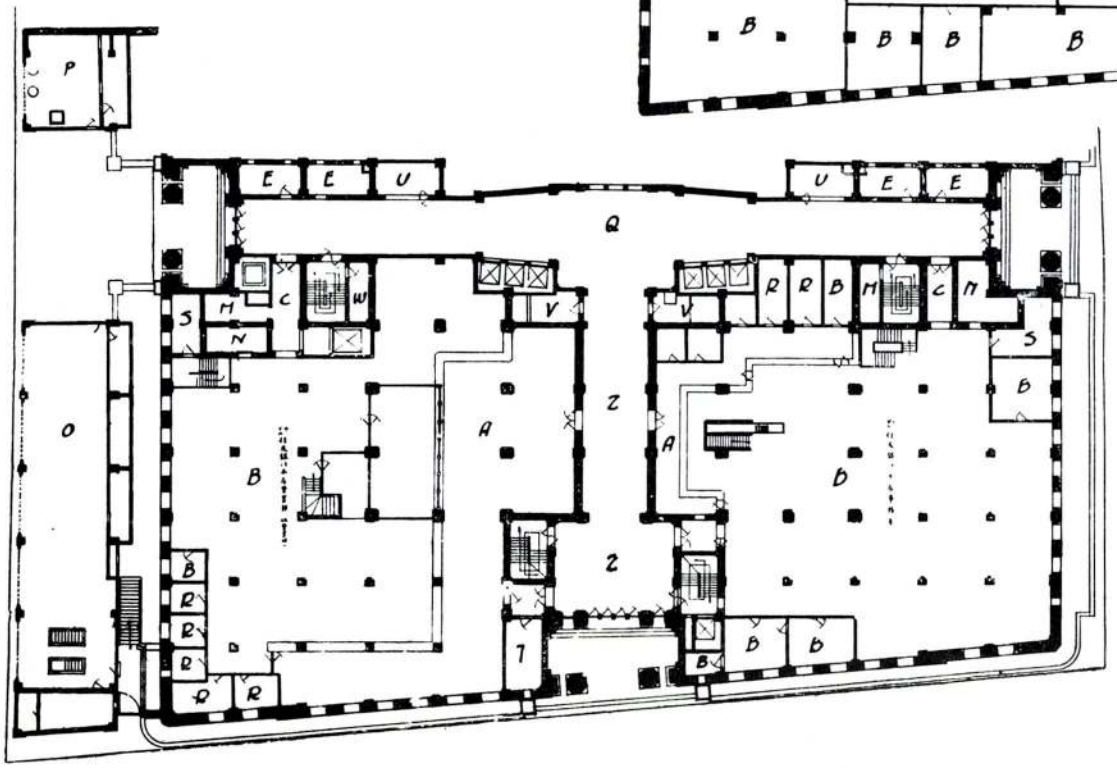
住友ビルディング一階廣間

A　客　溜
B　事務室
C　廊　下
D　物　置
E　小使詰所
F　婦人更衣室
G　見本室
H　時計室
K　煙　突
L　明　取
M　男子便所



（階　四）

（階　壹）

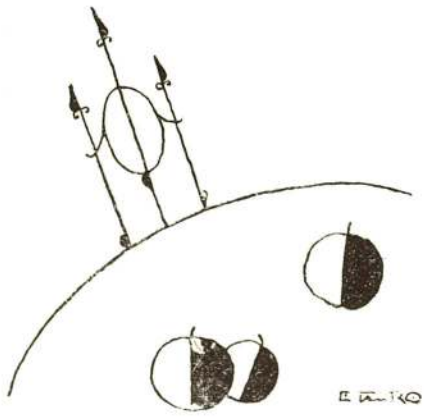


N　帳簿庫
O　自動車置場
P　人力車庫
Q　エレベーターロツビー
R　應接室
S　喫煙室
T　守衛詰所
U　下足預所
V　配管室
W　婦人便所
Z　ホール



不可視物と可視物の結合

本野精吾氏は本號に於て、「建築は靈魂の表現である」といふ石本氏の言葉を引いて、「ハギアソフィアの小さいドームから段々に積み重なつて中央の最大ドームに至る迄の間に構成された廣大な空間は、全く人間の崇高なる宗教的魂の凝結と見るのは至當の事である」と云はれた。氏ギュイヨオは曰ふた「藝術家の第一條件は視ることである。然し單にそれのみが藝術家の條件ではない。……競賣評價人のためにも可視的世界は存在し、彼等にとつては、壁紙、丸卓、角卓は總て存在するものである。要は、視るもの、人格的見地奈何である。可視的世界の現はる、角度奈何である。特に重要なのは、各々が內に藏する不可視物が可視物と相結合する方法奈度である」と。——建築は、それが不可視物則ち靈魂の表現として結合する方法が驅一高遠の藝術であり人間創造の崇大美である。……（郊邨）



北米に於ける 建築施行法の實況

（末尾寫眞其他參照）

下浦光衛

下浦氏は竹中工務店技師として多年現場の經營に奮闘され、大同ビル竣工後昨年九月渡米、今年三月に米國視察を了して歸朝された。此の稿は本會の四月例會に於て講演されたるものを採錄したのである。（編輯者）

▼視察としての洋行　私は最初十ケ月位の豫定で歐米建築界の施行狀態を視察する目的で出發致しましたが、家庭の出來事や身體の都合で米國だけ見て歸つて參りました從つて私の視察は北米だけに範圍を狹められましたが、元來建築現場經營者は施主設計者と請負會社との中間に立つて兩者の目的を完全に遂行すべき主要な立場に置かれてゐるもので、且つ之が私の從來天職と信じて努力して來た所なので、貧弱なる内容ではありますが聞いて頂きたいと思つて今夕此處に立つた次第であります。

一口に洋行と言いましても洋行には留學、研究、視察、見物等色々種類がございます。留學や研究は同一場所で相當な時日を費してかゝられるから大變良い効果を齎らして來られます。視察となると相當な學問のあるお方でも行く先々で可りまごつかれます樣で、只乘物が便利ですから知人の案内者を豫當に持つ人は相當に廣く觀察し得られませう。永年紐育に住んで居る或る人は、日本から來られる人達の七割强は只見て察する方だと言つて居ました。私の如き淺學菲才では見て察する事も出來なかつたので誠にお恥かしい次第であります。又見聞を申し上げる事になりますと見樣聞樣察し樣によつて其の結果に大變な相違が出來ます一例を申しますと私は以前に知人から『紐育邊の交通巡査等の收賄は甚だしいもので、殊にクリスマスや祭頃には山の樣に積み上げてゐる』と聞いてゐましたが、實際其の樣な事は殆ど見當りませんでした。要するに些細な事が誇張されたものでせうが、私の話に對しても御賢察を願はねばなりません。

▼概況　順序と致しまして私の歩いた主なる都市を申し上げますれば、シアトル、桑港、ロスアンゼル、シカゴ、デトロイト、紐育、ワシントン、ニューオーレアンで歸途ハワイに立寄りました。各都市共種々狀況を異にしてゐまして、施行法も夫々相違してゐますが、私は之等各都市に共通してゐ

る點に就いて概評的に申し上げたいと思ひます。

施行上特に感心して特筆する程の事は見受けませんでした設備等も大體一通り眞似位は日本でやつてゐる事ばかりであります。又眞似以上にやる事は茲暫くは却つて損な事と思ひます。東京の丸ビルの工事が始まつた時日本でも竣工を急ぐ事が米國式と解して各地で大變流行しましたが、田舍のおかみさんが汽車に乘る樣な急ぎ方は第一危險千萬であります。然し米國は適流行の本場だけあつて施工は成程迅速だと肯きました。

▼施行の迅速　な理由を今一通り申上げたいと思ひます。先づ鐵材に限らず各種材料が非常に豐富である事、型錄がよく發達してゐて定尺物が多い事、例へば手摺、空氣抜き、入口枠、サッシュからストーヴの前飾大理石に至るまで寸法仕立になつてをります。設計者も請負者も誠にお樂な事で御座います。又下請負業者は材料手間の供給は勿論機械設備も自分でし、圖面は現寸迄拵へて設計者の承認を經てやつて行きます。尤も機械貸付專門會社もあるからでせうが兎に角下請負人等が寄つて全工事を進めて行くから請負人は極めて樂であります。又

▼市中運搬　は誠に簡便で五噸や十噸のトラックが何處へ走つても差支へない道路と橋梁が出來てゐます。當地で三間以上の長尺物を運搬するのに警察へ行つて旗を立てねばならぬ等と噪いでゐる間に米國では四五回も往復するでせう。第一トラクター等を使用する貨物車なれば二間半か四間位の長さがあります。

コンクリートの主要材料たる砂や砂利等の扱ひは各市共甚だ便利に出來てゐます。大會社の經營故でもありませうが、設備は皆大仕掛けで、幾十立坪の材料をデレッキで取込んで幾百坪を貯藏します。それが漏斗から開閉器を通じて五噸位の運搬自動車に移されますが此の間僅かに二分間位のものであります。當大阪では仲間が水切りして肩曳乃至は馬車へスコップでボッ〳〵移してゐます。斯うした勞力本位の遣方は失業救濟の政策上大いに宜しいかも知れません。又材料供給狀態を彼我比較して見まするに、當地では淀川が增水だ、仕付時で人夫がない、やれ東風で下りバラスが四五日遲れると言つた樣な譯で現場員の氣を揉むだけでも大したものです。

鐵骨工事が迅速なのは一は其の組立てが頗る簡單だからで私の考へではリベットの數の如きは日本のそれに比較して半數以下であらうと思はれます。

▼設計圖面　施行上見逃してならぬ事は設計圖面の揃つてゐる事であります。入札當時から既に電氣電話瓦斯煖房衛生換氣等一切の附帶工事が立派に設計せられて居ります。從つて之等附帶工事が本工事と平行に進行し、建物出來上りを良くし時間と經費を省く事が肝心の事と思ひます。日本では施主の御研究が足りない爲めか、或ば設計者に信賴出來ぬといふのか、附帶工事は後廻しになりがちで特に甚だしいのになると本工事が大方出來上つた頃になつて附帶工事を始められる事さへあります尙之等附帶工事の設計圖等は當地に從來見受けましたものに比して遙に精細入念に書かれてあります。

▼假設工事　煖房工事等が本工事と平行に進め得る關係上か或は職工の勞働疲勞の研究の結果からですか知りませんが、冬季內部工事に當つては必ず假煖房の設備をして居ります。

日本より寒い關係もありませうが米國では餘ど規利の樣になつてゐます。而も之等の假設費は入札の當初既に豫算に計上してあります。此の點米國の職工は誠に幸福と言はねばなりません。國情も違ひますが日本の請負業者は誠に施主に忠實でありますか一方眞面目に働く職工には米國に比して氣の毒に思ひます。

▼**コンクリート**　の仕上は概して日本のそれに比して外見は良好であります。之れは一つは鐵筋量が少くて相當の堅練りでも廻り易いからであります。但し彼地でもコンクリートの搗手は相當にやかましくやつてゐます。鐵骨構造の場合の床梁のコンクリートは平均惡い樣に思はれました。

▼**フオアマン**　個人々々の作業振りは極めて悠つくりであります。御承知の通りフォーマンが現場を切り廻して居ります彼等は相當な經驗を持つて居りますから組合の規定賃銀の外に請負人から三割乃至五割の手當を支拂はれます。ですから彼等はよく働いて呉れますが、日本では平職工に平手間を與へてそして責任を持たせようとしてゐますが、之は洋の東西を問はず少々無理でございます。

▼**丁寧な點**　は假設工事の外、冬季コンクリート工事で砂や砂利をスチームにて暖めたり、又ミキサー内へ瓦斯熱氣を送つてコンクリートを溫めてゐるのを見ました。又施行中建物の周圍に天幕を張り廻し、天蓋幕を二重に張つて內部でコークスを晝夜焚き通してゐるのをも見ました。之等も皆豫算に計上してあるからこそ出來るのでせうが、日本でも寒中のコンクリート打ちは隨分寒いのですからこれ位の用意はしてよいものと思ひます。地震國である上、金がなく而も早く安く良い建物を建てる樣に要求される事は現場第一戰に立つ者の實につらい所でございます。

▼**堰板工事**　は千差萬別で、厚い板を使ふ者もあり中板位のものを使ふ人もあります。コンクリート打ち放し仕上げのもの丶外は殆ど削り板を使つてゐるのを見ませんでした。實刎等は殆ど使用せず、板と板との隙間へワイヤを通してバタを締めてゐる樣なズルイ奴も見ました。細く注意はしてゐる樣で又小事には拘泥しない樣であります。

▲**左官工事**　は隨分ァラケナイ仕方でありますが立派に見せて居ります。第一手付きが無器用で、材料を無駄する事は實にひどい。工賃のない關係上材料の無駄より早い方が良いといふ勘定だそうです。私共が天井足場の上へ上つて行つて厚いの薄いのと文句言つて居るのが無駄な樣に思はれる位大陸的な遣方です。

▼**石材工事**　の如きも隨分と亂暴な仕事が多く、甚しいのになると燒物でも積む樣に目地が二三分も喰ひ違つたり、合端の切方のなつてゐないもの缺けた所は燒繼もせずに人造石をぬる等樣々な惡い例があります。殊に面白いのは入隅の留ですが、出が一寸五分位の繰方の付いたものは留も作り出さずに一方を面付けにして人造石で穴塞ぎしてゐる事です。こんな例は相當な建物にでも各地で見られます。石の叩き方も粗雜で、据付も下手だと申し上げたい。或る大きな銀行の正面に並んでゐる十幾本のオーダーの臺石が六分から八分位の高低があります。之等は要するに各工事のフォーマンが圖面を見て勝手に眞墨を出して施行する結果だと思ひます。此の點は日本の大工世話役が一切の墨出しをして點檢する方法は實

に良いと信じます。

▼煉瓦工事　申すまでもなく米國は煉瓦萬能國であります。私は今まで西洋崇拜の方々から『どうも日本の職人は就業中に煙草を喫むし道具の手入ばかりするし迚も話にならぬ』と言はれてゐまして、外國ではそこらは嚴格な事だろうと思はされてゐました。處が來て見ると昔の米國はいざ知らず、今の米國では作業中と雖盛んにフカしてゐるのを見て驚きました。例の杓子の柄の曲つた樣なパイプで悠長にやつてゐます日本でも煉瓦工の衒も煙草は目立つて多いのですが、本家の米國は又格別酷い。あまり我子ばかりは叱られぬと思ひました。

▼テラカタ　內地でテラカタを輸入して使つてゐた時。所謂焼き繼ぎ藥が說明書付で澤山同封されて來ました。其時遠方へ送る故毀れる心配で送られる事と思つてゐましたら、米國でも盛んに繼いで使つてゐました。要は僅かの傷の爲めに大きな材料を無駄にする事が國家的不經濟だと言ふので製造家も技術家も焼繼ぎ使用を認めたものと思ひます。之は日本製品で日本でしたらペケとして直ちに取り替へさせられる所でせう。勿體ないと言事に廿年前位から日本も氣付いてゐたら日本も國產建築材料も隨分進歩してゐた事でせうと信じます

▼現場動力　は適米國は石油國だけあつて、どこへ行つてもガソリン發動機を使用してゐます。電力と比較して大差ない相ですが、ガソリンは西部地方ではガロンに付九十仙、紐育では一弗二十仙以內ですから機械がよく使はれるのは動力が安いからでもあると思はれます。電氣は火力發電ですが石炭が近くにある爲め一キロ三仙位の樣に聞きました。日本には豊富な水力電氣があつても仲々値を下げないのは殘念な事です。

▼職工賃銀　は大程時間給で且つ一時間八時間作業となつてゐます。殘業や日曜は倍額で世話役は三割乃至五割增の規定になつて居ります。兎に角其の一時間の給料は、大工は一弗五十仙、煉瓦工は一弗七十仙、左官は一弗五十仙、石工は一弗七十仙、人夫は八十五仙が標準で、西部中部の諸都市は紐育より一二割方安い樣です。何れにしても煉瓦屋一人に一日十四弗も支拂ふといふ米國は經濟力の上から言へば實に偉い所があります。煉瓦工組合から最近二割の增給を申込んで居るとかで大分問題になつて居りました。日本も職工から無理な注文が出ない先に大いに研究してやる必要があると信じます。

▼現場員　設計者側、請負者側共現場員の數は非常に少く三十弗五十萬弗位の工事でしたら一人か二人でやつてゐます日本では四五十萬圓の工事でしたら監督者の三四人と請負者現場員の五六人も出ますから、米國に較べると日本の現場員は遊んでゐる樣に見えるかも知れませんが、之は米國では經驗もあり高給でもある世話役が大勢付いてゐるからであります世話役は各職共十五人か廿人毎に一名宛配置されてゐます。尤も例外として稀に現場員の多い所もないでもありません。兎に角現場では圖面は引かない事になつてゐまして、只工事工程表に依つて工事の進捗を圖り專ら交涉の任に當る位いでありますから現場員の數の少いのは當然であります。設計者請負者双方の現場員共何れも此のフオーマンを信賴する事は意想外で、現場員が敬意を拂つてゐる光景を幾度も見ました

位です。

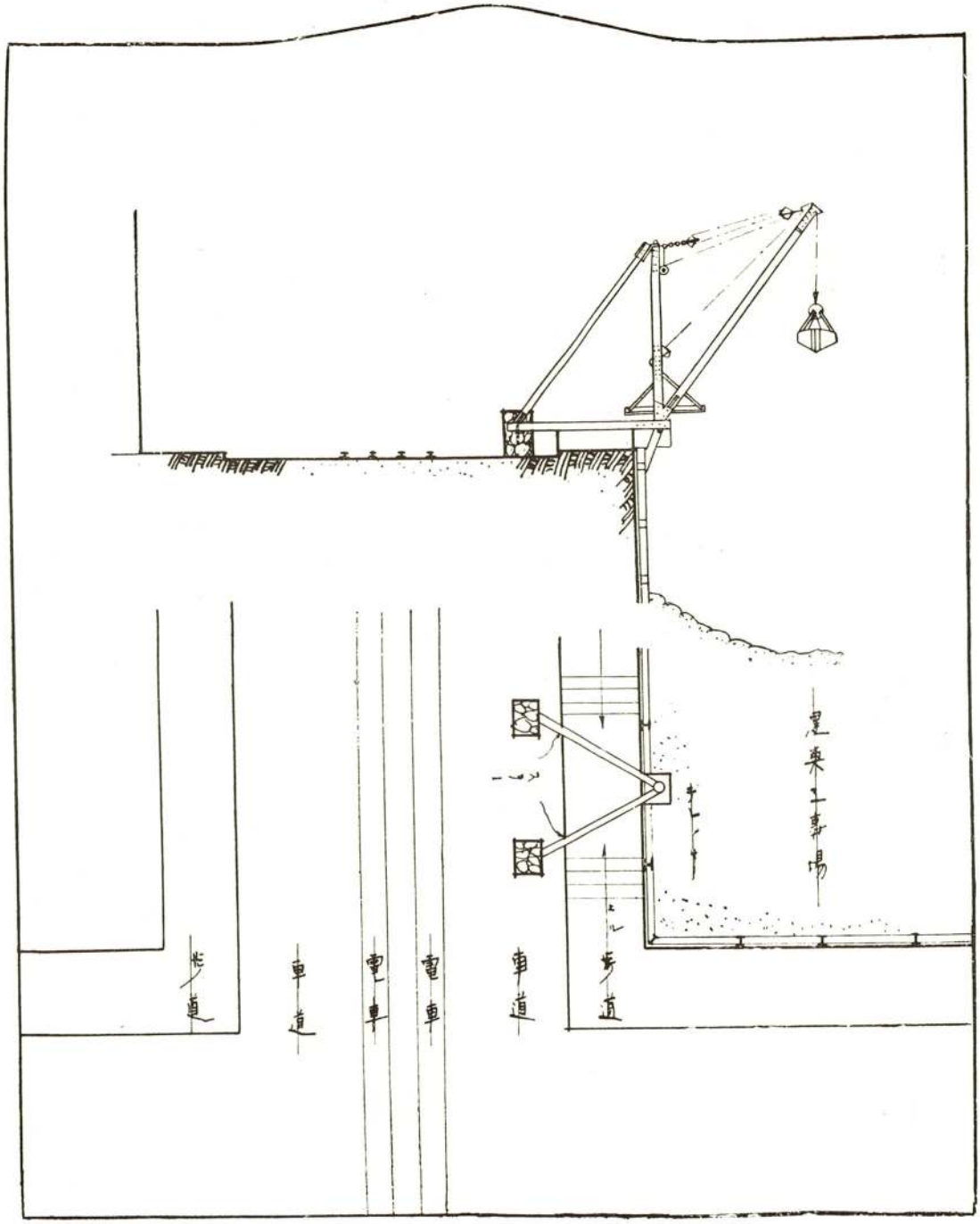
現場員が少く世話役委せの米國現場は隨分遣り放しの樣に見えますが、出來上りは割合に垢抜けしてゐます。之は勿論多年色々改良工夫された結果でもありませうが、要は金の力であります。

▼豫算と競爭　若し日本でも米國の樣に充分な豫算が得られるなればもつと立派なものが出來る事を斷言致します。即ち入札の如きも米國では請負業協會で協定した項目に從つて見積る事になつてゐるから、夜警、箱番、監督、隣家養生等記入漏れなき樣に見積られます。日本では各自勝手に見積り甚だしきは屋根瓦見積落しで落札した等といふ滑稽も出來ます勿論競走入札は經濟原則かも知れませんが、競爭も程度を越ねたら惡結果を招來するのは明かで、且つ競爭が程度を越えるといふ事もあり得るのであります。現場に立つ者は合理的に安くなる樣施工法を改良工夫するのが本分でありますが、然し絶對に餘地がなくなれば白刃の銅板が八十目となり、一二四のコンクリがセメント十樽で品切れになる事でせう、殊に日本で工事着手後の設計變更が甚だ多いのですが、元々安い工費でさせながら之等の無理を押しつけたら、工事の進行どころか迚も滿足な建物にならないのであります。

此の點になると米國は富國であるだけ豫算がゆつくり與へられてゐます。第二表に見ゐる樣に建築投資の額が夥しい額に上つて居りますから、極端な競爭しなくとも仕事が取れるのであります。如何に眞劍に見積をやつてゐるかといふ事は入札して豫算超過の時、仕樣書の變更がなければ斷じて減額しない事を見て明らかであります。私は米國の建築家に此の信念と意氣とのある事を喜ぶ者であります。日本では豫算超過再入札となるとごうでせう。よし來たとばかり甲は一割引き乙は八分引き丙は三分引きと出ます。而も尙超過だと言つて更に甲や乙に減額相談を申込むなど、見積者も設計者も何の信念があつて斯る暴擧をするかと思ふと實に恥かしくなるのであります。

▼材料檢査　今日建築施工法に對する關係者の頭は大分變つて來た樣に思ひますが、過古に於て同一品質として入場した貼付タイルを三十餘通に區別し　個々を平盤の上に乘せて見て音がする奴を省いたりして其の七分通りを不合格にされた時代があります。滑稽なのは不合格として送り返された、材料を知らぬ顏で今一度搬入し再檢査を受けたら、其の中又三四が通過すると言つた風な事で權威も標準もあつたものでない。又ミキサーの廻轉を時計で計りつゝ二秒早いとか、松杭の末口寸法が二分足らないとか、豆砂利が三分の篩から少し出たからいけないとか末葉を越えた檢査をされた時代もあります。之等は日本にあつた事で、自分自身も昔工事の監督してゐた當時の事を今思ふて赤面する事があります。末節に囚はれて大局を失する事は我が國の建築術の進歩を害する事が多いだろうと感じた次第であります。尙米國の

▼路面使用　は官憲で非常に寬大で之も彼地の建築を發達せしめる一理由と思ひました。歩道は米國では大概私有地ですから屆けさへすれば陸橋も架けられます、又車道を占領して巾四尺位の手摺付板敷假歩道を作つて歩道全部を占用してゐるのもあり、又車道を或期間だけ巾六七尺通り材料置場にする事もあります(寫眞(1)は其の一例です)。甚だしい例は挿


建築工事場
歩道
車道
電車
電車
車道
歩道

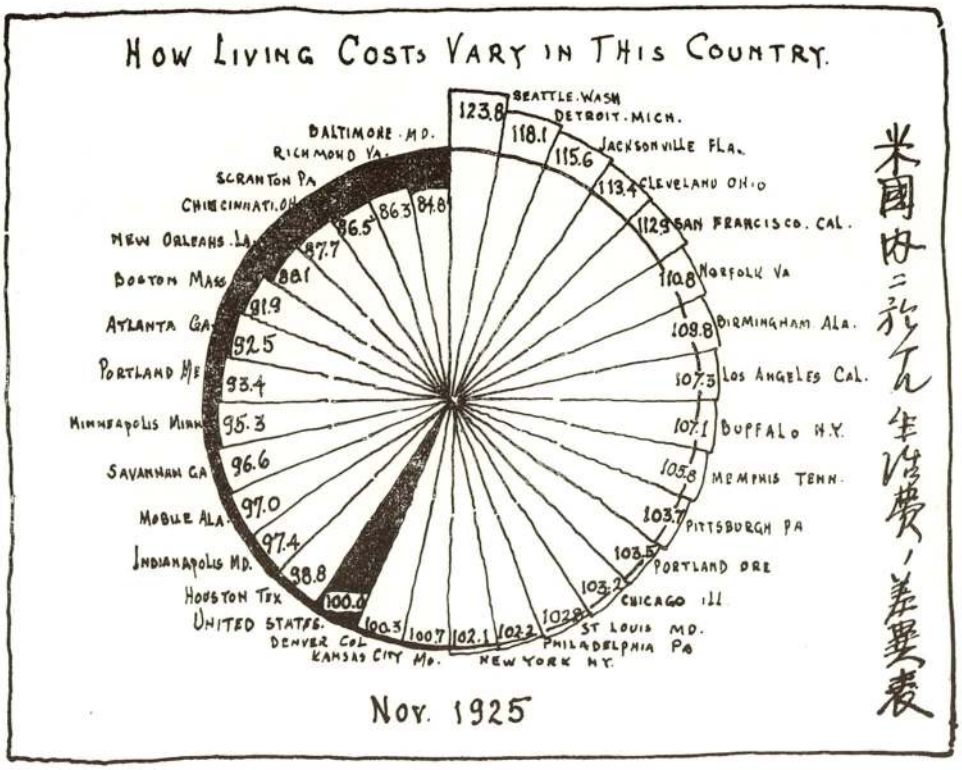
繪の如く車道の眞中に六尺角位の枠を組んで栗石を塡充し、之れからステーを取つて歩道岸でデレッキを運轉してゐるのさへあります。之等には大程或る期間交通巡査が付いて呉れる等、如何に建築が重きを置かれてゐるかが窺はれます。板圍地の外に荷下しした。山二寸の取入れが遲れたが爲め『本署』へ引出され、出頭したが最後頭から『貴樣の處は……罰金……拘留……』等さ罪人扱ひされる日本に比較すると、米國では迚ても大陸的でもあり羨しくなります。彼地では工事中は不便でも直きに立派になると云ふ觀念があるからで大いに學ぶべきだと想ひました。

▼時間嚴守　設計、現場共時間は充分嚴守されてゐます。殆ど規定時間外は働きませんし、土曜日も半ドンで切り上げます。勿論殘業する事もありますが、大體夜業等はすべきものでないと云ふ觀念が確立してゐます。而して別に急ぎも慌てもせず工程通り悠々作業する所に彼等の強味があります。而も迅速なる工程表をよく履行してゆく點は大いに學ぶべき所で、之は彼等の方針は

▼ファストヘビー　であるからであると思ひます。遣形から基礎工事や建前まで息もつがずにやつて行く。之が最も大切な點で、今日我國でやつてゐる工事の七八割は基礎工事や主體工事の始め頃は極めて徐々でやがて竣工期が近づくと急ぎ出すラストヘビー主義であります一度夜業徹夜夫の突貫をやらなきや現場をやつた樣な氣がせぬつてな風であります。此のラストヘビーといふ奴が現場の大禁物で、折角苦心してやつたそれまでの仕事がその突貫工事で臺無しにして仕舞ふ事があるからであります電燈やブランチャードの光で靜かな夜を鐵槌の音で賑はすのは勇ましくもあり景氣よくも見え、そして施主やその他が喜んだ時代があつたかも知れませんが、少くとも連日不眠奮闘で濁水に出逢つた鮒の樣な目をした現場員や職工の顏見るだけでもロクな工事にならない事を悟らねばならぬ筈で、斯種の突貫は正に技術者の恥辱と心得て、最初から計劃宜しきを得べきだと思ひます。

▼耐震構造　見ると聞くとは大變な差のある事に驚きました同じ米國でも地災の苦き經驗を持つた桑港と岩盤上に泰然たる紐育とは建築の構造に大變な相違がありました。寫眞の(2)から(5)まではその說明までに插入したものです。

▼期限の短縮　といふ事は最も深重に研究すべき事と信じます。期間が一年であるのと一年二ケ月であるのとは金利の關係も問題でせうが、地震が來る毎に修繕の費用と日數とをかけるのも亦大問題であります。既に申し上げた通り合理的に期間を短縮する事は望ましい事でありますが、今日の狀態で建坪三四百坪以上のコンクリートの建物の一階を二週間や廿日で仕上げる事はダイソレた間違だと思ひます。コンクリートを打つた翌日に墨出しをし、翌々日に早や鐵筋工が二三人掛りで大きなバーベンダーを以つて鐵筋の位置を直し始める事は、今日皆樣がお認めかも知れませんが、假りに六分の鐵筋としますと、曲げしなには徑八九分深さ五六寸のコンクリートと破壞せられて仕舞ひます。尤も之は設計に際し斯る安全率を多く見て置けばよいかも知れません。米國では鐵筋コンクリート建では冬期相當の溫熱を與へつゝ尙一週間後に非らざれば作業を始めない樣であります。それで私は特にコンクリート造建物の施行には、充分の期間を與へられん事を切望するものであります。（未完）

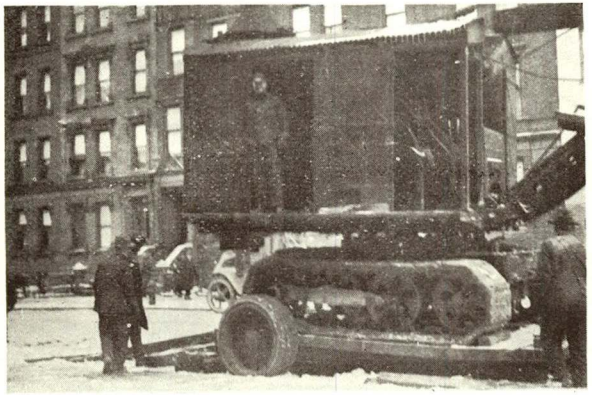


（1）



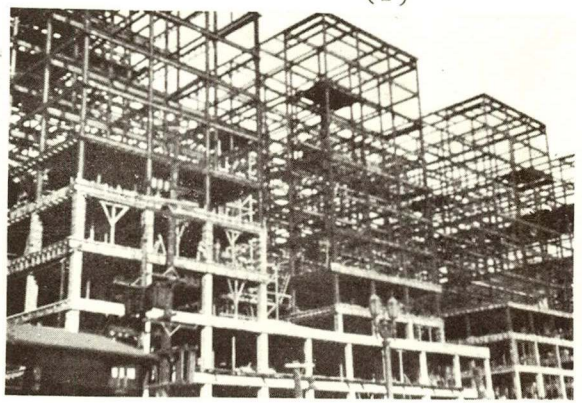
寫眞（1）は歩道及車道を使用實況を示す

(4)



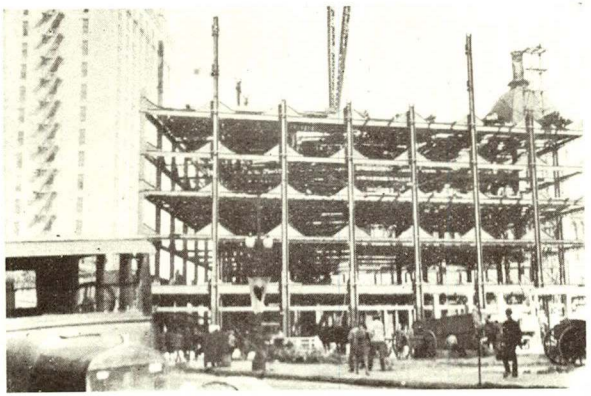
(4)は西部地方の地震を考慮せる鐵骨各隅及窓間には筋違を入れたる一例

(2)



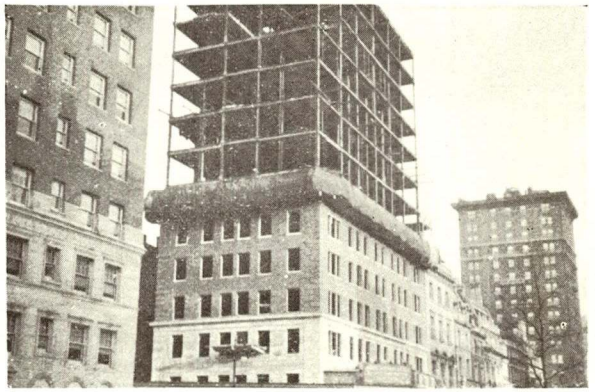
(2)及(3)は優しい米國式鐵骨構の一例

(5)



(5)は西部地方窓臺下にてアングルプレートで振れ止めを入れたる例

(3)



(6)



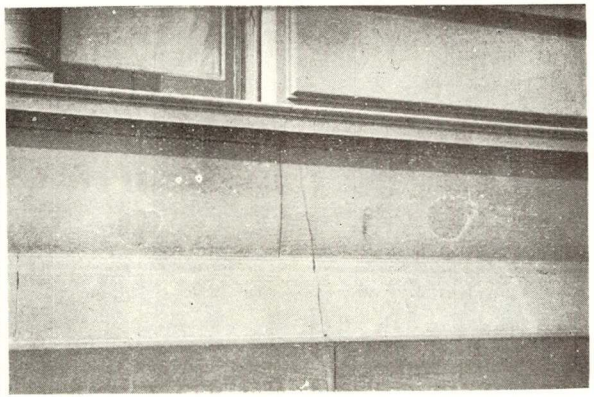
(6)紐育セットパツク光景

(7)



(7)紐育市一帶の岩盤切取光景

(8)



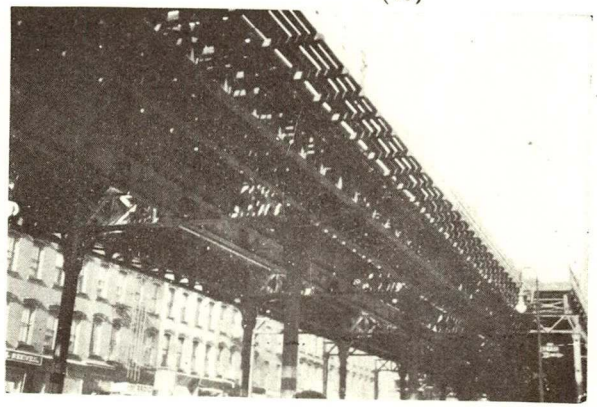
(8)紐育市の岩盤の上に建つ外壁には斯の如き龜裂が多くの建物に見受けらる

(9)



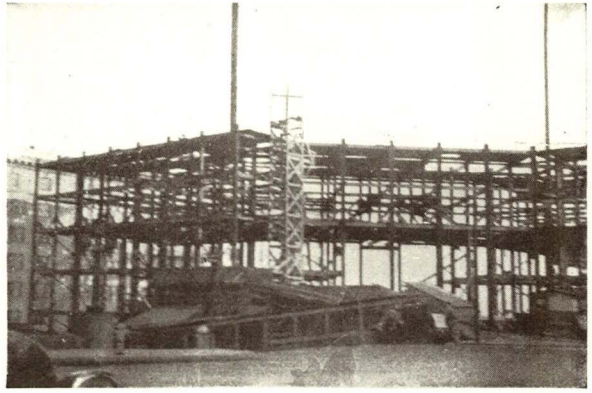
(9)紐育中央公園附近のアパートメントの實況

(10)



(10)騒がしい紐育の高架鐵道

(11)



(11)スチームシヨヴエルの荷役をすまし運搬の所

(12)

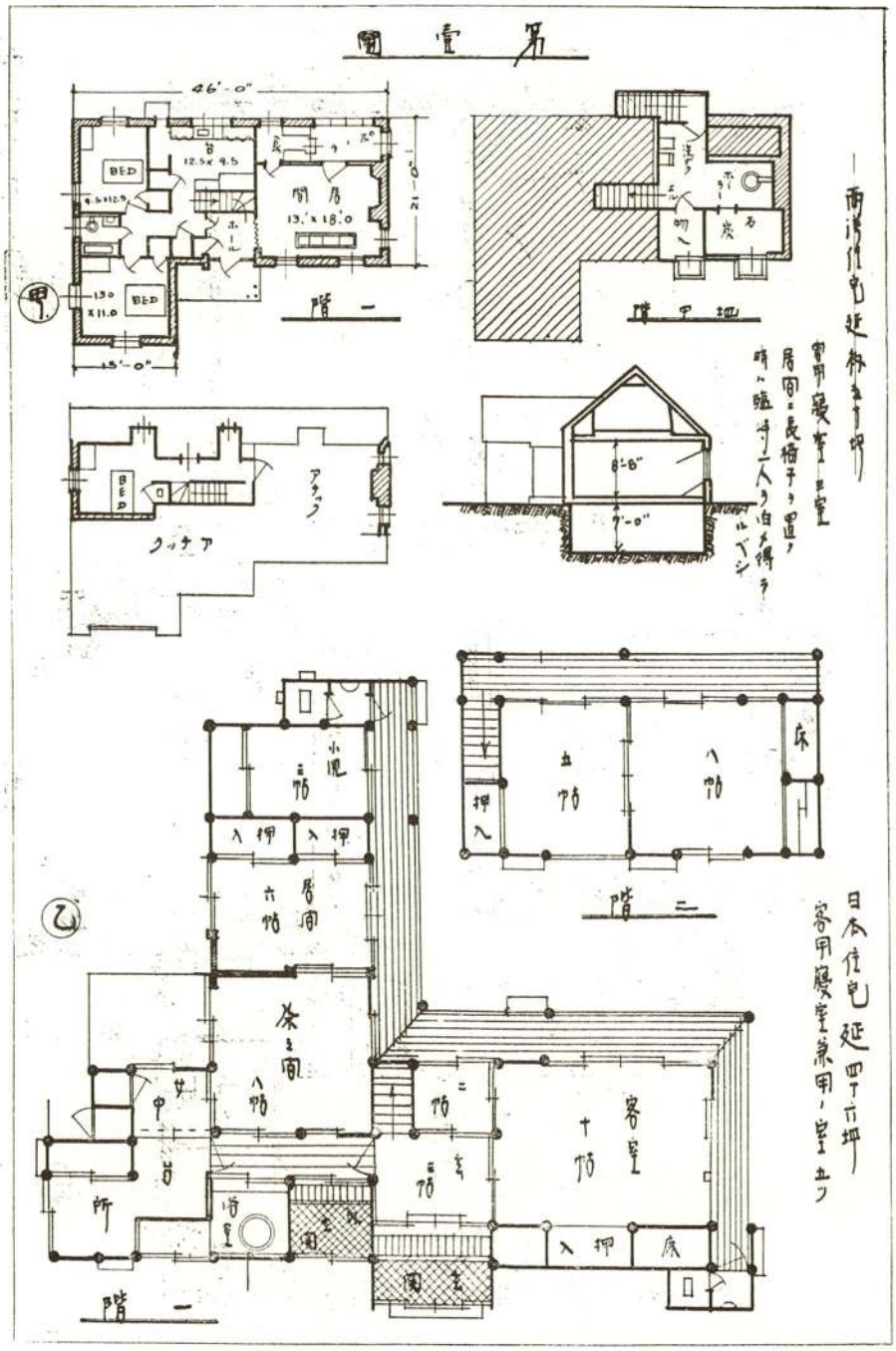


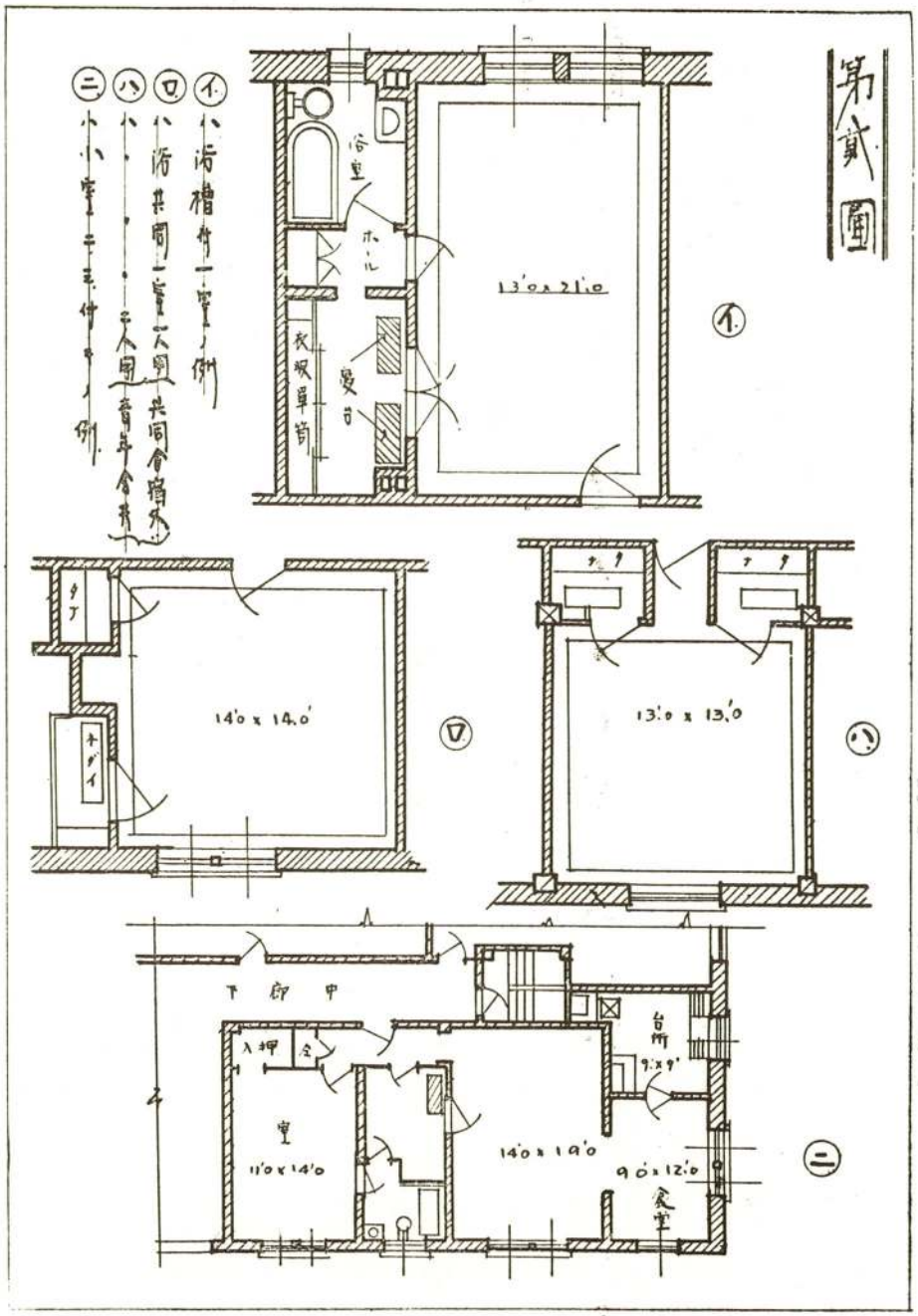
(12)次から次へとよぎれる紐育市中

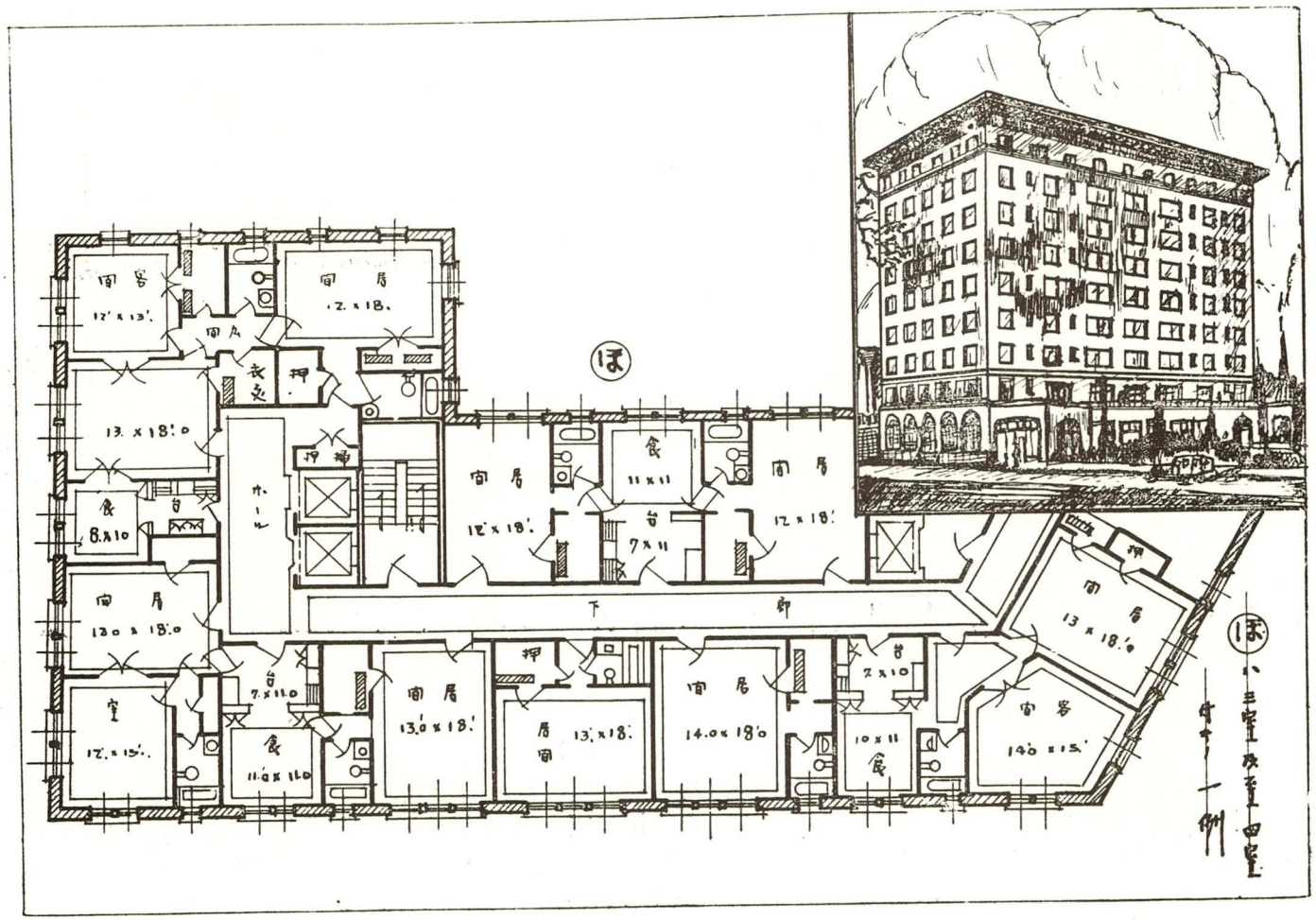
(13)



(13)ガソリン瓦斯でなやむ紐育市三丁先は見通し不可

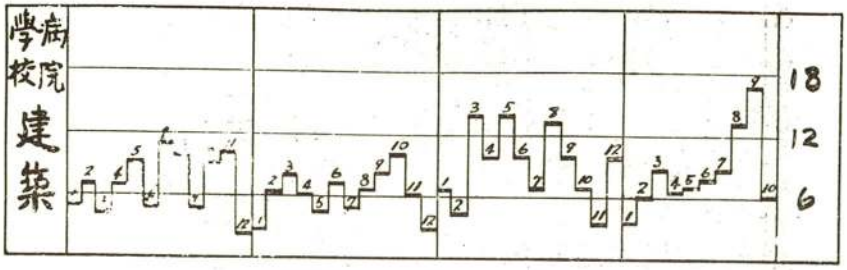

第壹圖
甲
階一
階二
屋根裏
乙
階一
階二

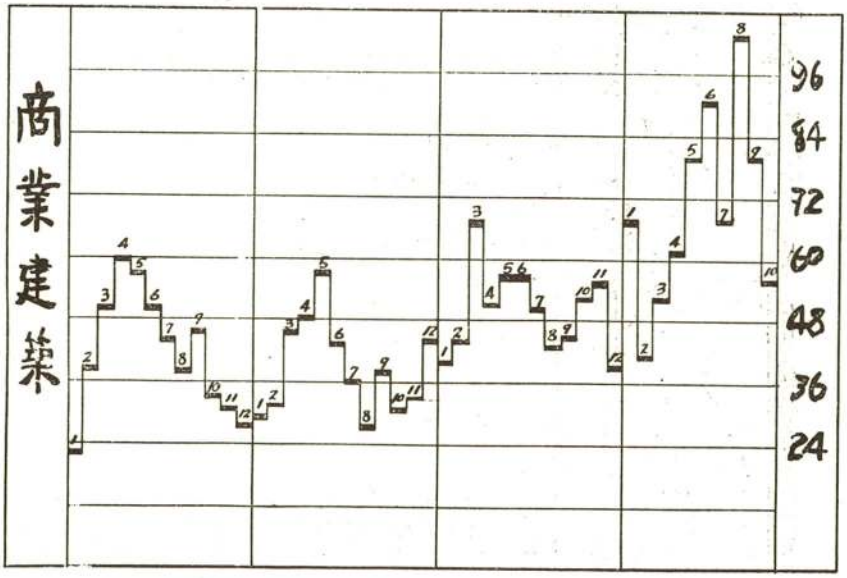

第貳圖
(イ) イ浴槽付一室ノ例
(ロ) イ浴共同一室ノ例
(ハ) イ・・・ニ共同會所ノ例
(ニ) イ・イ室ニ室伸ノ例
浴室
ホール
13'0 x 21'0
(イ)
寢室
14'0 x 14'0
(ロ)
13'0 x 13'0
(ハ)
下廊下
入押
室
11'0 x 14'0
14'0 x 19'0
台所
9'0 x 9'
9'0 x 12'0
食室
(ニ)

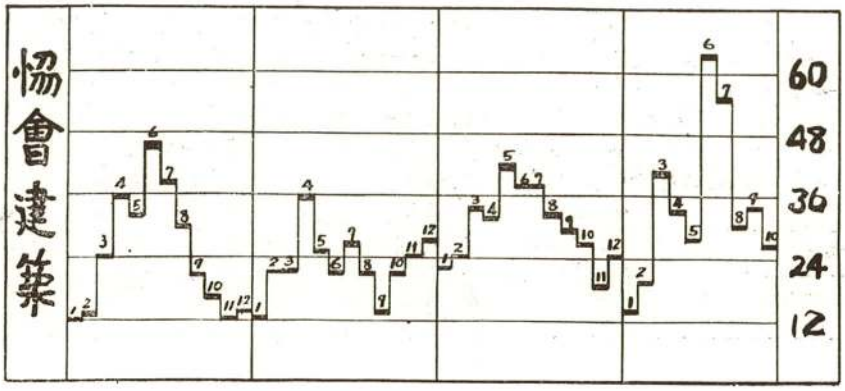

洋室
12'×13'
和室
12'×18'
13'×18'0
床の間
押入
ホール
食
8.8×10
台
和室
13.0×18'0
洋室
12'×15'
台
7'×11.0
食
11.6×11.0
和室
12'×18'
食
11×11
台
7'×11
和室
12'×18'
下
廊
和室
13.0×18'
押入
和室
13'×18'
和室
14.0×18'0
台
7'×10
10×11
食
洋室
14'0×15'
押入
和室
13'×18'0
ほ
ほ
八三室改造四室
昭十一例

過去四箇年間の每月建築費一覽

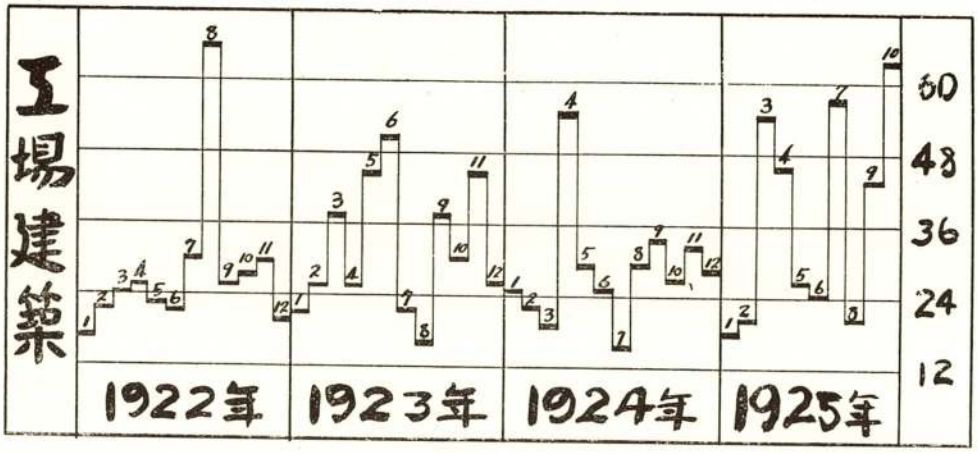
(單位百萬弗)

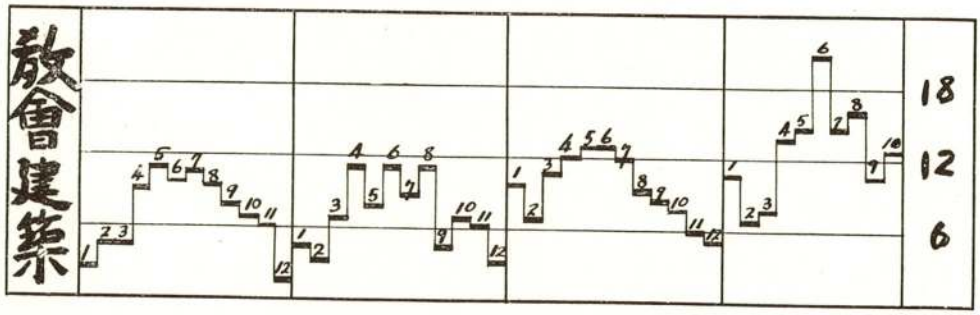


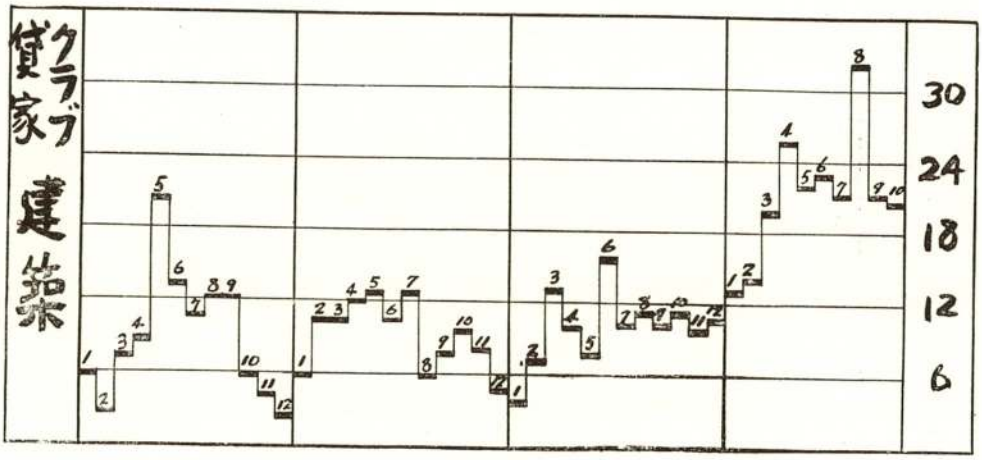




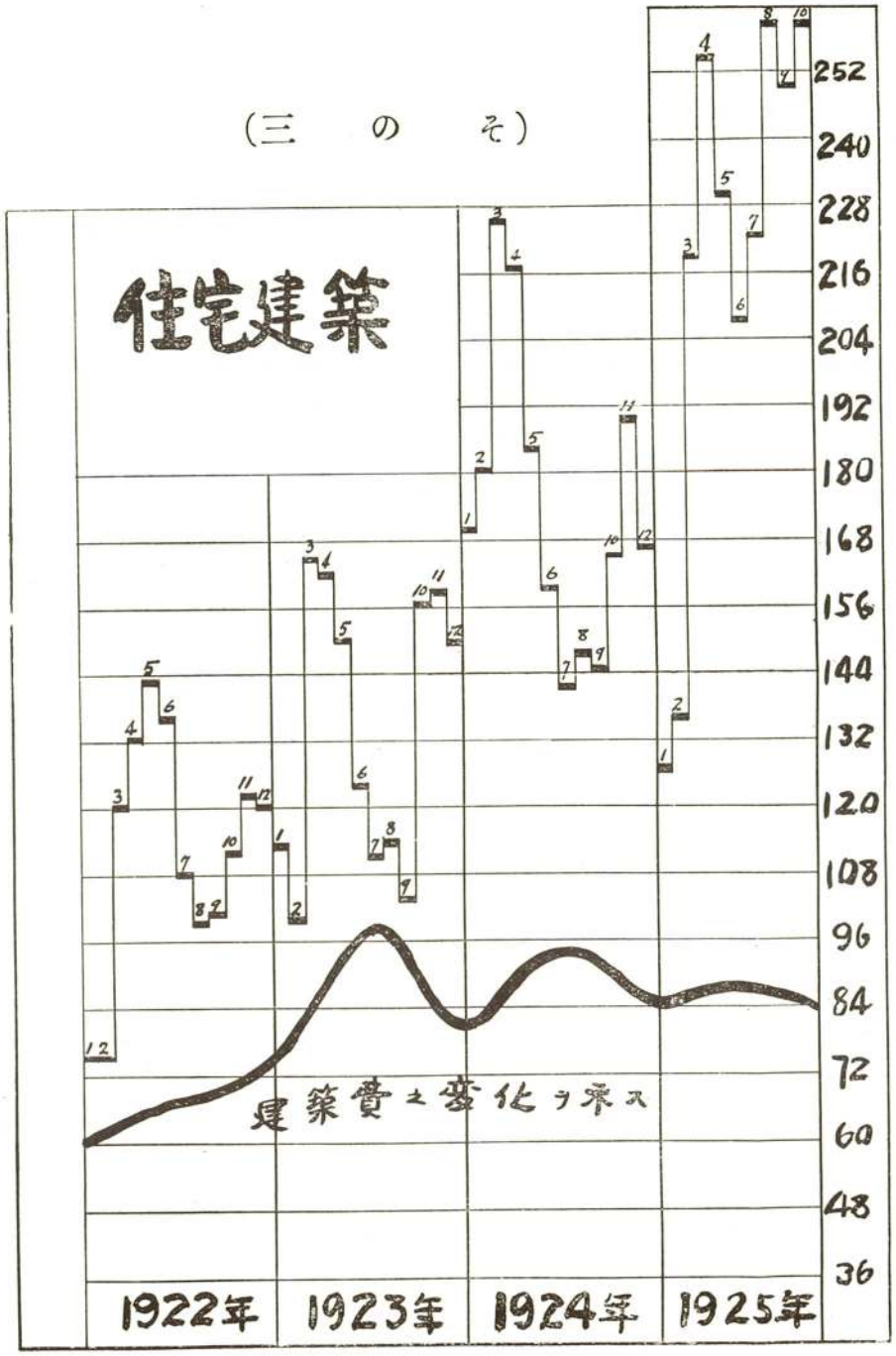
（二　の　そ）

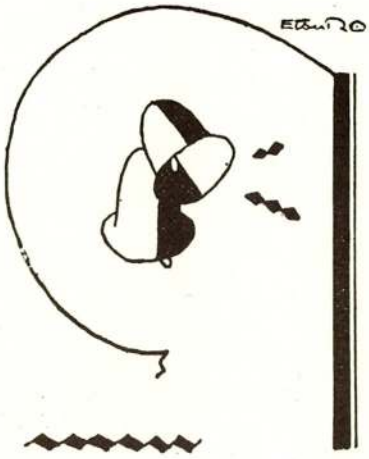

工場建築
1922年
1923年
1924年
1925年
60
48
36
24
12


教會建築
18
12
6


クラブ
貸家
建築
30
24
18
12
6

（三　の　そ）


住宅建築
252
240
228
216
204
192
180
168
156
144
132
120
108
96
84
72
60
48
36
1922年
1923年
1924年
1925年
建築費ノ変化ヲ表ス



所謂實費の範圍について
米國に於ける實狀
▼▼實費報酬加算制契約に於ける所謂實費の範圍について（二）

岡田宗一

前號に於いては實費報酬加算制契約に基く所謂實費の意義を求め、以つてワシントンの米國建築業協會（The American Institute of Architects, Inc. Washington, D.C.,）の手を經たる實費報酬加算制契約（The Cost-Plus-Fee System of Constructing for Building Construction）の一部を紹介して所謂實費の範圍に屬すべき種類を列擧し、且つ近來我國土木建築界が東に西にと益々多事多端なる時に臨んでも未だ此の契約の完全なる一般規定の存在せざるため、常に施主並びに施工者の當事者に於いて屢々隨時に契約を結んで種々なる弊害の惹起することを歎じたのである。されば、本號に於いては更に進んで日米彼我の實費の範圍を比較研究し、餘白の存する限り所謂實費に關する二三の疑問點を指摘して稍か私見を述ぶることにする。

想ふに實費――實費報酬加算制契約による實費――とは、前號に於いて記したるが如く工事完成に要する營業費を除く其他一切の費用にして報酬金算定の基本となるべきものなりと云ふことを得るのである。而して是等の費用は所謂實費の意にして直接費の主要構成分子たること言ふ迄もない。現今幾多我國土木建築請負法上に於いて行はるゝ實費報酬加算式契約の實際を見るに、施工者は概ね間接費を除きたる直接工事費の大部分を施主に代り一時立替支拂をなし、後ち施主より其額だけ償還を受けつゝあるものにして、米國に於けるが如き實費にして施主により償還さるべき實費と、施主自ら直接支拂をなす實費との明白なる規定は到底我國に見ざる處である。されば、實費中此種の實費を特に論ずる所以も其處に存するのである。

扨、日米兩國間に於ける實費報酬加算制契約による實費の範圍に就いて如何なる差異を見出すべきやと云ふに、こは兩國間の請負思想の發達の經路を辿り、或は從來の傳統的慣習に鑑みるならば自ら其間に根本的差異のあるは勿論なれども要する處我國は米國に比し施主の請負人に對する信用薄弱にして、一面に於いて請負も請負契約を以つて純然たる紳士的

契約なりとする觀念を尊重せざる傾向を有し　殊に實費報酬加算制契約による場合の如く施工者によりて最も利害關係の密接なる直接費及び間接費は、施主並びに施工者間にありて其負擔の範圍に就いて種々紛議を釀すに至り　動もすれば直接費に屬すべきものも間接費中に含まれ、報酬金算定の基礎たる實費に計上されざる場合の多きを見る。されば、現今我國實費報酬加算制契約は施主と施工者とに於いて隨時に契約を締結されたるものにして、米國の如き規約も存在せず常に不完全なる契約を維持するに過ぎざる有樣である。以上の如く日米彼我の間に於いては動かざる根本的差異あれども、今主なるものを指摘すれば次の數項を擧るのである。

一、米國に於いては工事施工上必然的關係ある現場間接費をも實費中に計上すれども我國にありては然らず。

二、米國に於いては概して材料は施主の支給なれども施工者が依然其の材料を取扱處理する以上、其の材料費は實費、計上さるものとす。反之、我國に於いては往々支給品は實費に計上されざる場合あり。

三、米國に於いては直營工事に要する費用はすべて實費に含有せらるも我國にありては左にあらず。

四、米國に於いては施工者が施主のため一時立替支拂ひたる直接工事費(實費)に對し後日其額の償還を受くるに際し其立替日より該金額の償還を受くべき間の利子を受くるに反し、我國に於いてはかゝる利子を施主により附せらるゝ例少し。

以上の四點に對し更に各々に就き些か愚見を述べたく思ふのである。

(一)現場間接費とは工事進捗上其の工事現場に於いて要する間接的、附帶的費用を云ふ、例へば

イ、給料手當及び旅費(工事現場に於ける施主者側の從業員の給料手當旅費等)

ロ、通信費　電話料、電信料、郵便費)等

ハ、租稅公課

ニ、事務用器具及び消耗品(製圖器、卓子、椅子其他の備品及び瓦斯、水道電燈、薪炭、用紙、文房具、等)

ホ、火災保險料(機械器具の火災保險料)

ヘ、雜費(衛生費、宿直料　其他諸雜費)

にして是等は前揭の米國建築業協會の實費に照らして明かなるが如く　工事現場員の給料を初め通信費、旅費、其他工事現場に於いて要する諸費用は何れも實費として計上さるに反し、我國にありては是等の諸費用は施工者が施主より受くる報酬金を以つて支辨すべき狀態となつてゐるのである。換言するならば、是等の諸費用は背間接費に包含されてゐるわけである。故に我國に於いても米國のそれに倣ひ是等の諸費用は實費中に計上さるゝ方至當であつて、然らざれば直接工費の總額に對する一定のパーセンテージを以つて、是等間接費の償還額並びに間接費に對する報酬金を定め施主より別途に受くるものなりと信ずる。尤も米國にありても施工者は自己の一般營業費は勿論報酬金にて支辨するものにして

(イ)會社組織の場合は施工會社の役員の給料、組合組織の時は施工者の組合員の給料、及び個人經營の際

は施工者の給料。

(ロ)本店、常設出張所(或は支店)に傭はれたる者の給料

(ハ)工事着手準備に要せし資本の利子

(ニ)本店及び常設出張所(或は支店)にて要する經常費

——但、前號に於いて施主より償還を受くるものとして掲載したるものは此の限りにあらず。

の如きがそれである。

而して茲に論究する必要を認めらるゝものは前記の中給料にして、工事現場從業員の給料は實費報酬加算制度に於いては果して實費なるや否やの點に就き次に少しく述ぶることにする。

凡そ工事現場從業員と云へば、工事施工上其の工事に關する直接一切の業務に從事し、そが完成を目的とし其の完成期迄工事作業の進捗と維持とに誠實堅忍とを以つて自己の腦力及び勞力を提供する者と解することを得べく、從つて監督技師、施工者側の工事現場に於ける主任事務員を初め現場傭人即ち小使、守警、或は下請人の全部及び其他定傭職工に至る迄でも包含するものにして、其中前述の如く實費報酬加算式契約にありては工事に直接關係ある傭人の給料——例へば現場警備の任に就く守警の如く、又は材料の督促、勞力の補助をなす諸職工の各世話役等の給料は勿論實費中に計上さるものなれば、此點は何等の異議も認められないのである。されば茲に云ふ工事現場從業員とは左にあらずして之れを狹義に解し施工者側の直接被傭人——現場に於ける主任、事務員以下——の給料を意味するものにして、是等の給料を如何にして支拂はるべきや即ちすべて實費として計上し施主より償還を受くべきやに就いて種々異說の存するところである。其の一つは實費報酬加算式の元來の精神を尊重し、是等の者の何れの給料をも一切實費として施主より償還を受くべしと云ふ說にして、他は之れと全く反對の觀察をとり現場主任、事務員其他の給料は絕對的に實費として計上せずすべて施工者が負擔すべしと云ふ說にして、此の二種の異りたる見解こそ興味あり且つ研究の餘地の存する所以である。殊に前記二說の中何れを以つて可なりとすべきやに付き可成り議論の沸騰を見ることであらう。扨、吾人は此の點に就いて左に解釋を下さんとするものである。即ち前說に依れば實費報酬加算式の制度に於いては、工事に要する一切の費用を實費とする以上施工者は其の傭人たる現場員——主任、事務員以下の給料をも工事に直接關係あるを以つて實費として施主に償還を求むるものなりと主張するのであつて、此の觀念は稍々もすれば實費報酬の實費を過信したる嫌ひありと非難する者あれども、其非難は正鵠を得ざるものである。何故ならば施工者の所有に屬する工事機械を工事施工上使用したる際に、其の使用料即ち損料を實費として取扱ふが如く工事現場從業員の給料に就いても、工事着手と同時に施工者は從業員を工事施工上の目的のために施主へ提供したるものなれば、彼等に對する給料も當然實費として取扱ふべく、苟くも此の制度の契約を採用する工事に直接使用されたる人員の給料は、其の何人たる

を問はず實費の構成分子なりとすることが正に當を得たるものと信ずるからである。然れ共茲に問題となるは工事現場主任即ち工事施工者の代理人の給料である。一般に最初工事契約をなすに當り施工者は自ら工事完成の委託を受けたるがため、其の現場に出張して工事に關する諸般の事項を處理する義務を負ふ。されど施工者自身は單身にして幾多の工事に對し一々其の現場に臨むことは到底不可能事なれば、此の場合施工者は自己を代理する適當なる者を選び自己の人格を與へて現場へ臨ましむるのである。之れが即ち主任若くは事務員であつて尤も其の適當なる代理者の選定に就いては、一々施主及び監督技師の承認を受くべきや勿論である。故に工事現場主任の給料をも其他の從業員の給料と同樣實費として取扱ふなれば甚しき不合理を生ずる結果となる。何故ならば實費報酬加算制度契約に於いて報酬金の本質は前號に既述せる如く、施工者の營業上の暖廉及び其の施工者自身の勞務に對して支拂はるべき金額なるを以つて、施工者の代理人たる工事現場主任の給料は當然報酬金中より支辨すべき間接費である。若しかゝる主任の給料をも實費として計上せんか、施主は施工者自身の給料を支拂ふが如き奇觀を呈することゝなるのである。而して此の場合主任は概ね代理人にして、且つ現場從事員の勞務を兼ねる二重人格を有するものなれば、一方工事作業員としての實費の償還を受くべきものなれども、代理人としての用務及び從業員としての勞務は事實上其限界を定むること甚だ困難なことである。故に其の主たる目的は代理人として且つ從屬的に作業員たる場合多きを以つて、現場主任の給料は報酬金中に含み實費として支拂ひを受くべきものにあらずと解する方至當なるわけである。然るに我國の現狀を見るに工事現場主任の給料は勿論のこと、其他の從業員の給料をも實費として取扱はず、間接費として報酬金中より支辨さること多きは眞に不合理なりと思ふのである。吾人をして云はしむるならば、前說の如き積極的なる見解をとらず又後說の如き消極的なる觀察によらずして、前記の如き折衷的解釋をなすを可とするのである。而して少くとも實費報酬加算式契約を以つて工事の完成を希望するものは、宜しく實費の觀念を尊重し信用と合理とを指南車として、施主並びに施工者が實費以外に利害關係を考慮せず、協力一致して工事の完成に勉むべきではあるまいか。

現場間接費中給料に次いで未解決にあるものに工事上の死傷者に關する費用がある。之れは請負人側の從業勞役者の工事上死傷したる場合に支出する治療費、見舞金及び弔慰料を意味し、我國にありては從來是等の費用に就いてまゝ間接費として請負人自らが負擔し來りたるが之れが實費報酬加算式の場合にありては是等の費用が直接費に計上さるか若くは別途に施主により支出さるかゞ問題である。而して其の死傷の原因が全然施工者の責めに歸する場合は勿論施工者の負擔たること言ふ迄もない例へば最近某有力なる建築會社に於いて締結されたる二三の實費報酬加算式契約の中此の費用に關する、其の負擔方法に就き次の如き種々なる規定をなしてゐる。

一、施工者が支拂ひたる從業勞役者の工事上の死傷に關する費用の內施主が負擔すべき金額は、豫め施主に提示したる施工者の其の治療費、見舞金及び弔慰料給與內規所定の範圍內とし、從業者以外の者の死傷に付いても同內規所定の最高金額の範圍とす右施主の負擔額は一切工事實費に計上せざるものとす。

二、工事中死傷者の生ずる時は施工者は自ら之れを處理することを要し、之れに對し費用を要する時は監督技師に於いて當然に認むる理由ある場合に限り、其の費用の半額を施主に於いて負擔するものとす。

三、不可抗力に起因するか、又は施主に於いて當然と認むる理由ある場合に限り、施主は其全額を負擔することあるべし。

以上是等の費用に就いては現今未だ確實なる規定なく、常に施主及び施工者との間に區々別々なる規定が締結され、從つて其の負擔の範圍も一定せざる樣である。近來科學工業の發達により建築技術の大なる進步に伴ひ、次第に大建築至る處に起り、恰かも其の數の增加に比例して是等の工事場に於ける勞役者の死傷の數は、實に膨大なる數に上り且つそれに要する費用も多額に算してゐる始末である。されば是等の費用の問題を特に此の際提起して研究の一つとしたのである。而して是等の費用は從來請負人の間接費とせられてゐたが近頃全部若くは一部分施主により負擔することゝなり殊に實業報酬の場合に於いては如何に處理すべきやと云ふに、是等の費用は全部實費として計上するか若くは實費とせず別途に施主より支拂ひを受くるものと信ずる。尤も是等の費用を實費として計上すべしとは餘りに理想的なれども、要は假令それが死傷費と雖ども工事施工上缺くべからざる支出費用であるからである。

以上吾人は日米兩國間に於ける實費を比較研究をなし(一)現場間接費、に關して論議をなしたるが餘白の關係上次回に於いて、(二)支給品、(三)直營工事、(四)償還金額に對する利子に就いて詳細に解說を試み、更に進んで最近に於いて屢々生ずる實費報酬加算制の實費に對する疑問點を論じたく思ふのである。(未完)

珍らしい建築物

京都府の東和東で發見した

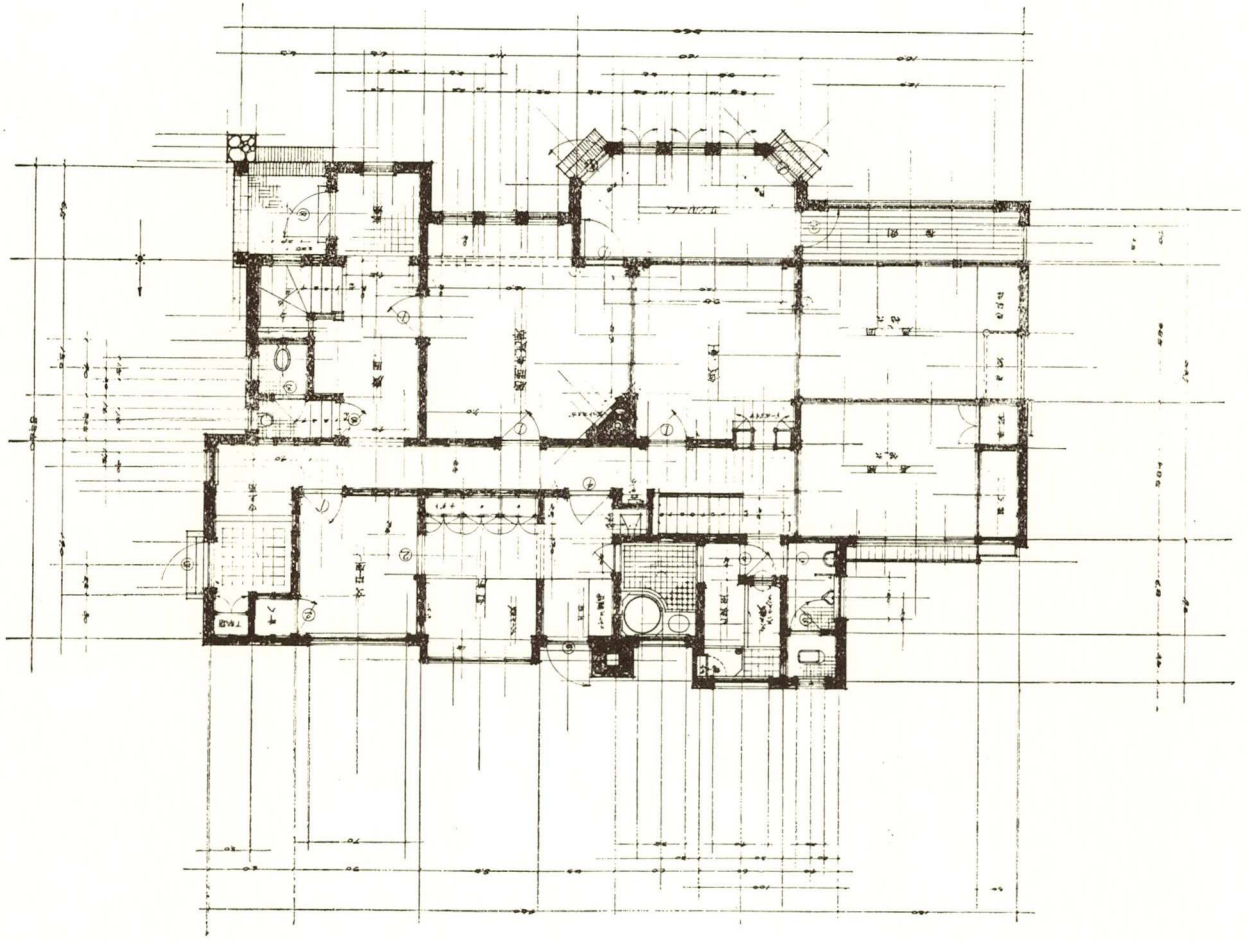
稀なる掘出し物だとの事だか右に就て宮谷技師は語る

府社寺課の宮谷技師は過般城南方面の古社寺に對て視察中だつたが從來世に餘り知られて居らぬ古社寺の中で相樂郡東和東村字園の天滿宮社殿は慥に五百年以前の建築物で流れ造りと云ふ建築方式で保護建造物たるの資格は十分あり而も古面も優秀な藤原朝時代のものもあつて近來園の天滿宮は相樂郡東和東村で有名な天滿宮で建築年代も村の人も分らず且古面があると云ふから一日同地方へ出た序に視察して來たが同社は彼の鷲峰山の下にあつて以前は餘程奈良方面と密接な關係があつたものらしい社殿の樣式は流れ造りで而も殿內は極めて美術的な彩色が施されて居り僅か三四坪の建造物だが五百年以前のものたるは疑ふの餘地なく保護建造物に入れらるべきものである尙此神社には古面があつて夫れが藤原朝時代のもので舞樂用の實に優秀なものであつたが記錄によると奈良興福寺と深い關係があつて興福寺が榮へて居た時代に寄附したものか或は讓り渡して來たものであらうが兎に角近頃珍らしい建造物の掘り出し物であつた云々



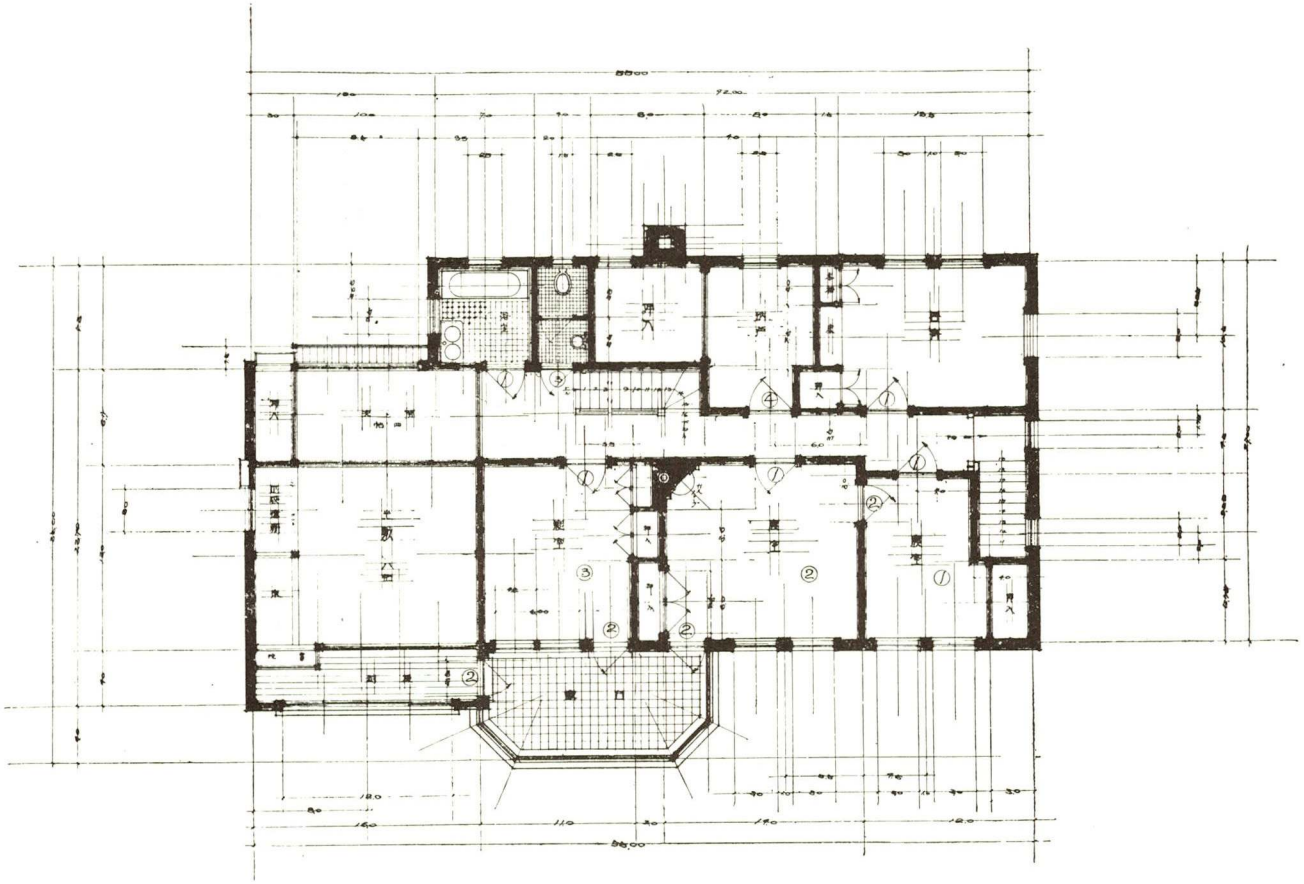
—— 案　私　宅　住 ——

（一）



一階

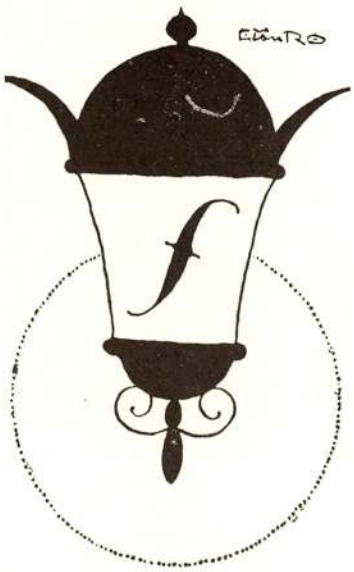
——住宅私案（二）——



二階

——住宅私案——

（三）



構造計算のシステムとチエックの方法

池田宮彦

構造計算をする人は誰でも出來上つた計算をチエックしない人は無からう。然し此のチエック程面白くない仕事はあまり他に無い樣な氣のする事もある。構造計算に少し馴れて來れば出來た圖面、又はスケッチを見たゞけで大體大きな間違の有る無しの見當は付く事もあるが、些細な點に至つては到底解るものでは無い。

構造計算は徹頭徹尾誤りの無い事が第一條件であつて、次に速い事が第二の條件である、此の二拍子はどうしても揃へなければならない、これは恰も車の兩輪の如しである。然らば如何なる順序によつて計算をすれば此の二つの條件を比較的多く滿足させる事が出來るか、即ち構造計算のシステムについて研究するのも無駄ではなからうと思はれる。次に私の述べる事が動機となつて會員諸先輩方に於て縱い一人でも此の方面の研究をせられ幾分でも仕事の能率が上れば斯界のために此の上無き幸である。

一、取扱ふ數の單位

取扱ふ數の單位は此の問題に重大な關係があるから先づこれから愚考を述べることとする。

一般に習慣上から構造計算は吋・封度單位であつて將來メートルシステムになつては糎・瓩單位であるが、然し英、米との取引のある間は恐らく吋・封度は永く殘ることと思はれる。何れにしても此等の單位は計算を取扱ふ上に於て一寸小さくて不便である、同じ事なればもつと大きい單位の方が便利でなからうか。

卑近な例ではあるが今假りに多額の金を數ふるに十錢、五錢の白銅貨で數へるのと、百圓紙幣を以て數へるのと其手數に於て後者の方が單位の大きいだけ手數が少い譯である。

構造計算に於ても同じく、吋・封度の代りに呎・噸、糎・瓩の代りに米・瓲を採用する方が非常に樂である。

例、等布荷重長さ一呎に付千六百封度張間十八呎の單梁の曲能率を求めよ

$$M=\frac{WL}{8}=\frac{1600\times18\times18\times12}{8}=777600\text{呎封度}$$

$$M=\frac{WL}{8}=\frac{0.3\times18\times18}{8}=32.4\text{呎噸}$$

但1噸2000封度トス

此の一例を見ても後者の方が前者よりも餘程計算が容易である事は判る筈である。殊に數が澤山並ぶ場合には其小數點の位置を考へるにも少からず手數が掛るが、後者の如く取扱ふ數が簡單であればスライドルールの必要もなく殆んどメノコで計算が出來て而も誤りがない、勿論小數點の打ち所にも間誤付く恐れは更に無い譯である。

茲に又頗る便利な事が鐵梁計算の場合にある。曲能率を知つて鐵梁の所要斷面を求むるには通常曲能率を單位應力度（一萬六千封度）で除して所要斷面率を求める。

$$S=\frac{M}{f}=\frac{M}{16000}$$

前例に於て

$M=777600''\text{封}$

$$S=\frac{777600}{16000}=48.60$$

此の計算は餘り簡單ではなく、スライドルールを用ゆる事が必要になる。

然るに若し曲能率が呎・噸單位であれば次の結果となる。

$S=M\times12\times2000\div16000=M\times1.5$

前例に於て

$M=32.4\text{呎.噸}$

$\therefore S=M\times1.5=32.4$

$16.2(+$

$48.6\cdots\cdots S'\text{値}^{\text{吋}^3}$

即ち頗る簡單に斷面率が求められた。

米・瓩單位の場合に於ても之れと同樣な事が行はれる。

今f＝1111.0瓩/平方糎（市街地建築物法に於ては 1150以下）とすれば次の結果となる

$$S=M\frac{100\times1000}{1111}=M\times90=M(100-10)$$

乃ち計算は簡單となる、假りに

$M=15.3\text{米}\cdot\text{瓲}$

$S=M(100-10)=1530$

$153(-$

$1377\cdots\cdots S'\text{値}^{\text{糎}^3}$

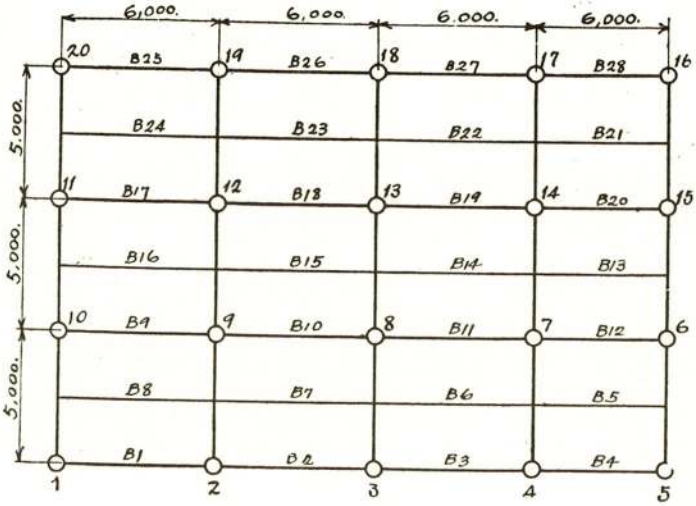
此等の計算にはスライドルールも亦算盤も不必要であつて、只筆算で極めて樂に間違ひなく出來るのである。

これ等に依つて知らるゝ如く取扱ふ數の單位を大きくし取扱ふものを小さくする事に依つて總て計算は簡單になり、又誤りもなく（誤りがあつても直ぐ發見出來る）不必要な零を澤山書き列べる手數と時間とを大いに節約する事が出來る。極めて僅かな時間でも之れが積り積つて長い間には可なり大きな差異が現れて來る。計算を行ふに乘、除の手數と加減の手數とは大きな差異がある、故に乘、除をなす代りに之れを簡單な加、減に取扱ふことに依つて手數と勞力とが節約出來るのである。

二、床梁の計算

計算のシステムを述ぶるに方り說明を簡單にするために、今計算を行ふ建築は第一圖に示す如き長方形の事務所建築と

する、即柱は五米、及六米間に二十本建ち、之れに床梁が等間隔に架つて居るものとす、此の平面圖は柱と梁との位置だけを示したものであつて、建築として必要なる階段室、エレベーター室、或はパイプシャフト等は説明を簡單にするために略する。計算に必要なるデーターを次の通りに假定す。



一、床は版、梁共に鐵筋コンクリート造とす。

一、大梁は柱に固定せらる。

一、小梁は大梁上に支へらる。

一、床の動荷重を毎平方米三〇七瓲とす。

一、壁及同仕切を省略す。

床の荷重表（第一表）

	死荷重	動荷重	合計
床版	五五〇	三七〇	九二〇
小梁	六一〇	三三三	九四三
大梁	七二五	三〇〇	一〇二五
柱	七二五	二六〇	九八五

動荷重は市街地建築物法によつて小梁には一割を、大梁には二割を、柱には三割を減ずる事を得とあるを以て之れを採用す。

死荷重は床版に於ては下階天井のプラスター、版のコンクリート床被覆物、及リノリューム等の總重量。小梁に對するものは床梁の重量を版重量と共に床全面に割當てたる單位面積の重量。大梁に對するものは、大梁の重量及小梁の重量、を版の重量と共に床全面に割當てたる床單位面積の荷重である。

次に床版の鐵筋は小梁に直角の方向に配置せられてあるものとす、故に床荷重は小梁に等布荷重となる。計算に便宜の爲め次の表を設ける。

梁單位長さに對する荷重表、瓲、（第二表）

荷重 ＼ 床版張間	床版	小梁	大梁
米	瓲	瓲	瓲
1.25	1.15	1.18	1.28
2.5	2.3	2.36	2.56
米	瓲	瓲	瓲

但瓲＝1000瓲

此の表は床版の張間が二・五米及其半分の時に床小梁の單位長さにかゝる荷重を瓲單位で表したものである。從つて若し床版の張間が此の外に種々あれば其種類だけ豫め計算して用意すると便利である。

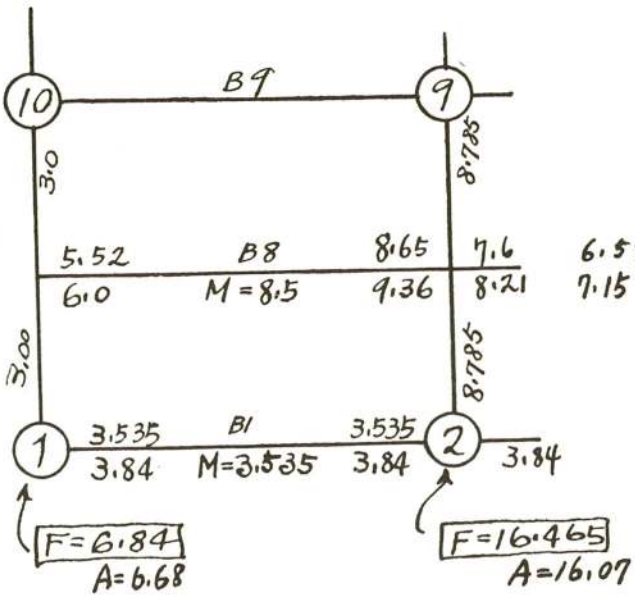
さて計算を始めるには第二圖の如く梁の配置圖を百分の一、又は五十分の一縮尺で畫いて（本圖は其の一部分を表したもの）計算をなしつゝ其結果を書き込んで行くのである。

1、2、3…等は柱及梁の番號である、梁の兩端には其の

點の最大剪力(反力)中央部には曲能率等、を書き込むのである。

床梁(B1)

第 11 圖



總荷重は第二表より

F=1·18×6=7.07噸(Fハ床荷重ヲ表ハス)

∴反力=3.535噸

又曲能率は

$$M=\frac{FL}{12}=\frac{7.07\times6}{2}=3.535\text{米}\cdot\text{噸}$$

而して梁が柱に取付く場合には、之れをすべて、大梁と看做したる反力を有するものと考ふ、即小梁(B1)は其兩端、柱に固定するを以て再び第二表により

F=1.28×6=7.67

∴反力:=3.84噸

此の結果を第二圖に書き入れる、(梁を表はす線の下へ)

床梁(B8)

床梁5、6、7、8、は四等經間の連續梁であるから各徑間の反力は第三圖に示す通りとなる(最左、右、端は單に支承せられたるものとす)

故に第二表によりて

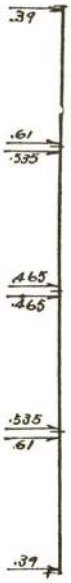
F=2.36×6=14.17噸

$$M=\frac{FL}{10}=\frac{14.17\times6}{10}=8.5\text{米}\cdot\text{噸}$$

左端の反力=14.17×.39=5.52

右端の反力=14.17×.61=8.65

第 111 圖



又此の梁は大梁(2)—(9)及(1)—(10)に取付くを以てそれ等大梁の計算の便宜の爲め此の反力を大梁に對する荷重によつて算出し置く、

左端の反力=2.56×6×.39=6.0

右端の反力=2.56×6×.61=9.36

即此等の結果を第二圖に書き入れる、これも梁の上へ小梁としての反力を、下へ大梁荷重を書き込む。

更に小梁(7)を計算すれば

小梁としての反力　14.17×.535＝7.58

14.17×.465＝6.59

大梁としての反力　2.56×.535＝8.21

2.56×6×.465＝7.15

此等の値も直ちに第二圖に書き加ふ、次に大梁(2)—(9)の受ける荷重は既にこれ迄の計算にて第二圖に明らかになつて居る通り、其中央部に左より九・三六𥫱を、又右より八・二一𥫱を受けて居る。故に其曲能率は直ちに算定せられる。又其の柱に取付く部分の反力は

F＝½(8.21＋9.36)＝8.785𥫱

斯如き順序によつてすべての梁の反力及曲能率を算定して行く即ち第四圖の全體平面圖の如し。

こゝに於て圖に見る如く柱(2)に取付く梁の荷重(反力)は

F＝3.84＋3.84＋8.785＝16.465𥫱

さて床一平方米の大梁荷重は一、〇二五・瓲であるから逆に一𥫱は床〇・九七六平方米に相當すと云ふ事を得、

故に柱(2)にかゝる荷重(F)が一六・四六五𥫱なるを以て此の柱にかゝる床面積(A)は、

A＝0.976×16.465＝16.07平方米

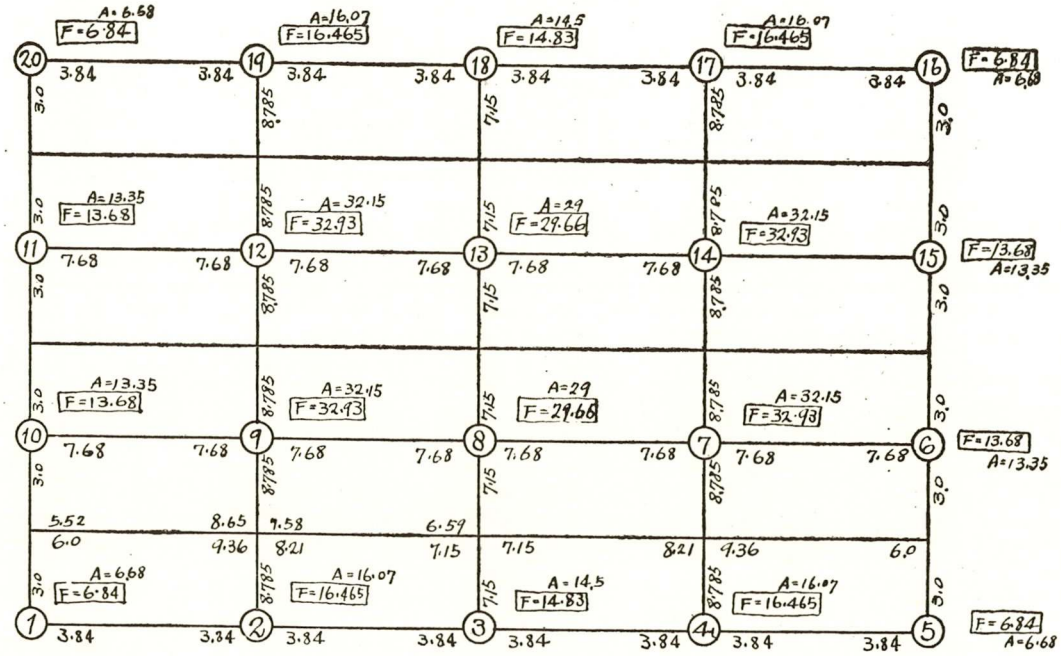
これを第二圖に記入する。

斯如く漸次計算を進めて行けば其の結果は第四圖の如くなる

但し本例は曲能率並に梁斷面の算定は一部分に止む。

さてこれにて床梁計算の順序が明らかになつたのである、が梁計算のためにかくの如き特殊な方法を採つたのは次に計算のチエックを行ひ進んで柱の計算に移る便宜の爲である。

第四圖



A＝40.06　A＝96.44　A＝87.0　A＝96.44　A＝40.06

$$\Sigma A = 40.06 + 96.44 + 87.0 + 96.44 + 40.06$$
$$= 360.0 \text{ 平方米}$$

今第四圖を見るに各柱には柱にかゝる荷重(F)と其の柱が受ける床面積(A)とが算定せられて居る。依つて此れ等の柱の床面積を合計せば此の建物の床面積が知れる譯である、然るに別に此の平面圖より建物の間口、と奥行とが明らかであるから此の寸法よりも床面積を算定することが出來る、而して此の二つの方法によつて計算した床面積は一致すべきものである、勿論建物内に中庭(採光庭)等あれば其面積を除外する。

本例に於て(A)の合計は第四圖の下部に示した如く三百六十平方米となる、建物の大さより床面積は、

24.×15.=360平方米

即ち此の二つの計算は全く合致した、故に本例の床梁計算には誤りが無い事が明となり、これにてチエックは出來たのである。然し本例がかく正確に合致したのは寧ろ遇然であつて何れも斯く合致するものでは無い。多くの場合にスライドルールによる誤差が出て來るものであつて、それが二百分の一以下であれば差支へのないものとして置くのである。少し氣を付けて計算すれば此の誤差を十吋のスライドルールを用ひて、五百分の一以下にする事が出來る。

さて次に此のチエックのために算出した床面積(A)の値は直ちに之れを柱の計算に應用するのである。(未完)

住宅問題を 一婦人が解決した

どこの國でも中流階級の住宅問題は不斷の惱みの種となつて居る借家もいゝが家賃が高くて永い間には莫大なる失費となる、さればと云つて自分で家を建てやうとすれば、夥からぬ金が必要で一寸容易には手を下しかねる、何とかこれをうまく調節して、住宅問題を簡易に解決する方法はあるまいかとは、獨り日本だけではなし、あらゆる國の中流生活者が眞摯に考へて來て居る所の問題である。

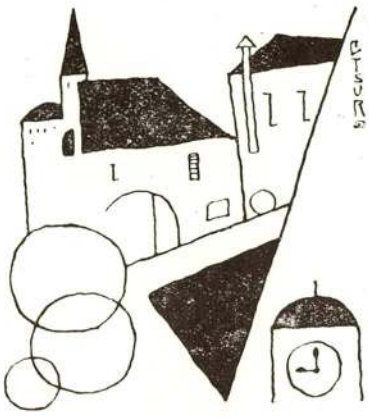
しかしこれを解決する道は結局安く家を建てる方法を案出する事このこと以外にはない、これについて最近英國にあゝ特志の婦人技師が出て大に中流階級生活者の利便の爲めに氣を吐いて居る、婦人の名はジー、エッラ、ウヰルワンス夫人と云つて、ヨークシヤイアの人であるが、僅か四百磅で理想的な家を設計し、其恩惠を受けて安くて良い家を持つことを樂しみ得る人が續出するやうになつて來た夫人は元來職業として住宅設計をして來た經驗はないのであるが、早くから中流階級の住むに適した家が從來餘りに不經濟に設計されて居ることを遺憾に思ひ、何とかしてこれを適當に編み出したいと苦心した結果昨年の夏、限られたる小さい資金で、便利で住み心地のよい家を案出したわけである

夫人の設計に成る家は、從來のものとは大分趣が變つてゐる。が住心地と云ふ點は充分に考慮して寢室が三部屋、それに居間、臺所、浴場といふ間取で、廣間などは無駄だからと造らない、つまり必要なだけのすべての部屋を充分とつて、しかも費用を安く上げやうとするのである、最もこれにはチエンバーレン法の適用による住宅一戸について八十磅だけの補助金をうける特權を利用しては居るが、それでも一軒當り英國で僅四百磅出せば立派な家が出來るわけなのである。

この夫人の設計はいたる所で歡迎をうけて、昨年の夏以來すでにハリハツクス其他に二十七戸の住宅が立ち、五十九戸が今や將に出來上らうとしてゐる、實際これに住んだ人は、いづれも安い價で住心地の良い家が手に入つたのを悦んでゐるさうである、夫人はこれに勢を得て更に新しい土地に新しい設計を試みて澤山の家を建て、それを安い價格で分讓する計畫を立て居ると云ふことである

日本にも住宅建設の爲めには低利資金の貸付方法等もある。しかし此資金を低利に活用するかは、存外研究されてはゐない、低利の金によつて、妙な不經濟な無駄の多い家などが建つてゐるのを見る毎に、ウヰルソン夫人のやうな眞劍な設計者の出現がほしくなつて來る。

(下田將美氏)



大戰後の住宅難と新住宅群の建築

▼中歐の建築界に就いて（二）

上野伊三郎

近代の國際的商業競爭が生んだ大悲慘事たる、歐洲大戰が終つて、日本と米國を除く交戰各國は勝敗國いづれも思想的經濟的に、大打擊を受け中にも露、獨、墺いづれも革命が起つて王室は或は弑され或は國外に追放されるといふ悲劇を起し思想の動搖、爲替相場の慘落によつて國民生活の脅かさるゝこと想像も及ばざるものがあつた、加ふるに住宅難は各都市を襲ひ强制貸間制を行はざるを得ざるの狀態を惹起した。

即獨逸及墺國に於ては住宅局（Wohnugsamt）を設けて既存住宅の間數を調べ上げ、必要以上と認められる室數を有する家族には殆んど强制的に之を貸與せしめた、即ち住むに家無きものは住宅局に之を屆出れば局はそれ〴〵貸間なり家なりを指定して之に住はしめると云ふ狀態であつた。

家賃の如きも、最高限度を定めて、借家人を保護した爲め低廉なる家賃では金利に合はないので誰も進んで貸家を新築するものが無くなつたのでドイツでは最近此家賃最高額を引き上げたといふことであるが墺國ではまだそのまゝにしてあるので公共團體は自ら住宅建築に努力してゐる有樣である。こゝに一例としてウキーン市を擧げてみよう。

一九〇五年から一九一三年に至る間の平均人口は二、〇三一、四二一であつて之に對し年々個人的の建築は平均九二〇六戸を增しつゝあつたのである。然るに、一九一四年に至つては、既に戰爭の危機に臨んで居た爲め、建築數は激減を示し、開戰から一九二二年に到る間に於ては、住宅の個人經營の如きは、全然考へる者が無くなつた。

一九一〇年に於てウキーンは二、〇三一、四二一の人口を有して居たに拘はらず、住宅難を感じなかつたのであるが、一九二〇年には一、八四一、三二六の人口、即ち約一割を減じてゐるに拘はらず、住宅難を感じるに至つたのは、一見不思議なようであるが、一度び結婚數の統計に注意すれば、斯の理由は發見さるゝのである、即戰爭の爲め全國の青年子女の結婚が妨げられてゐたのが戰爭終局と同時に爆發的に結婚し始めて、西洋の習慣に依つて結婚と同時に親の家からは分離

して一世帯を初める爲めに世帯數は激增した。役所の調べに依れば

結婚は左の通りの數を示してゐる

一九一〇	一八、七一三組
一九一一	一九、二八〇組
一九一二	二〇、一二七組
一九一三	一七、七九一組

然るに戰後に於ては

一九一九	二六、一八二組
一九二〇	三一、一六四組
一九二一	二九、二七四組
一九二二	二六、五六八組
一九二三	一九、八二七組
一九二四	一八、七一三組

であつて戰後直後は激增し再び一九二三年より普通の數に復しつゝあるのである。一九二四年の數は偶然にも一九一〇年の數と一致してゐる。戰前の平均結婚數に比して超過してゐる數は三七、八六〇組であつて此數は殆んど正確に住宅新希望者の數に一致してゐるのである。

住宅難の他の一つの原因はウキーンの戰前に於ける住宅が甚惡い狀態にあつたことで、即無法に高い家賃と不完全な住宅の多かつたことである。勞働者や通勤階級の人々は平均その一ヶ月の全收入の四分一を住宅の爲めに支拂はねばならなかつた。そしてその住家たるや不滿な坪數と乏しい設備で辛うじて住み得たと云ふ狀態であつた。更に又此高い家賃は此不滿足な住家を又貸しするの止むを得ざるに到らしめた。

戰後の物價の混亂及家賃を制限する借家人保護法によつて制限せられた家賃の限度は家主が到底貸家を新築しては引き合はない程度となつた。然し之が爲め借家人の負擔は輕減せられ今迄餘儀なく貸した又借り人を斷り又成る可く獨立して一家を借りようと云ふ風潮を來し、住宅の利用に於ける人數の密度は戰前に比して甚しく減少を示し、良好なる結果を擧げてゐる。

此事柄は殊に小住宅に於て著しく中流階級の間にあつても商業上の不景氣によつては家の一部を又貸しする爲めに大なる住宅を要したもの等もあつた。今少しく戰前のウキーン住宅の狀態について述ぶれば、戰前に於ても家庭的立場から及健康上、又風俗上の立場から住居改善に關して救助が叫ばれてゐたのである。

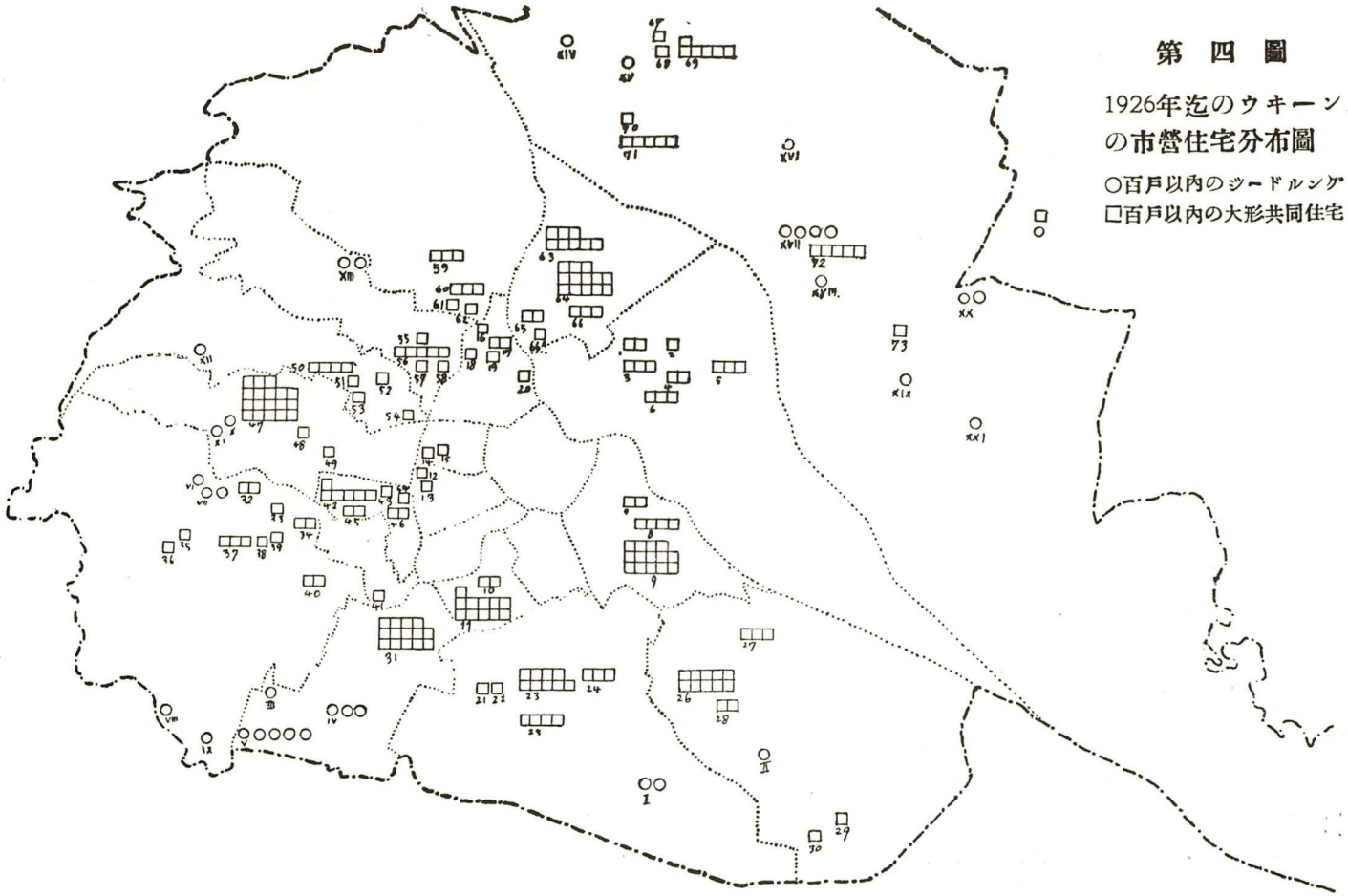
即採光、通風の不完全なること、便所等が圍まれた家の內に存在すること、等々、實に不愉快な狀態であつて、一住居の間數の如きも左の統計の示す如く貧弱なものが多かつた。

即、一九一七年四月の調べによればウキーンに於て實際使用されてゐる住居總數五四六、二九六戶の內

部屋(窓一つを有するものを斯く名づく)一つより成る住宅……二九、四八三	
室(窓二つ以上を有するものを名づく)一つより成る住宅……一〇、二九四	

之等のものは獨身者用に供せられたものであると見做して除外するとしても

部屋一つ、臺所一つより成る住宅	三六、七七五
室一つと臺所一つより成る住宅	一八四、九九九

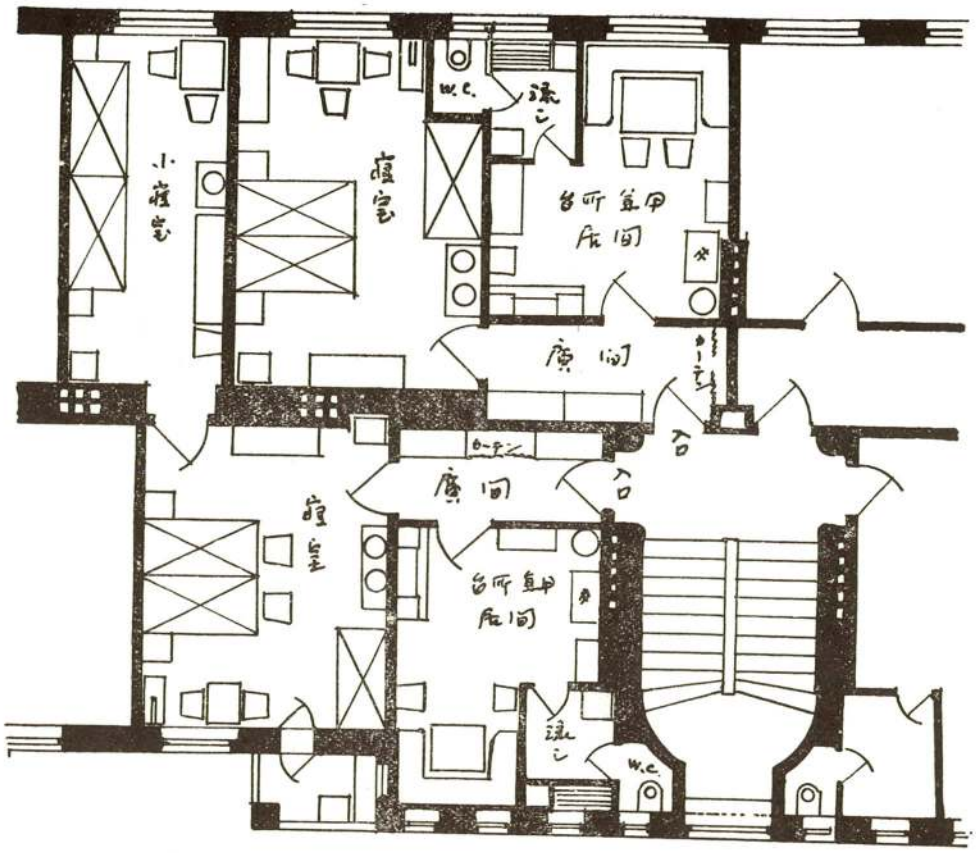


第四圖

1926年迄のウキーンの市營住宅分布圖

○百戸以内のジードルンゲ
□百戸以内の大形共同住宅

第五圖



ヴォーン　アクセンフェルドホーフ市營住宅に於ける
間取りの例

室一、次の間一、臺所一、より成る住宅　九、〇三一
室一、部屋一、臺所一、より成る住宅　一〇八、二七三
室一、部屋一、次の間一、臺所一より成る住宅　二〇、六二八

之等の合計は三九九、四八三であつて全住宅の五四六、二九六に比し約七割三歩を占めてゐる。

四室以上を有する住宅は富有なものから宮殿迄も込めて只の一九、九五七戸であつて全戸數の〇、三六六割に當り外國に於ける之等の比に較べて甚しく低い住居狀態を示して居る。

又戰前の舊建築法に於ては直接日光にあたらない臺所や狹くて風通しの惡い直射日光の差し込まない中庭に面して建つ小住宅等も許されて居た、之等の臺所を通り抜けねばならなかつたり室を通らねば他へ行けないような間取りの小住宅に數人の家族が住むのみならず他人に間貸しさへすると云ふ有樣で肺結核其他の傳染病に對する危險は甚しく、一方に於ては斯る狀態に於ける青少年の敎育にも甚しき困難、弊害を生じ犯罪の根源を造つたのであつた。そしてかゝる住宅の地中階にあるものゝみでも實に五九八戸以上に上つてゐた

のである。

之等の惡い狀態を善くする爲めウキーン市は

一九一九年　三八六戸
一九二〇年　一〇五戸
一九二一年　一三七戸

の住宅を新築した、其一部は戰爭の終局に伴ふ戰時用バラックや兵舍を改造し又大邸宅を區分することによつて出來たものであつた。然しこういふバラック風のものは年々來る腐朽によつて追々使用に堪へないものを出しその數は漸次減少するに到つたので住宅難緩和に對する効果ある闘ひは此方法に依るのでは到底不可能であると云ふことが間もなく明かとなつて來た。

そこで一九二二年五月一日にウキーンは一般の家賃稅を制定したのである。（未完）

家の新らしい設計

市中と郊外との區別

東京の市中や郊外に新しい住宅が盛んに建てられる。歐米のスタイルをそのまゝ模したもの日本趣味を加味したもの、洋風と日本造りとを其まゝつけて建てたもの、然も是等の多くは、吾々を成程と肯かせない、それは外觀美よりも敷地の問題が理解されてゐないためである。

敷地の位置、周圍、大さ形ち、方向、これ等は設計上極めて重要な問題であつて其處から出發して考へて行くと、その家はどうしても斯くあらねばならないと言ふ所の解決まで行く。

敷地の問題から自然と市中の家と郊外とが差別されて來る。二つは外觀も内容も異つてゐなければならない筈だ、市中では面積も限られてゐる周圍に家が建込んでゐる。そこにめい〳〵が高い塀を圍らして、小さな庭を造つたり、鼻の先が支る樣な所に緣側を廻したりするから東京は大きな村落だと言はれる事になる。

あつさりした外觀、引締つた間取りに、數少くても便利な部屋を作る。暖房、換氣等、所謂文化的設備を完全にしたい。庭の足りない所は陸屋根を使ふ。若し各階を變化ある段々に作つて、二階からは一階の陸屋根、三階からば二階の陸屋根の庭に出られる樣に設計すれば市中の家としての特長、を最も發揮したものだ。

郊外では地所もゆつくりしてゐる。周圍に樹木も多い。此處では出來る限り手足を延ばした家が出來る。四角に積上げるよりも低く這つて土に親しみたい。外から見ても周圍の自然と調和したい、内からは底も周圍をも利用の出來る樣に設計したい。此處では陸屋根の庭を敢て必要としない。屋根を十分に延ばして、その下にポーチもサンポーチも取る事が出來る。高い塀は最も面白くない

（士浦龜城記）



現代的墓地園の施設

都市と現代的墓地（三）

椎原兵市

大都市の墓地を、風致衛生上から將又故人尊嵩の觀念から所謂公園的墓地園を建設するには、如何なる内容を具備せなければならぬかと云ふに、先づ整然たる埋葬區劃、道路、廣場、植樹帶（芝生を含む）が大部分の地域を占め、次に壯麗なる禮拜堂、納骨堂、火葬場、事務所、休憩所、管理人住居、物置、溫室、花畑等の設備に至る迄完備せなければならぬ。今之れを順次説明すれば

埋葬區劃（ロット）の分類

從來我國では田舍等で見受けられる自分の持山の麓に代々の墓地を築造し大世襲墓の外は、概ね埋葬場所の區劃割や分類をされたものはなく、僅かに近來に到りて出來た大都市營の墓地で場所の等級によつて一等地、二等地と規定されてゐる位である。然るに獨逸等の共葬墓地では左に示すが如く更に年齢に依りても區別されてゐる。

一、列墓（雜居墓）成年者、小兒、乳兒
二、選擇墓　一等地、二等地
三、世襲墓　一等地、二等地

列墓は所謂雜居墓で三四尺の通路を距てゝ相向ひ合ふて配列されてゐる。普通選擇墓は特に道路又は通路に面した區劃

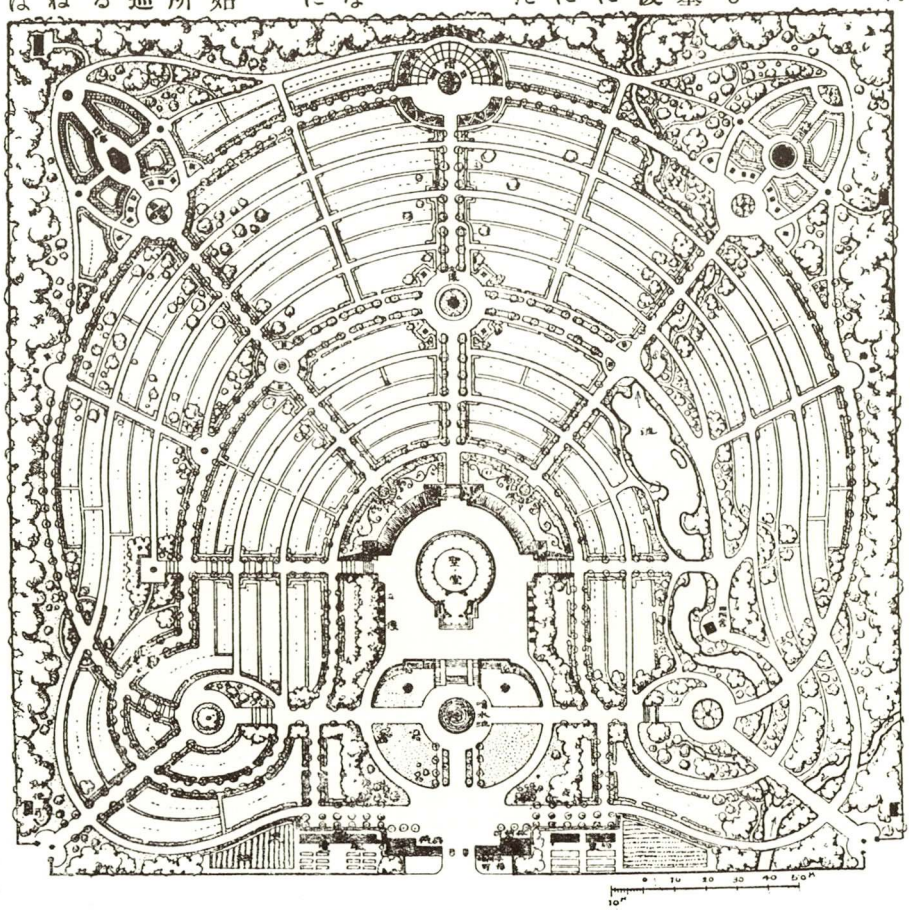
で表通りに面したものが一等地で側道或は通路に面したものが二等地であつて、これが又多くの場合に雜居墓を圍んである。

家族墓は云ふ迄でもなく、我國の世襲墓で先祖代々一つの墓基に埋葬されるものである。

然るに我國狀から見ると大都市では選擇墓（世襲墓も含む）に一二等の差別を附し、中央部に列墓即ち雜居墓を設ける事が適當にあらずやと考へられる。それには後段に述べるが如く約五十間方の大區劃の中で主幹道路に接した面を選擇墓の一等地となし、側道即ち補助道路に接した面大ものを同二等地となし、一二等地に圍まれたる中央部に通路を設けて雜居墓とするのである。

道路系統

都市計畫に於て、道路が主要な要素をなしてゐる如く、墓地を設計する場合にも第一に通行の問題を考へねばならぬ。園路を分ちて主幹道路、補助道路、通路と分てば、主幹道路は正門或は側門に始まり各大ロットの一邊或は二邊に接し更に禮拜堂事務所等に連絡し園を一巡回（大墓地では二巡回も）する大巡回路である。その出發點たる正門は都市に連つてゐる主要街路の方向にあつて最も通行に便利な所を選定せねばならぬ。また主幹道の交叉點は必ず花壇、噴水池或は紀念碑等で修飾された廣場が必要で、路道は墓地では、自動車等の行違ひを禁じてあるものが多い、だからその行違に要する幅員は必要としないが巾四五間として中央灌木花壇の帶を設け或は兩側に三、四尺の芝生植樹帶、排水



本案は揃者が高低多き丘陸地を選んで試みた理想案である、簡單に說明すると、各路線には並木を配し幾條かの芝生帶を設け數多の花壇を飾り、中央部に禮拜堂を、正門の附近には事務所、休憩所、溫室等を設け、墓地の區劃は整然と曲線路に沿ふて配置し、或は泉水、溪流を利用して庭園的設備を施した。

路を設けるのである。次に補助道路は大區劃に沿ふて幹線道路を補ふ側道でやはり靈柩車の通過出來得る幅員即一間半を要し、左右に三四尺の芝生及植樹帶を附すれば安全である。是れ等の主幹及側道は幾らの距離に設けらるべきかと云ふに埋葬地の便利なる位置即ち換言すれば適宜なる埋葬區劃の大さと云ふ事になるのである。これは道路で靈柩車から卸された棺を棺擔ぎが何の苦痛も感じないで運び得る距離でなければならぬ。これは經驗上から二十五間をその限度とされてゐるから區劃の巾は五十間を越へてはならぬと云ふことになるのである。卽ち約五十間の區劃を作る樣に主要路又は補助路を設けねばならない。然れどもこれ又棺を車で運搬する樣になれば幾分短縮されるのである。主幹道路及補助道路は大區劃に達するに必要なる手段としての道路系統であるが、通路は區劃内の單なる通路である。歐米の立派な墓地では、大區劃内の各ロットの兩側には小徑を造つてゐるが、こは約五〇パーセント以上の面積を此の小徑の爲めに使用されると云ふ事になり、且つ園内の芝生の美觀を傷けるといふ點から近代設備されるものではその必要を認めず、ロットの兩側に設ける事は中止されて一本の通路で三四列のロットの爲めに使用されてゐる。此の幅員は主幹道路又は補助道路で卸された棺を棺かつぎが棺の兩側を擔つて通行出來得る巾と埋葬の時に土壤を運び出すため車一臺が通過する丈けの廣さ約四五尺あれば足りるのである。

次に地割の形式及道路勾配に就いて述ぶれば、墓地に參詣者が入りて最も崇高、敬虔の印象を深からしむるには正門から禮拜堂附近を中心とする範圍内であらねばならぬ。さうなれば此の附近は整形式即ち道路廣場を幾何學的の取扱ひを行ひ偉人の立像を列置する抔して、雄大に整然とした地割にせなければならぬ。其他の道路は直線と曲線とを適宜に按配した風景式に取扱ふのであるが、多くの場合、ゆるやかな曲線道路は高低のない土地に於ても實に爽快を覺へ審美觀からも實用上からも有益のものである。

次に道路勾配に就て述ぶれば、墓地は自然を尊び自然の持つ秀麗靜閑なアッピアランスを利用して設けらるゝものが流行してゐるのであるが、苟くも自然を破壞するが如き手工は避けてなるべく自然美の應用を工夫する樣に勉めねばならぬ尙是れは工費節約の一端ともなるのである。だから道路を設けるにもその縱斷勾配と方向とを適當に考慮し、起伏の場所は、勾配の方がその方向よりも大切で、巨木の美林の一劃とか險阻な丘及谷はそのまゝ保存すべく、道路方向を變更しても避けぬばならぬのである。尙縱斷勾配は公園道路と同樣に十五分の一から二十分の一までの勾配が吾人に最も快感を與へるが短距離間では十分の一の勾配は山地に於ては、屢々必要になつて來ることがある。斯の如く地形に應じて平面や、斷面の上から注意深く作られた道路は土工費を節約し且つ又審美觀と崇敬の觀念とを思はず知らず吾人に迫らしむるものである。

禮拜堂其他建設物

禮拜堂と納骨とは同一の建物の中に納められてゐるものが多く、外部の壯嚴は勿論内部の結構も壯麗を極め一點の陰凄の氣を漲らしてはならぬ。位置はなるべく正門の正面又はその附近の高所を選定すべきである。事務所及管理人の住居又は休憩所は正門と禮拜堂の附近に置き物置、火葬場、温室等は禮拜堂や、事務所と隔絶して、且つ道路系統の障害にならぬ所に集めて置かねばならぬ。火葬場は無煙、無臭の設備として電氣又は瓦斯を利用すべきである。温室及花畑は我國の

墓地に於ては、未だその設置を見受けないが、今後の墓地には必ずその必要がある。そして一つには參詣者の便宜を計り且つ園内花壇の植付用として使用するのである。

植樹事業

現代墓地計畫の大なる使命は植樹事業がその大半を擔ふてゐると云ふても過言ではない、即ち樹木は單に日陰を作り或はロットの間仕切りを營むのでなく樹木や草花によつて陰慘の空氣を除き因襲に培はれたる無智なる迷信を排け、亡靈永住の花園を造るのである。或人の曰く『墓は凡てのものゝ終りでなく寧ろ將來幸福なる新生活の始めである』と詠じ、英詩人グレーが墓畔の賦は正に人類永生のものでなければならぬ、と論じてゐる。

更に技術的方面より考察すれば墓地に於ける風景施設の成否は植樹問題に左右されるものが多く、場合によつては道路の曲線、勾配の缺點を陰蔽する事さへある、然し乍ら植樹配置の巧妙によつて道路系統を蔑にすべきでないが最も理智的に設計せられた風景は通路、勾配、植樹等が一目瞭然配置され道路曲線と樹木とが互にマッチして、あらゆる點から見て繪畫的となり、且つ利用上實用化せねばならぬ。尙ほ技術的方面は數言にして盡すべきものではないが概說すれば、第一に配列の問題である。即ち樹木の大小或は樹林の疎密の程度空線との關係等に就て適當に按配すること。第二には前記の効果を納めるため樹種の選定を誤らぬことである。樹木夫れ自身は如何に奇麗であつても建物との調和或は地形、道路との關係に於て不適當であれば、全體として風景美を反つて傷けるものである。概ね園の外圍は常磐木を以て主木とする植込みを設けて落葉時の變化を求め、年中外界との關係を絕ち園地をして靜かな落付きある隔世の樂園たらしむる効果を與へなければならぬ。園の中央部は主幹道路沿ひの日蔭の並木の外、所々に一本又は三四本宛落葉木を孤植するので餘り常磐木で眼界をさへぎり陰慘の氣分を顯はしてはならぬ。尙園路緣には費用と廣い土地を要せない花時の色彩と香氣に富む灌木を多く植へ石碑の背景となり散策者の心身の慰安に供さねばならぬ。

排水吸水及照明

墓地の排水目的の一ッは道路及芝生が降雨によりて被害を蒙らぬ樣に降雨中に全地表水を排除する事と、一ッは墓下の地下水を排除する事である。地表排水は、地表水が道路を破壞する量に至る迄でに集めて地下排水管によりて排除するのである。地下排水は地表排水の如く一定でなく多くの場合孔性土質又は地下水のなきため全然不必要の場合がある、實際地下水の少ない處を墓地として選定するものであるが、或る時はしばらく埋葬して始めてその必要の個所を發見する事が多い。多くの場合粘土層のある土地にては墓の深さよりも、屢々淺き所に可なり澤山の水を含む事がある。此の水は必ず排除せねば墓經營に困難を來す事がある。これが爲めには墓地底約一尺堀下げ素燒の土管で除去したがいゝ。

墓地の上水も必要の事で水道の供給を受ける事を得れば問題でないが然らざる時は鑿井によつて水源を得、之れを一旦ポンプで貯水槽に揚げ、然る後に給水するのである。此の場合ポンプ室、水塔等は殊に外觀を修飾して風致の飾りになる樣に勉むべきである。

照明に就ては餘り重要なる問題ではないが各入口、建物を除いては一般道路には其の必要を認めない。併して照明裝置は架空線は用ひずして地下線とした方がいゝ。

羅針 緒辭

鎌倉時代の建築
奈良の大佛殿に
河内の觀心寺
今殘る唯一の唐様
鎌倉の圓覺寺

鎌倉時代には皆さんも歴史上で御承知のやうに佛教が非常に盛に行はれましかもそれが此時代まで行はれた宗教以外に新しい宗教が續出されたのでありますそれで當時の建築物にはすべて佛教を加味されたものばかりであります、この建築物の様式を大別致しますと和様と唐様と更に和様と唐様との混合致したものゝ三つに分かれます、この三つの様式について考へて見ると和様と先づ標準になつて居るものは奈良の興福寺にある三重塔山城國にある浮留寺の三重塔、更に山城相樂郡にある、海住山寺の五重塔から近江にある石山寺の多寶塔や大きいものになると京都の三十三間堂が夫れである、先づ和様建築の代表的のものでありませう、大體に於て大阪附近で有名なものは以上あげたやうなものであり唐様と云ふのは鎌倉の圓覺寺にある、余利殿で之は當時の唐様を加味したものゝ現今殘つてゐる唯一のものとして傳へられて居ります、その唐様の特徴と云ふのは、建立する始めに根本に礎盤と云ふものをおき更に軒には組物等も和様のよりが細かになつてをり繪畫又は彫刻を織交ぜたのが特徴でありこれはその當時禪宗が宗教界に重く用ひられた、ために斯様な建築が行はれたのであります、それから其當時までなかつた扉の横に棧をおくことが行はれ扉は板の組重れたものでこれに一々横に棧をした棧唐戸の使用されてゐたのも唐様の特徴とするものであります、それから御堂については、その内部は御堂伽藍といつて裝飾もなく只ガランとしてあるもので土間の上に瓦をしいた位でありますが佛壇には須彌壇と云ふものを造つて回りのふちには欄干のやうなものを造つてをり、その曲線美が須彌壇として少し造り方の變つてゐることであります、堂の内外の裝飾は極簡單であつて、白木のまゝで建立されてゐる等は唐様のものとして變つて居るものであります、次に天笠様について申しますとこの造り方は和様と唐様の混合されたもので、その代表的のものは奈良の大佛殿であります、この様式は大佛再建のために出來たもので、同じ様な物を繼いで組合せてゐる事等は非常に簡單のやうでありますがあのやうな大きい建物としては單調の所が又立派のものであります、此外和様と唐様との混合したのには、奈良にある、三月堂の前半分と後半分とが異つてゐるやうに、これを和様新派と云はれて居りますがつまり切種と唐様とを混合して天笠様の變形であると も申されます、この和様新派については河内國にある觀心寺はこの法式の代表的のものであります、寺院佛閣を尋れて一本一本の木材にきざんである、彫刻なりその組合せ方の、變化を考へて見ると、當時の佛教的藝術の盛んであつたらとが偲ばれますよく修學旅行として地理なり歴史の實地研究を行つてゐらるゝ方はよく〳〵趣味的研究の見地から探ねられることが大切であります。右は主として鎌倉時代の建築の中でも和様と、而して唐様との二つについて述てたのでありますが、これ等に和様と唐様との加味されてゐる内の和唐折衷と更に之に天笠様との複雜してゐるものをこまかに分類致して述べる事に致しますこの天笠様と申しますものゝ代表的建築物について現在その遺物としては奈良にある大佛殿でありますこの大佛殿は一度燒失致して再建された場合にこの天笠様が採用されたのでありますおもに大佛殿にある南天門の建築であつて、それ以外は鐘樓と同様の方式であります、この様式の特徴といふのは軒の所にある組方でこれを押財木と名付られて居りますこの押財木は盛んに使用されて、長い木に對して財木を組重れた様に組んであります、この押財木は大佛殿の方は六重の組重れたものであり南大門の方の建築には更に一重だけ增して七重に致して居ります大きい建築物になるとかうして組重れてもたしておりますこの方法は素人でも直に分る特徴でありますこの天笠様と云ふのは和様と唐様の折衷されたものであります。又これ以外に特徴について述べて見ると梁の先端が段々波形を描いてゐるやうな彫刻のしたのがあります、この波形の切り口はよく寺院に參詣された方には御承知のことでありませう此一つの事柄は殊に特徴として何人も知覺し得るものでありますまた慕股について申しますとこの名稱は唐から入つてきたもので盛んに使用されて居り

ます、奈良の三月堂の佛像のある例は鎌倉時代の建築以前即ち奈良時代又は天平時代のもので前例のない樣な形のあるのは鎌倉時代に增加して建築されたこの慕殿であります、つまりこの御堂は前半を鎌倉時代の建築の後半を天平時代の建築の二つを組合せたもので、建築上なか〳〵趣味のある御堂であります、つまり三月堂が名高いは前平にある支那風の和唐折衷の新派とでも申しますものゝ代表的なものであります其他河内の國にある觀心寺は双斗と云ふものが使つてあります、丁度佛教の眞宗教の寺院には内陣なり外陣の區別が非常にやかましくいはれてゐるためにこの觀心寺も亦内外陣の區別が付きます建築物にまでも表れ居ります、今迄は土間であつたのが床を張つたり致したのが觀心寺の方式が最初であつて日本では天竺樣新派として鎌倉時代の遺物としては極少くその後足利時代に盛んに應用されたもので遺物も相當にあります、大阪附近でこの鎌倉時代の建築物について研究する場合は奈良大佛殿なり河内の國の觀心寺が一番適當であると思ひます（大阪高校教授佐々木宗清氏）

天平時代の代表的建築
東大寺法華堂と
唐招提寺

天平時代を初期と本期と末期と三つに分けて申しますと其の初期時代のものでは藥師寺金堂にある本尊でありますその東塔にある露盤銘によりますとこれは天武天皇の時代に鑛金なして鑄造された天武天皇十年に造られて居りますそれでこの天武天皇三十年時代にはすでに飛鳥時代の末から天平時代の樣式が加味されてゐるものが表れて居りますその美しい光澤や顔の圓滿の形等から見ると表現が自由に眼や口元を見ると天平時代の特徴があります、尙時代の明記せるものでは出雲の鰐淵寺の觀音これは持統天皇の六年でありますが矢張り當時の作が藥師寺と殆ど同一の型で顔の圓滿な所優い表情等は大切に注意すべき點でありますこれを標準として、橘夫人の厨子の彌陀山等も亦藥師寺のものに類似されて居りますこの時代の特徴は飛鳥時代の末より理想化された型で其眞實さよりも寧ろ形の美しき表現であつて寫實を超越してゐる美しさであります、橘夫人の厨子の光屏は天人遊樂の光景を見ると如何に型の美を證明してゐるかがわかります、又新藥師寺の香藥佛像や法隆寺の繪殿の夢殿等は同一の美を現して無邪氣のあどけない表情があります、これが當時の理想化された代表的のものであります、次に本期時代は實に全盛時代であつてあらゆる方面に多忙であつたのであります、それでこの本期時代の彫刻及び建築の代表的のものは奈良の東大寺建立であります これは國家の富と天皇の信仰とのために建てられたものである聖武天皇の信仰心に厚かつた事は周知のことでありますがよく歷史家に三寶の奴とか云ふ言葉をもつて誤解されてゐる、人々の多いのは決して奴なる言葉が惡いのではありませんつまり三寶は佛語であつて奴はその信仰に從順であるの意を示されてゐるために天皇自らその唯一の信仰である眞理に從はれたので只此一語を以て品位の低下した等と云ふのは表面上の言葉をとつた誤解であると思ひます、東大寺の建立は天皇一人の贅澤心を滿足さすためでなく國家の安寧を祈つたものであります、この東大寺には當時あらゆる作家がその全力を傾注して天平時代の粹を集めたのであります、然し其後兵火のために原の形ちは存せざるも東大寺にある法華堂のみは天平時代末期の代表的の集聚であります。この本期の特色は官能的要素でこれは奈良新都の爛熳たる文化に醸された都會文化の香ひでありますこの官能的、肉感的の表現をも示す吉祥寺天女の佛像は情慾を起した等も亦眞に其宗教的精神の向上とでもいふべきであります。法華堂の汎夫等類似されて肉つきの美妙の情緒崇高の感は官能的の美と云はれてゐるこれは東大寺建立以後日本の藝術界に弛緩を生じたが唐招提寺の建立によつて又刺戟が大になり墮落を止めさしたのであります、つまり天平時代の本期の官能的と唐招提寺の金堂の本尊とは對照的のものであると思ひます、この本尊は鑑眞と共に來朝した唐僧が指導して造つたのでストヰック的の嚴正の表現であります、この唐招提寺は天平時代から平安朝にかけてのひいでたもので後世の範であると思ひます。



劇場はエールへと趨く

DIXON M. MORTON
池田谷久吉譯

ケンブリッヂ大學に於てさへ一つのデバートメントとして許されなかつた演劇デバートメントがエール大學に於てはハーバード山の楡の木のもとに芽生えて來た。此のエール大學に演劇デバートメントが發生して來たといふ事は演劇が脚本を書くといふ道程（プロセス）に除々と轉換しつゝある演劇史上の一過程であり且それは研究生に依つて書かれた脚本がついには上演される事が出來るまでの一つの制作場のやうなものでなければならぬといふことを次第に悟りがけて來た劇作上の一道程でもあつた。

だがそれは決して靜止的な理想ではなかつた。

一九二三年に天下に知れ渡つてゐた制作場が四十七あつたが其等は若しバーカー教授がハンデイキャプを付せられてゐなかつたならば必らずや演劇デバートメントの内に包含されて發達してゐたに違ひなかつた、然し官僚式のハーバードムは極めて眞面目に質實に人道の爲に捧げ、即ち實業學校などを設立して舞臺藝術をしてエールへと追ひやつたのである。

ハンデイキャップが無いといふ事はエールに於ける演劇デバートメントか四十七の制作場と違つてゐる其の唯一方面ばかりでなく、もはやすでに本質的な差異のあることも明瞭である。

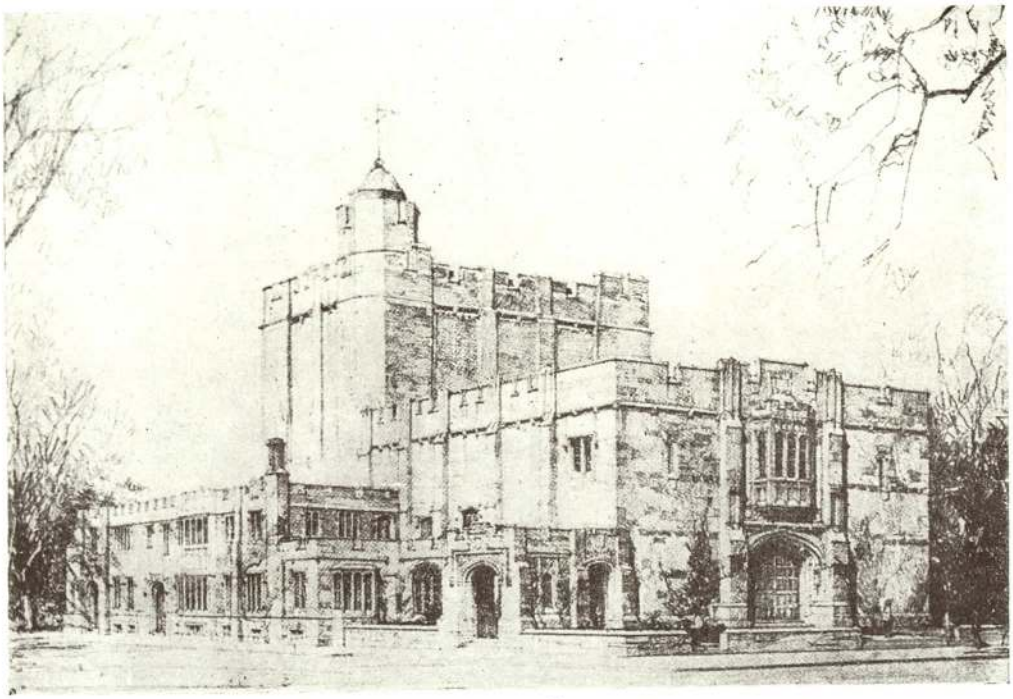
此れ等のうち最も明確なものは無論研究に對する設備の完全を必須條件とすることであるが特に最も重要なものは其れが描寫し表現する所の根本的觀念の發達である。

劇作の一道程として最初の心もとない實驗の爲に非常に廣大な設備の一教室、即ち完全な實驗室としての劇場は一つの能動的な一デバートメントを建てる必要が今や必然的欲求として勃起して來た。

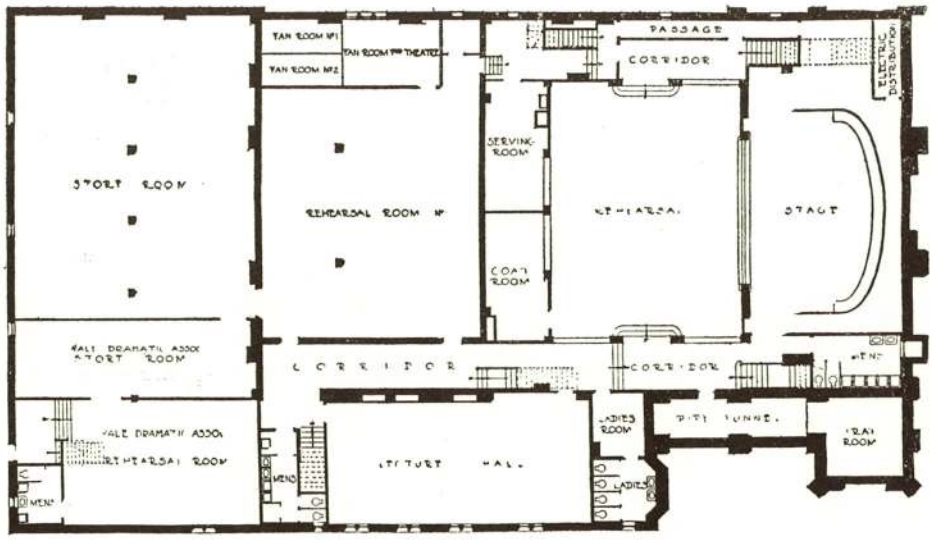
新らしく劇場は研究學生をして彼等の終日骨の折れる仕事をしかも一つの建物の内でなし得らるゝといふ事は又重大な變化であると言はねばならぬ。

且ては四十七の制作場の人々はクラス、本讀み、又は演出の場合にのみ一緒に相集つたが其の結果は常に努力の分散を來してゐた、現代の建物、例へばエール、デバートメントを用ひてこそ一つの建物のうちに於ける共同勞働の價値があらはれる。

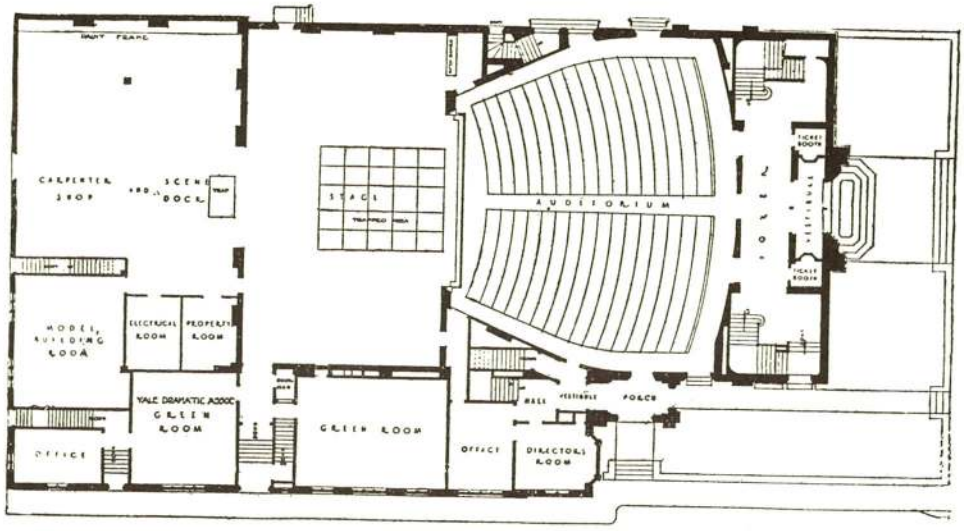
一つの共通な興味と思想の交換に熱心なる事とに依つて結



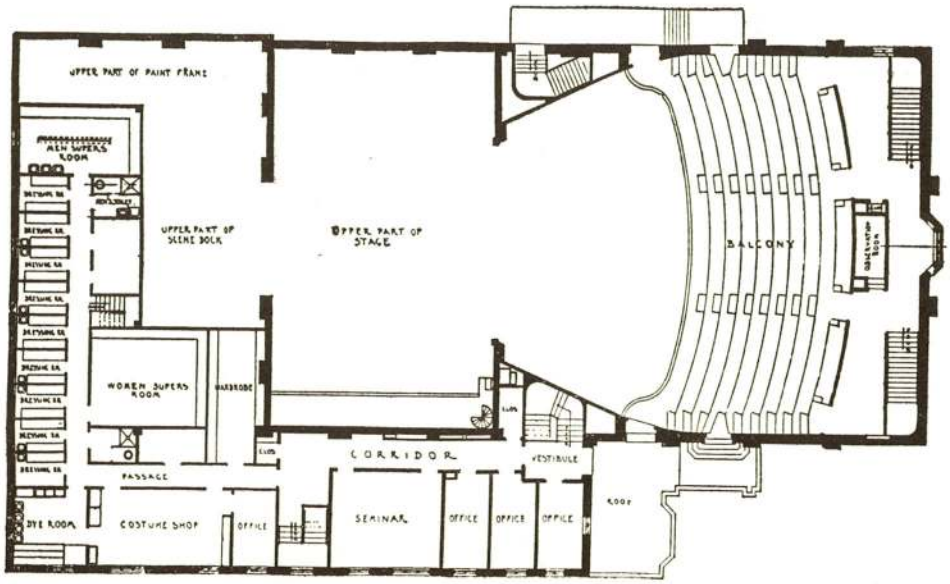
エールー劇場配景圖



エールー劇場地階



一階劇場ルーム



二階劇場ルーム

合されてゐる研究學生の肉體は新しき緊張を以つてばかりでなく新しき理解を以つて働くのである。

挿圖の建築設計平面圖は演劇デパートメントに於て夫々如何に區轄され亦配置されるかの範圍の概要を示したものである、それを繞つて制作場と事務室とが立てられてゐる内部の中心に當る所が勿論主劇場をなしてゐて、即ち觀客席であつて普通ニューヨークの劇場と同じ程の大きさで七百五十人の觀覽者を收容する可能性があり、其の舞臺は完全な裝置が施されてゐる。

或る劇作家の脚本が公でなく、試驗的上演をされるとき、即ち試演に對しては小舞臺を設けた本讀室が別にある、こゝでは試驗的演出をやつてみる事が出來るので作者は非常に利益を感ずる。

劇場と本讀室との他にまだ此の建物の内にはモデルのスタヂオだとか照明、道具、大道具とかの部屋もあり、道具部屋、背景畵家部屋、衣裳部屋、染色室、着附け部屋、溜り部屋、事務室等に到るまですべてが包含されてゐる。

換言すれば此處では劇作家の重要さを認めるは勿論、演出者、舞臺の設計者、衣裳係、電氣照明係等の各々重要なる事が如實になつて現はされてゐる。

彼等の夫々が此のデパートメントに於て其の持場所を占めてゐたといふ理由はバーカー教授の意見に依れば丁度彼等が劇の教授連の地位に向上せしむる爲に貢献した樣に現代の劇場とも歩を同じうして進んでゐるものであるからである。

バーカー教授は一人の有望なる劇作家に面接するときは此の劇のデパートメントたる小劇場の監督、教師、演出者、衣裳部の者から設計者までも同樣に集合せしめる、そして自由に各自の專攻科目を攻究する研究生等に對して相當の條件と制限とを附してゐるとは云へ、男女各々が此のデパートメントに如何なる多種多樣の興味をもつて來ようと勝手で其の制限は豪も加へられてゐない、全く自由である。

各人は各々自己獨特の別個の問題を持つてゐるが、バーカー教授は彼れ等のうちに只一人も全然他人の問題について無關心に働いてゐるのではないといふ確信をも持つてゐる。かつては脚本が演出の實際的困難から離れて書かれた事もあつたが今では彼の所屬の劇場の事を第一に考慮して書かねばならぬ樣になつてゐる。

彼は照明の事から設計、衣裳、其他の技術員が彼自身の書き上げた芝居についてどんな面倒と困難とを感ずるか、そして其の困難を如何にすれば突き切つて表現することが出來るかといふ事までも知つて居らねばならぬ。

彼は丁度舞臺設計者が自分の設計せんとしてゐる脚本を先づ知らねばならぬように劇作家自身の屬してゐる劇場を念頭に置いて脚本を書かなければならない。

此の劇作上に課せられた要求は他の部門に關係してゐる研究生にも同樣に適用されねばならない事である。即ち如何なる場合に於ても劇場は概して各個人個人の興味を中心とすべきものである。

現在の劇のデパートメントは劇の文學的歷史上よりもむしろ其の演出と劇作との問題を主なる問題としてゐる。それは劇の形式に於てまだ端緒とも云ふべき程度のものを以つて滿足してゐる英國のデパートメントに對して詳細にかゝる研究

をなす事を忘却してゐる。

カタログに次のやうに云つてゐる。

此の道程は二つの目的を持つてゐる一は芝居見物をしてもつと愉快な得る所の多いものたらしむる報告を以つて滿足し劇の研究を續ける事を豫期してゐない學生に供する爲と他は他のデパートメントに依つて與へられ劇に於けるもつと細密な道程に導き入れるに役立つ爲との二つの目的である。

此の道程を辿る學生は笑劇、準樂劇、喜劇、悲劇　其他あらゆる種類の源泉を研究するだらう。

色々な時代に發達したものの差異や劇的技巧の發達を研究するだらう。

此の道程又は其の裝置は重に劇のデパートメントに於て仕事をせんとしてゐる全研究學生に必要な事である。

劇の特殊な仕事に對してかゝる準備的な端緒的な道程を踏む事が必要な事は了解され易い。それはバーカー教授の「劇十一種と劇作」中に直接とり入れられてゐて其のおきまり文句は彼が「英國風なもの四十七」に於て用ひられてゐるのと同じ事である。

議論は小說と小話に對しての劇の關係を取扱ふ、飜案の原則、プロット、構想、人格化、クライマックス、それからシナリオを作る事を取扱ふ事である。三つの芝居は如何なる學生にも必要である、即ち一幕につづめる事、本來の一幕物をすくなくとも三幕の劇との三つである。

かゝる道程を踏む者必ず劇作能力を得とはバーカー教授も保證することは不可能事である。彼は彼の題材のまゝの生のまゝの脚本選集を傳授したのではなく又彼にはそれ等の劇を書く實際的な腕はなかつたのだ、如何なる規準も獨斷的には組み立てられなかつた、又教訓は劇作術十誡のいかなるうちにも說かれてゐる。

バーカー教授は「劇作家を生み出すといふ事は近代的奇蹟である」と心の底から認容してゐる。

そして彼はこの舊套的な言葉に說明を加へて次の樣に言つてゐるのは興味のある事である。即ち「劇作家は生るべきであつて作らるべきではない」と。又彼は彼の著書の「劇作上の技巧」の內に書いてゐる文章に依ると「此の世間でよく言ひ古るされてゐる言は劇作家に對し他の藝術家の尠くとも只一つの經驗、即ち生れるといふ事を認めてゐるが建築家、畫家、彫刻家、音樂家を許した藝術に於て劇作家を教へ育てる事の不可なる事を言つてゐるのである」努力は「無經驗なる劇作家には經驗　富む劇作家が如何なる方法で彼自身に新しい問題を解決したかといふ事を示してやる事に依つて所謂門弟時代といささかでも短縮するものである」劇作道程は同級者よりも寧ろ議論仲間に似てゐる點が多い其の議論仲間のうちでは同じ考に依つて刺戟せられてゐる人々は彼等の作つた戲曲を讀み同級の者やバーカー教授の批評を聞き利益を得るのである。

之は批評ばかりでなく有望な戲曲はエールでは大小舞臺で

實際的演出をされ得るといふ實際的利益である。彼は職業的劇場の危險に遭ふ事なしに成就成功の域に達する事が出來る。

彼が其の最初の戯曲で成功するならば又、それが若し輕い喜劇であつたとすれば其の後三年間に名聲は二倍に或はなるかも知れないが其他は到底望まれない事である。かゝる失敗は一瞬間の幻の様なそして劇場の管理人が商賣になるかどうかと氣を揉むやうなものを上演したまゝ成功をかち得た青年劇作家にはあり勝な事である。

エールでは劇作には新しい形式と新しい材料とで色々にあれこれと試演をやつて經驗してもいゝ權利が與へられてゐる。何故なれば藝術家が靜止の狀態に置かれた時にこそ彼は萎れ枯死するといふのが此のデパートメントの主義であるからである。

あたかも劇作家が其の技巧に於て永久性と不永久性との區別を學ぶ爲めに戯曲史に其の端緒としての道程をとるようにエールでは設計者や衣裳擔當者や電氣照明者は彼等を經驗する前に彼等の藝術の背景をなす基礎的なものの研究をしなければならぬ。例へば舞臺設計の歷史に於程は舞臺設計の理論と實際の道を踏む前に見て置かなければいけない。

其の背景をなすものは何々かと云へば

舞臺の起つた時代から、大袈裟だが偉大なる演劇時代と稱されてゐる現今にいたる迄の舞臺の物的特徵の歷史には次の問題が研究されるであらう。

即ち機械、蒸氣機關、劇場的演技に於ける効果を強める爲め機械的工夫を用ひる事。

社會的、宗教的、環境に依つて影響せられた舞臺の事。

又美術の發達に伴ふ劇場的技術の關係の事。

各時代の代表的劇場の模型の構造の事。

マスクや野外劇、宮廷の御祭、バレー、オペラ、人形芝居の發達、その當時の表現方法で取扱はれた各時代の典型的な芝居の事業である。

此等の事を研究しそれから模型を作り初めて舞臺設計の理論と實際との道程へ這入つて來る事になる。

次の問題は舞臺裝飾に適用されるものとして設計（音の關係、構造、遠近法等）の基本問題の撤底的理解を進めるといふ見解のものに研究さるべきである。

視覺に依る藝術に於て表現されてゐる如く一般構造、配合、調和、平面等の事。

劇の種々な形式に依つて要求されてゐる背景の型を研究舞臺背景の技巧、即ち伸縮自在の場面、骨格たけの場面二面或は三面舞臺の事。

近世獨逸の機械的工夫（四輪車舞臺、廻轉舞臺、せり上げ舞臺の事業）

劇場組織の新型式と設計者の便宜。

劇場の新運動例はアピア、グレエグ、ラインハルト、ジョンス等の如き人の事と理論、近世劇場で上演する場合に取扱ふべき理論と抽象的論爭。

飜譯の場面の實際、一般模型を作る事に於ける實際、役者、音樂、ダンス、背景、光線と芝居との關係に就ての議

論、建物をつくり、風景を畵く事に於ける實際的方面とスタヂオ劇の性質の事業である。

同樣の方法で衣裳に於ける道程は實際的實行に對する歷史的背景から初まる事又同じである。

特別な興味は「舞臺設計、衣裳、演出を研究せんとする」學生の要求してゐる舞臺照明についての敎示といふ事である。

たとへ光線、視器、電氣の理論は特別に此の道程のうちに含まるべきであるが舞臺の一般的な物質に於ける前述の研究は非常に此の際助けになる。

一般の方法では其の道程は含まれる筈である。

光の定義、理論と歷史、舞臺に對する重要さとの關係、電氣と視器、語彙と專門語の使用法、光の性質、照明光の制御法、道具(理論、構造、特長と用法)

效果(突出舞臺、廻り舞臺、リンネンバッハの照明等)

照明の用途(照明、構想と設計、强調、氣分の創造)

一般の應用(舞臺の飾り付け、光線地域等)

問題の例、電氣と視野に於ける實驗、色の交響樂(色のオルガン)表現派、一般光線(ベエジエント、外觀、內部)光線の未來

凡ての音響は死滅しそして事件の暗誦が目錄の中に憂鬱な影を投げるとき、またはその道程が如何に永續してゐてもその間たしかに實際的經驗に依つて大なる活力が力强い生命を與へつゝある、これは勿論デバートメントの眞の效果でなくて何であらう。

一人の人間が一週間に三時間でさへも又は指揮者たる事に對する喜悅はあつても設計者であり、照明係で且劇作家であることは出來ない。

學生等がすでに皆强い興味を以つて一つの建物の內に共に働いてゐるエールでは其の結果として敎室にある時間は制作場での勞働に關しての學問的な助を與へるものである。

何故なればバーカー敎授の制作場がかつて重大であり而も今尙重要なる一つの實驗室としての價値があるからである。

それはかつて爲してゐたよりも更に大なる範圍で仕事をなして居り、そして劇場をもつと完全ならしめてゐる、これは劇場を大學內にももたらしたばかりでなく大學を劇場にもたらしたのである。

其の狀態の變化がいかに實際に急進的であるかといふ事は若し誰かエールのプレシデント、ドワイトがたつた百年前に「劇場についての論文」中に書いてゐることを思出すと最も明かに分る事と思ふ。

即ち「芝居見の趣味に恥るといふ事は最も貴重な寶、不滅なる靈魂を失ふ事に外ならぬ」といふ文句である。

今日はバーカー敎授は芝居見の趣味に恥るような事からずつと超越してゐる。

彼は芝居見物を愉快なものたらしむる道程にあるのみならず劇作家、舞臺照明者、舞臺監督、舞臺裝置家、衣裳擔當者又劇の敎師までもと同じく作り出したのである。

そして彼の思想が行き詰りになつてゐることは考ふべきではない、何故となれば其等の思想はすべて具體化され來つて居

るからである。

劇のデバートメントは生長し發達し年々に變化するであらう。あたかも、それがその生命である職業的劇場に於て變化と發達を繰り返してゐるが如く……。（了）

劇場關係者

建築設計者	Blackall Clapp and Whittemore
大學劇場總監督	George Pierce Baker
同上助監督	Hubert Osqorne
舞臺設計者	Donald M. Oenslager
照明設計者	Stanly R. mccadless
衣裳設計者	Enelyn Cohen

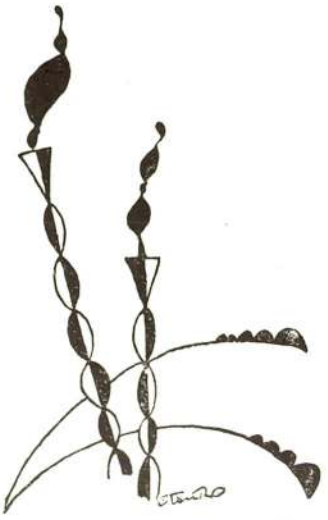
様式 Judor Gothic

前號「セメントの製造、性質試驗及び其等相互の關係中」左の通り正誤す

五月號自第三五頁至第五二頁正誤

頁	行(右より)	正	誤
三五下段	一一	主成分	主皮分
三六上段	一四	定	狹
同	二五	Obtained	Oftained
同	二六	Proportined	Prokortined
三六下段	一	and erric	andf erric
同	二	Pulverizing	Pulveriging
三八下段	二	煙突	燒窯
四〇上段	二四	貰石灰の次に三の字を挿入	
四一下段	左より三	困	固
四二下段	左より四	の如きの次に)挿入	

頁	行(右より)	正	誤
四三上段	左より五	勘	斯
四五下段	左より一三	85%	55%
四七上段	二	溶	解
同	二	終りの)をがの下に持つて行く	
同	六	出	取
四八上段	七	効	動
同	二一	完の上に不の一字を挿入	
四九上段	第八表の溫度下は華氏(下)の誤り		
五二上段	一二	カリバー	カーバー



建築の本質

（二——本誌第九輯第四號より續）

本野精吾

建築は靈魂の表現である——此の考は嘗て石本氏自身が持つて居た考だと云ふ事であります（同氏の直話により前號を訂正する）。此の考は建築を一つの土木工事として見る前記の考へ方とは正反對の立場にありまして、其の上に建築に於ける使用の目的即ち建築の機能と云ふものを全く度外視した考方であります。古代の名建築即ちハギア、ソフイア、パンテオン、パルテノン、ノートルダム等に就而見ますと、之等は皆人間靈魂の表現であると考へる事が至當に考へられます。

ハギアソフイアの小さいドームから段々に積み重なつて中央の最大のドームに至る迄の間に構成された廣大な空間は全く人間の崇高なる宗教的魂の凝結と見る事は至當の事であります。

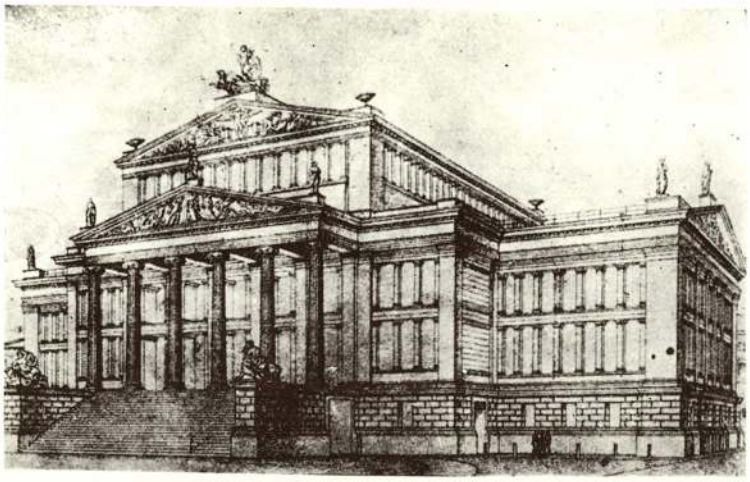
パルテノンはヘレニース精神の發露であり、ノートルダムは中世キリスト教信念の權化であると考へる事は最も當つて居る考へ方であります。

コウ云ふ風な考へ方に於て建築を靈魂の表現と見る場合にソコに尙使用の目的即ち物體の機能と切り離す事の出來ない何物かのある事が考察の中心點を構成するのであります。建築を全く靈魂の表現と考へる事に於ては使用の目的と云ふものから全く離れなければならないのであります。其の終局に於ては人間は岩窟の中に生活してソコに實生活の本質を求め靈魂は宇宙を飛び歩いてソコニ建築美が構成されると云ふのが此の考の終局であります。

此の見解より來る建築美の本體は未だ曾て地上に存在した事のない美の世界であります。古來の名建築に表はれて居る美の一面は斯の素質を有つて居る事は慥かに考へられますが地上に於ける人間の實生活から切り放した處に考察の根本的誤謬が出發して居る樣に想はれます。ソレ故にコウ云ふ建築美は曾て存在しなかつたのみならず永遠に人類の上に訪れて來る事はないでありましやう。けれども此の考への底には見逃す事の出來ない貴いある物の潛在して居る事が考へられるのであります。此の考は人間の靈魂を人間の肉體から全く切り放して考へた時に到達する最後の點であります。ソレ故に人間の靈魂と肉體とを全く相合した一つのものと考へられる



大英博物館
（ロンドン）



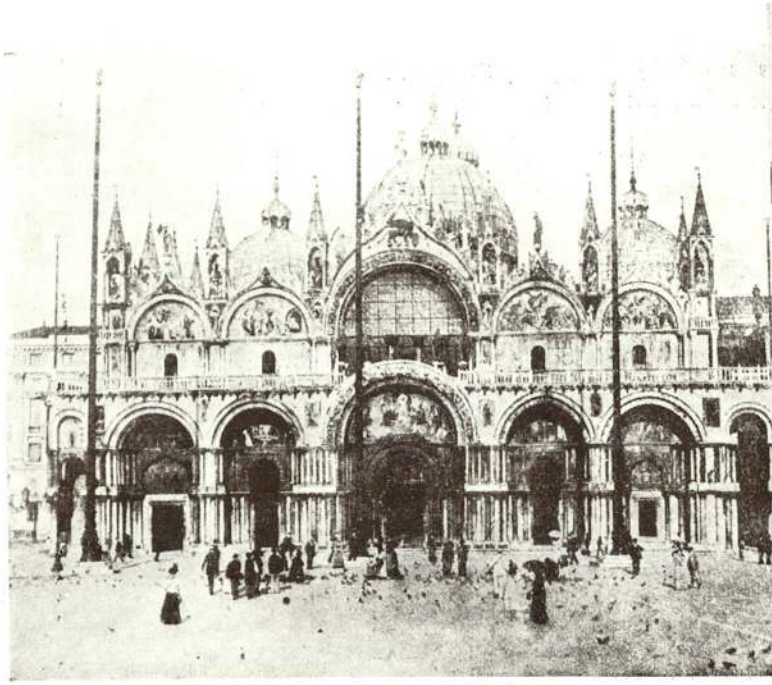
國立劇場（ベルリン）
——例たれ堅て於に中の興復ヤシリギ——



ゲントロ、ラピ作チザラパ



（パリー）セント、チャペル

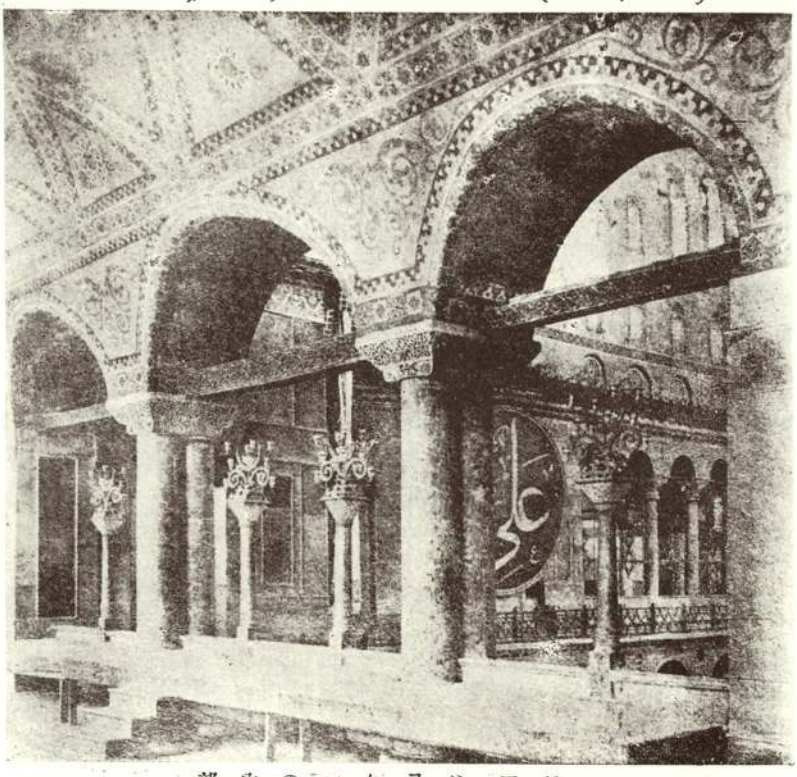




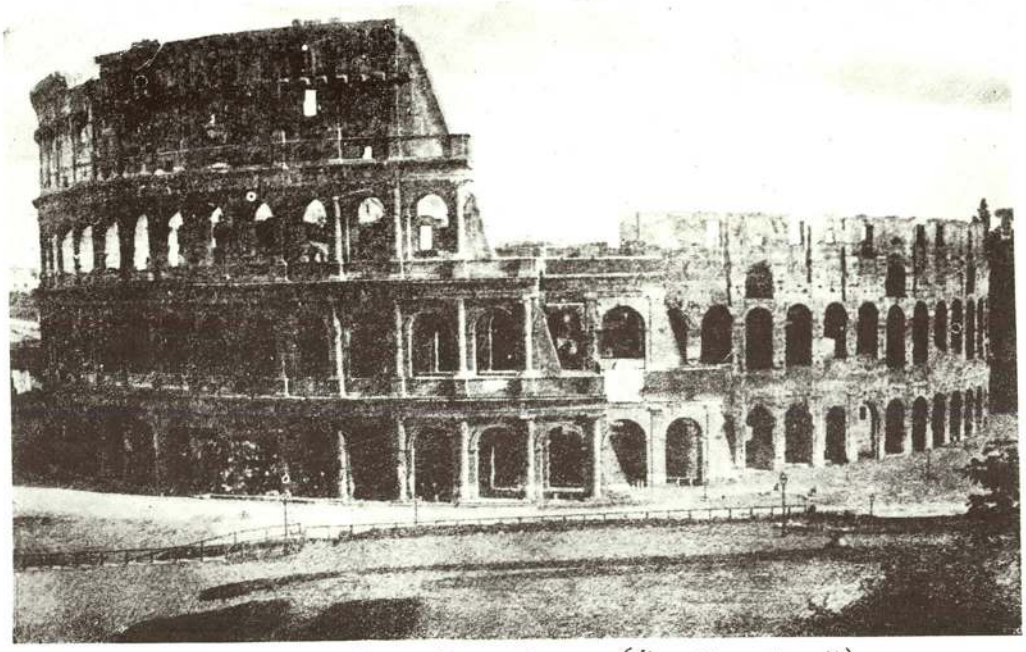
（ベニス）サン、マルコ寺院



(パリー) パンテオン



パリアソファイアの内部



ムユシロコ（市マーロ）



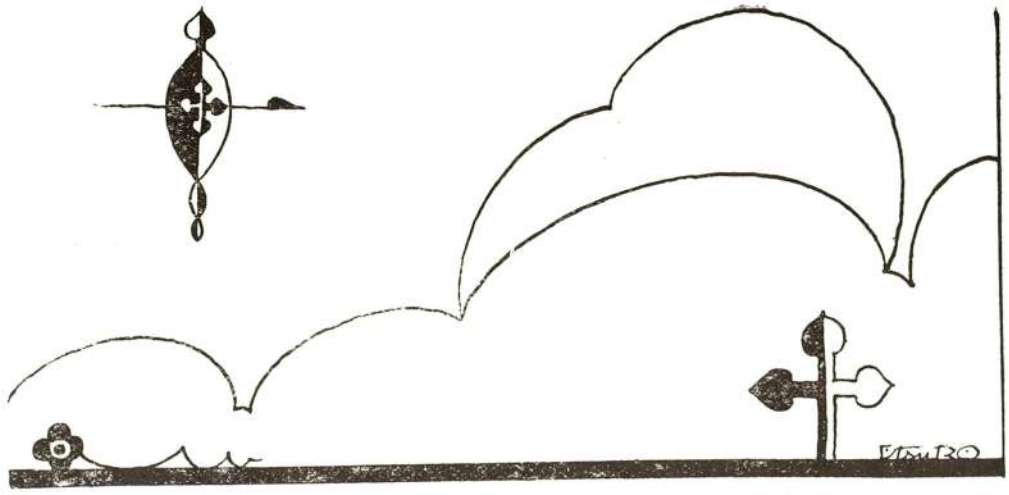
趾廢ンノテルパ（スンゼア）

時、此の考は直ちに建築の有機的機能と相合して渾然一つのものになつて表はれて來るのであります。

建築は人間の使用する實用の目的物である——コノ考へは現時多くの人々の考を支配して居るらしく想はれます。建築が人間の使用する物體である以上使用の目的物である事は論議の餘地のない所であります。けれどもコヽに云ふ人間の使用と云ふ事には靈魂と云ふ樣なものは含まれて考へられずに全く物質的使用の目的と云ふ考であります。從つて此の考から來る建築美と云ふものは使用の目的即ち建築の機能とは離れて別に存在すると云ふ考に到達するのであります。コノ考は嘗て非常に深く人々の考を支配したのでありまして現時迄大いなる影響を殘して居ます。ビオレ、ル、デユークの見解も此の中に這入るものであります。建築を全く使用の目的にのみ考へて美の分子を全く除外し樣と云ふ考へ方は十九世紀の中葉以前に於て建築は全く誤まれる道を辿つて行つて、ビオレ、ル、デユークの樣な見解から出發した建築美が遂に全く人間の生存とは何等の本質的交涉もない領域に迄はみ出してしまつた爲めに、ソノ現象に對する一つの反動と見る事が至當であります。十八世紀から十九世紀の前半にかけて建築の驚くべき發展が認められますが、其の半面には全く誤つた道を辿つたのであります。其の例は枚擧に暇ない位に澤山に殘されてありますが、最も著しきものとしてロンドンの大英博物館を擧げる事が出來ます。大英博物館は英國に於てギリシャ熱の高まつた當時出來たものでありますが、ギリシャの殿堂の漫然とした形態模倣を物々しく建物の正面につけ加へてあります。しかも其の美觀の爲めの外裝は著しく內部に於ける使用の目的を害して居ます。コウ云ふ例は際限なく歐洲の各地に殘されてあります。同じくギリシャ熱の產物にしてもベルリンの國立博物館の北面のコロヂードやパリーのパンテオンの外裝の如きは大英博物館に比較しては遙かに上位にある樣に想はれます、けれども大體に於て同一の誤謬の中に這入つて居る事は同じであります。之れとは少しく趣を異にしますけれども伊太利に於けるレネーサンスの末期に外觀の爲めに建築の機能を無視した著しき事實は已に始まつて居ます。パラヂオの建設になるビラ、ロトンダは正に好個の例として擧げる事が出來ます。ビッエンツァの郊外の小高い形勝の土地に建てられた瀟洒な建物であります。一時は建築均衡美の典型として特に英人の憧憬のマトになつて、盛んに出張研究されたものであります。けれども詳細に調べる時に建築物の機能的本質を著しく無視したものである事を發見するのであります。外裝と內容の本質とは著しくかけ離れたもので外裝の爲めに使用の目的を全く無視した點が認められるのであります。此の種の例も多く見ます。

建築物のコノ種の誤まれる進展は正に多くの人々の反感を引き起したらしいのであります。建築物を全く使用の目的物とのみ考へるに至つたのはコウした所に原因を求める事が出來ると想ひます。

（未完）



古建築と木材

江崎政忠

江崎氏は、鴻池總理事であり、曾つては東洋木材防腐會社をも統掌された。その御出身は林學にありて、現に日本式建築と木材の關係についても研究を累ねられ、今回その一端を、本誌のために述べられた。本編はその筆記に基いたのであるが故に文章上の責任は編輯者の負ふ處である。

元來我國に於ては、風土の關係から樹木は非常に豊富であつて、種々の良材もあるが、殊に檜の如きは建築材料として最も適當なものである、仍て少しく檜の講釋をすると、檜は實に貴重な木であつて、素性が良く、眞直で、長く、色が綺麗で、香が佳い、又硬からず、軟からず、非常に加工し易いが、而も耐久力が強くて、容易に腐朽せず、白蟻などの被害も、絶對に無いとは云へないが、他の木に比較して非常に少い、所が斯かる有用な木が日本に於ては唯北海道を除くの外今では臺灣から、日本の内地殆ど全部に亘つて分布されて居る、而も世界に於て唯亞米利加の一部に質は稍々劣るが、之に酷似した木があるだけで、支那や朝鮮にもない、殆ど日本獨得のものである、面白いことには日本紀の神代の卷に、天孫が御降臨になる時、色々の木の種を持てお出でになつたが、檜は韓地にはおまきにならず、悉く日本に持て來られて、筑紫から大八洲の中へおまきになつたと云ふやうなことが書いてあるが、其通り今でも朝鮮には檜がない、即ち檜は暖流系統の木であつて、日本に於ては氣候や水蒸氣等の關係もあらうけれども、其地質上古來斯う云ふ良材に富んで居たから、勢ひ木造建築と云ふものが我國に於て非常な發達を見たものであらうと思ふ。

初は所謂「於底津石根宮柱布斗斯理」云々と云ふ神代の言葉もあるやうに、掘

日本特有の檜――日本紀と檜種 ― 木造建築の發達は檜から――

佛教の影響による木造大建築――日本固有の一樣式としての大神宮社殿――日本紀の神代の卷素戔嗚尊の條――後世木材の使用法を誤つた實例――檜の耐久力とその樹脂――良材と相當の使途――法隆寺の再建と非再建論は百年の差――良材も産地と成育の差がある――一本の樹そのものにも差がある――法隆寺の金堂と五重塔の大部分は後世に於て幾度も修繕された――まだ千年も二千年でも保つ――阿里山で發見した土堤は倒壊した檜――古日本の到る處に一圍を成した檜――一枚板で十尺幅の檜――樹脂を抜くのは使用法の錯誤――檜は國寶

立小屋ではあつたが、盛に木造建築をやつたに違ひない、其後三韓との交通が開け、大陸の文化が輸入されると共に、建築の樣式も多少變化して來たことゝ思はれるが、其最も著しい影響を受けたのは佛教渡來以後で、盛に木材を以て大きな寺院建築が行はれるやうになつた、即ち今日遺つて居る古建築なるものは其當時からのものであるが、水蒸氣が多く、物の腐朽し易い我國に於て、さう云ふ古い木造建築が今猶は殘存して居ると云ふことは寧ろ不思議な位であつて、彼の伊勢の大神宮樣が二十年毎に御改造になるのも、掘立普請として木が腐朽するからの止むを得ない必要に出でたものであるが是は最も古い日本建築固有の一樣式を傳へたものであつて、我國民が古來より長い歲月の間斯うした木造建築をやつて居た經驗上自から今日に於ても其原則は少しも動かすことが出來ないと云ふ程の木材の使用法に通じて居た結果であらうと思ふ、それは矢張り日本紀の神代の卷素戔嗚尊の條に

一書曰素戔嗚尊曰韓卿之嶋是有金銀若使兒所御之國不有浮寶者未是佳也乃拔鬚髯散之即成杉又拔散胸毛是成檜尻毛是成柀眉毛是成櫲樟已而定其當用乃稱之曰杉及櫲樟此兩樹者可以爲浮寶檜可以爲瑞宮之材柀可以爲顯見蒼生奥津棄戸將臥之具―云々

とあるのを見ても、明に其事實を窺ふことが出來る、即ち鬚髯を拔いて散いたら杉が生へ、胸毛を拔いて散いたら檜が出來、尻毛が柀となり、眉毛が櫲樟になつたと云ふやうなことは兎も角として、素戔嗚尊が杉と櫲樟を以て浮寶(船)を造れ檜を以て宮を造れ、柀は、大變難しいことが書いてあるが、要するに棺桶を造れと云ふことで、各々其用法を示されたと

云ふ點は、今日と雖、變改することの出來ない眞理である、此日本紀の記事は神代のことで、所謂神話であるから、果して素戔嗚尊が斯う云ふことをお知りになつて、之をお定めになつたものか、どうか、それは假に分らないとしても、少くとも此日本紀の出來た元正天皇の養老四年の當時、即ち今より約千二百年前に於て既に此事が我國民に知られて居たと云ふことは疑ふべからざる事實である。

然るに其後、無論一部の人は知つても居つたであらうが、一般の人は段々其ことを忘れてしまつたものか、却て其使用法を誤り、種々の失敗をして居る、例へば、維新後のことであるが、興福寺にあつた勸學院か何か鎌倉時代の建物を壞した時に、それが檜で出來て居つたので、何しろ八百年も經過して、木も十分枯れて居るから、其材料を以て從來さらされて居た正倉院の御物を容れる箱を造つたら可からうと云ふことで、箱を造つて、御物を納れて置いた、所が其後、伊太利か何處かの皇族が來られて、中を拜見したいと云はれた所から、勅裁を得て、箱を開き、取出さうとすると、御物がすつかり箱にひつ着いて居て、取出すことが出來なかつた、又私の知人にも檜は良い木だと云ふので、辭令を納れる箱を拵え同じく納めた辭令が箱にひつ着いて困つたと云ふ事がある、元來檜の香が佳いと云ふのは、檜に多量の脂を含んで居るからである、又其脂があればこそ、檜が容易に腐敗もせず、耐久力があつて、虫も付かないのである、檜である以上七百年經たうが、八百年經たうが、表面は枯れて居ても、中には脂があるから削れば脂が出て來る、それを箱にして御物を納れたり、辭令を納れたりすれば、ひつ着くのは當然である、仍ち素戔嗚尊が宮を造れと敎へられた通り、檜は建築に用ゆべきもので、物を容れる箱などは絶對に造るべきものでない。

故に日本には種々の良材があるけれども、それ〴〵相當の使途があるものであるから其使用法を誤つては失敗をする、流石に現在日本の古建築物と稱せられるものは、神社佛閣其他何れを見ても、悉く其用材は檜であると言つて可い、例へば法隆寺の如き、一度燒けて再建したとか、再建しないとか從來喧しい議論があつて、近頃益々其喧嘩が甚しくなつたやうであるが、假に燒けて再建をしたとした所で、千三百年のものが千二百年になると云ふだけで、其差は百年である、我々の見地から云へば、千二百年とか千三百年と云ふ多くの年數を經て居るものに付て百年位の差はどうでも可い、兎に角木造建築として世界最古のものであることには變りはない、それが全部檜で出來て居る、尤も檜だからと云つて、一概に良いとは云へない、木と云ふものは產地に依て違ふし、又同じ產地のものでも其成育の狀況に依て差が生じるのは止むを得ない、それは人間でもさうである、一つ腹から出た者でも大きな子もあれば、小さな子もあり、丈夫な者もあれば、弱い者もあり、長生をする者もあれば、夭死をする者もある、故に何處の木だからどうだと概括しては云へない、同じ木曾の檜だと云つて、一つ谷の中で一緒に育つて來たものでも自から其間に差異がある、極端に云へば、一本の木でも部分々々に依て違ふ、例へば根元の方と上部を比較しても、根元の方は脂が多いから、保存と云ふ上から云へば、耐久力があるが、上の方は脂が少いから、綺麗ではあるけれども、腐朽するのが疾い、仍ち法隆寺の建築にしても、當初の儘現存して

居るものは、非常に脂の濃い目の詰んだ材料で造つたものだけで、其他のものは腐つたり、壞れたりして、修繕する度に取替へられて居る、成程金堂でも五重塔でも飛鳥時代、或は白鳳時代のものには違ひないが、其全部が總て當時のものであるかと云ふと、決してさうでない、其中の幾部分、と云ふよりは、寧ろ大部分のものは幾度も其後に於て取替へられたものと見なければならぬ、例へば金堂にしても、外の柱は勿論、屋根裏のやうな所でも、瓦を剝いで、すつかりやり替へられたもので、其他堂内の部分々々に付ても、固より當初のものもあるであらうが、多くは修繕の度毎に取替へたものであらうことは十分想像が出來る、併し兎も角最も主要な金堂の柱と扉、或は五重塔の心柱及び四本の柱などは確に千二百年若くは千三百年前のものであることは疑ひない、是は目の能く詰んだ立派な檜で、今後もあの狀態に置けば、まだ千年でも二千年でも持つ、即ち木の表面こそ枯れて居るが、心にはまだ澤山の脂があつて、削ればざん〳〵出て來る、木に脂のある間は生命がある譯である、先にも述べた通り檜は非常に耐久力の強いものであるが、之に付て面白い話がある、臺灣にはまだ鐵道も出來て居なかつた後藤さんの民政長官時代のことであるが、亞里山の開かれた當時、あれを宮内省が有つと云ふので、宮内省から技師を調査にやつた、所が其技師の復命に依ると、山の彼方此方を歩いて居た際に大きな土堤のやうなものを發見したので、一同が掘り起すことにした、然るに地表にあつた苔が剝れて、段々心が現れて來るのを見ると、其土堤の如く見たのは大きな檜が倒れて居るのであつた、而も其倒れた木の上に又大きな檜が生へて居て、それが既に千年位を經過した老木であると云ふことであつた、果して千年も經過して居たものであるか、どうか、明ではないにしても、專門家が見て、さう云ふのであるから、先づ信用しなければならぬ、して見ると、それは下の檜が倒れた時に種が落ちて、其上に生へたものであるから、下の木は千年以前に倒れ込んだものであると云ふことは疑ふ餘地がない、而もそれが心の赤い、脂の充ち滿ちて居る所は少しも損まないで、まだ將來何年持つか分らないと云ふことであつたが、檜は地中に埋沒したものですら、それ程能く持つものである、果してそんな大きな檜が古の日本にあつたか、どうか疑問であるけれども、恐らく到る處に一團を成して、澤山あつたものであらう、それは學問上から云へば、多少木の種類が違ふとか、何とか云ふのであるが、其實例は今臺灣で見る事が出來る、亞里山のやうな檜の團叢は臺灣には幾つもある、既に手を着けかけて居る所もあるし、まだ手を着けぬ所もある、阿里山などは小さなものであるが、阿里山の檜だけでもなか〳〵澤山ある、現に過日も臺灣の紹介をする爲に總督も來て色々なものを見せられたが、檜の如きも一枚板で幅七尺と云ふやうな大きなものがある、是なら法隆寺の扉位のものを拵へるのは何でもない、又木の目が非常に詰んで居て、多量の脂を含んで居るから、あゝ云ふ木を用ひれば、法隆寺のものと同樣長く持つに違ひない、木が能く保存されるのは脂があるからであるが、近來は其脂を脫いて建築に使つて居る、網島の藤田さんの建築も皆脂を脫いたものを使つてあるやうであるが、室内に用ふるものは可いとしても、室外に使用するものまで脂を脫ぐのは可くない、又煮たり何かして脫かうと

佛教渡來以前の建築と木材――大和の周圍に茂生せる自然林と寺院建築――特別保護建造物の約七割强は奈良縣下の寺社――大和に古い大建築物の最も多いのは――大和豊年米喰はず――寺院建築の旺盛から影響された住宅の改變――檜を用ひた住宅――大和平原の木が代り盡されて檜樹の保存傾向を産んだ――寺院も建築よりは移轉となつた――宮殿建築の規模が大きくなつた――良材を遠方に求めて木津川を利用した――藤原宮の規模と用材――大規模な平城宮と檜材――「青丹よし奈良の都は咲く花のにほふがごとく今盛りなり」――大佛殿の用材は琵琶湖沿岸よりした――行基菩薩と大佛殿建築事務所――往時の大佛殿

しても、上にあるものは幾らか脫けるであらうけれども、全部脫き切れるものでもなし、さうまでして、脂を脫いて建築に使ふにも及ばない、脂があればあるだけ保存上から云へば可い譯である、そこで私はあゝ云ふ木は洵に貴重なものであるから、それをどん〳〵伐つて安賣をするのは甚だ面白くない、どうか成べく保存して置くやうにして貰ひたいと云ふ意見を述べた所が、總督も同意見で、あれは國寶だから、無暗に伐らぬことにして居ると云ふことであつたが、全くさうであらうと思ふ。

飜て佛教渡來以前の我國の文化の程度、又種々の狀況から考へて見ると、無論法隆寺の如き大建築はなかつたから、大きな木を伐る必要もなかつた、又大きな木を伐るのには容易ならぬ勞力を要するのであるが、伐つた所で處分することが出來ない、即ちまださう云ふ大きな木に鉋をかけて、建築に使用すると云ふまでに日本の建築技術が進んで居なかつた、從て當時大和の周圍には、近くは生駒から葛城へかけての一帶の山々を首め、法隆寺のそばの平群山、或は初瀨や三輪の方面から、あの邊の山々には澤山の木があつたものと思はれる、今でも三輪には多くの杉の大木が殘つて居る、然るに日本の文化も漸次進んで、支那や朝鮮の歸化人に依て大きな木を伐ることから、運搬、加工のことも行はれるやうになり、佛教が渡來して俄に大建築が興つたのであるが、聖德太子が出られ、彌々其勢が盛になり、太子の建てられた寺院だけでも非常な數に上つた、即ち大阪の四天王寺を首め、法隆寺、法起寺、法興寺、菩提寺、妙安寺、定林寺（以上七大寺）、元興寺、百濟寺、峰岡寺（今の大秦廣隆寺）、六角堂、柱向院、

熊凝寺、中宮寺、現光寺、日向寺、妙敎寺、坂田寺、茨田寺大宮寺、般若寺等總て聖德太子の建立に係かるものである、其他蘇我氏の建てたものもあれば、他の皇族などの建てられたものも多數あるが、遂に聖武天皇に至つて全國に國分寺（國分僧寺、國分尼寺）を建てられ、今猶ほ國分寺跡と云ふものは到る處にあつて、現に其大きな建物の礎石が殘つて居る所もある、のみならず建物其ものも遺つて居るものもあるが礎石に付て見ても、恰も今日鐵筋コンクリートの大建物が盛に建てられて居る如くに、當時木造の大厦高樓が盛に建築されたことが想像される。

所が明治三十八年に古社寺保存法が制定されてから大正十一年までに特別保護建造物として指定されたものが九百九十棟で、其後にも多少指定されたものがあるから、現在約千棟あるとして、其中百七十二棟は奈良縣のものである、而も弘仁（今より千百十五年前弘法大師在世時代）以前の法隆寺を首め日本最古の建築物が三十一棟あるが、其總てが奈良縣に在ると云つて可い位である、何故大和に斯うした古い大建築物が最も多いかと云ふと、無論古い時代に於て建てられた建築物其ものが大和に多うかつたのに違ひないが、又其土地柄に付て能く注意しなければならぬ、元來大和は極めて平安な所で、大佛などは戰爭の厄に會つたけれども、其他はさう云ふ兵亂の巷から遠ざかつて居たと云ふことも一つの理由であり又あゝ云ふ山の中で地震や火災と云ふことも少かつた爲であらうが、更に重要な點は大和が非常な乾燥國であると云ふことである、俗諺に面白いことがある、是は私のよく話すことであるが、從來大阪の者は「大和豊年米食はず」と云ふことを言つた、即ち大和が豊年の時には米が食へぬと云ふのであるが、是は半面に於て大和と云ふ所が餘程な乾燥國であることを證明して居る、從て平常の天候では餘り米が出來ない、大和が豊年だと云ふやうな時は所謂雨年であつて、一般には虫の多い年柄で、大阪附近の河内攝津と云つた方面は水が多過ぎて米が出來ない所から、さう云ふことを云つたものらしい、又今ではさうでもないが、昔は大和と云ふ國は奈良酒と云ふ木綿の産地であつたし、干瓢の名産地でもあつた、是が矢張り大和の乾燥國であることを示して居る、棉は今では外國から來るが、非常な乾燥國でないと出來ない、干瓢にしても、乾して造るもので、乾燥した所でなければ、造れない、濕氣が多い所では、すぐ黴びてしまふ、それを今は下野に押されて、やらなくなつたけれども、元は大和でやつて居た、其後乾燥した所であるが、木材の保存と云ふ點から云へば、それが又非常に好都合である、而も人爲的の火事とか、兵亂と云ふものに餘り會はなかつたから、大和に多くの古建築物が遺つたものと考へられる。

却說聖德太子が出られて寺院建築が盛になると同時に、皇室は勿論、皇族や貴族方から、其他地方の豪族と云つたやうな連中の住宅と云ふものも、最早從來の掘立普請と云ふものではなく、恰度今の朝鮮のやうな狀態であつたらうと思ふ、今朝鮮へ行つて見ると、宮殿とか貴紳の住宅は隨分立派なものであるけれども、其他のものは藁葺の粗末なものである、あんな風に、當時の一般住宅のことに付ては誰も言及して居ないやうであるが、どうせ、藁葺か、萱葺で、板で葺いたのはズッと後のことであらうと思ふ、況や瓦で全部葺くやうに

なつたのは最近維新後のことである、我々も知つて居るが、東京でも八王寺あたりには瓦葺と云ふものはなく、皆萱葺であつた、即ち維新後屋根は瓦で葺かなければならぬと云ふことになつて、全部瓦になつたけれども、以前は宮殿とか、寺院とか、極く立派な家の外は瓦を用ひなかつた、從て當時一般平民の住宅などは餘程良いものでも檜などを用ひたとは思はれないが、貴紳方の住宅を其儘寺院にしたと云ふやうな例は幾らもあるから、それ等の住宅は立派なもので、檜を用ひて居つたに違ひない、檜は先々にも述べたやうに木柄が眞直で、香が佳く、綺麗で、耐久力も強く、細工もし易い、而も日本中到る處にあつたので、少くとも日本紀の出來た時分、恐らくズツと古くから檜の建築材料として最も適當なものであると云ふことは知られても居り、又古くから之を用ひて居たものと思はれる、所が世が進んで來るに從て建築も頻繁になるし、それが燒けたり、腐つたりすれば、又改築もしなければならぬが、檜と云ふものは相當重いものであるから、誰が考へても、先づ便利の好い手近なものから代つて行く、そこで初に大和平原の木が段々伐り盡されて、手近に良材が無くなると、方々搜し廻つたものに違ひない、而も到る處に澤山あつたでもあらうが、何しろ總ての器具器械が不十分な時代で、それを伐つて、運搬し、細工を施して建築をすると云ふことはなか〳〵容易なものでなかつたらうし、又貴重な立派な木を無暗に代採するのは勿論ないと云ふことになつて居つたのであらう、當時にあつても濫に寺院を新築すると云ふことはせず、他から移轉して來た例が幾らもある、即ち藥師寺の如きも其一例で、礎石だけが畝傍山の側に遺つて居る、又法隆寺の現在の講堂は京都の法性寺の建物を持て來たもので、藤原時代のものである、尙ほ時代はズツと下るが、醍醐の三寶院には秀吉が根來から持つて來た建物がある、醍醐あたりなら、あの邊の木を伐つて細工を施したら可かりさうに思はれるが、能々遠方の紀州の根來に在つたものを壞して持て來たのであるから、當時に於てもあれだけのものを建築するのはなか〳〵容易なものでなかつたと云ふことが想像出來る。

それで佛教が渡來すると、寺院建築と云ふものが俄に盛になつたが、宮殿の建築も支那との交通が頻繁になるに從て段々其規模が大きくなつて來た、初めの御歷代毎に宮殿をお造りになつて居たが、是は掘立普請で直ぐ腐朽するからの止むを得ない必要に出でたものであつた、そして瓦で屋根を葺かれたのは全く飛鳥朝以後のものであるが、板で葺かれたのは飛鳥朝の板蓋宮が初であると云ふことである、然るに段々大和平原では良材が得られなくなつて來たので、之を他の最も得易い方面に求めなければならぬ、そこで今の木津川を利用して江州方面から持て來る事にした、即ち其木の澤山集つた所が木津と稱せられ、元は泉川と云つたのが木津川となつたのである、即ち飛鳥朝時代にはまだ泉川と云つて居た、木津川と稱したのは奈良朝になつてからである、有名な持統天皇の藤原宮は唐制に倣つて建てられたもので、其のお宮の樣子は萬葉の藤原宮御井歌に依て略々想像が付くが、彼の三山（畝傍山耳成山天香具山）の間に在つて、御門も澤山あり、非常に立派な規模の大きいものであつた、從て其用材も莫大なものであつたに違ひないが、是も萬葉の藤原宮役民歌に依て

何の木を何處から何うして持て來たかと云ふことが明瞭に判る、即ち其木は江州の田上山(石山寺の對岸)の檜を伐つて宇治川を下し、宇治川と泉川(木津川)の落合の所で筏に組み、更に泉川を上つて持越したものである、是程骨を折つて建てられた立派な藤原宮も僅か十七年しか居られないで、遂に奈良に遷り、こゝに所謂平城宮が、建てられたのであるが、是は今の西大寺と奈良驛の間に在つて、日本で出來た最も大きい宮城であつた、所謂大內裏で、迹も現在の京都の御所などの比ではない、尤も今の京都御所には大極殿と云つたやうな表立つたものは無いので、元は矢張り非常に大規模のものであつたらしいが、燒けてしまつた、併し其圖面が遺つて居るから、それに依て其位置と規模を明にすることが出來る、又平城宮の方は圖面はないが、其跡がスッカリ土が高く盛上つて、舊の儘遺つて居るから、どう云ふものであつたかと云ふことが判るし、現に其建物の一部分たる朝集殿と云ふのが唐招提寺の講堂として現存して居るが、是が矢張り用材は檜である、先の藤原宮役民歌と照合して、當時どう云ふ木を使つて、どう云ふ建築をしたかと云ふことが分る譯である。

其後例の「青丹よし奈良の都は咲く花のにほふがごとく今盛りなり」と云ふ萬葉の歌にもある奈良朝の最盛期聖武天皇の御代に大佛殿が建立された、是は初め近江の信樂で工を起され、詔勅の出たのも信樂であつて、基礎工事などもなされたのであるが、段々反對の聲が大きくなり、遂に奈良にお還りになつて現在の場所に改めて御建立になつたのである、其時は何處から木を運んだかと云ふと、矢張り琵琶湖の沿岸一體を伐つたもので、當時石山寺に行基菩薩が居つて、あすこが大佛建立の事務所であつたが、膳所矢橋の沿岸から、瀨田川の西岸は木材で埋つて居たものらしい、それも大分に大材を持て來たもので、奮記に依て見ても末口直徑三尺五寸、長さ百尺と云ふやうなものがある、今の大佛は金堂一つで、小さくなつて居るが當時はもつと大きなもので、周圍の廻廊の外に七重塔があり、其塔にも亦廻廊があつて、其他附屬の建物が澤山あつたから、其用材の量は莫大なものであつたに違ひない、それが何の木であつたと云ふ事は書いてないが、現在の正倉院と三月堂の半分は天平時代のものが其儘遺つて居るのであつて、是は木を削つて見なければ精確なことは判らないが、其木柄を見て、正倉院御物其他から判斷すると、先づ檜であると鑑定する外ない、從て何か他の木が混つて居つたかも知らぬが、恐らく從來の歷史から考へて見ても、全部檜であつたらうと思ふ。(未完)



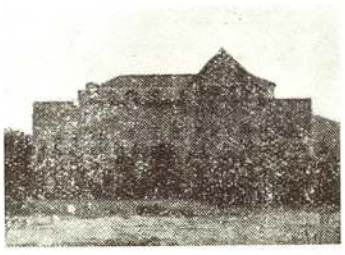
五分間

素人ばかりのサーヴィスで行くホテル

ゆつたりとして、手輕な設備

寶塚ホテル　須藤支配人談

建築のことには全く素人ゝ云ふやうな譯でありまして、殊に又ホテル業そのもので斯の種の業務に從事したのに付ても曾て何等の經驗を有たず、固より其建築設備に關して如何にすれば能率が上るかゝ云ふやうな微細な研究をしたことのない私どもして、今更別に取立てゝ申上げる程の材料は持合はせて居らぬのでありますが、元來此ホテルの特徴は何も彼も總て素人ばかりでやつて居るゝ云ふ所にあるのであります、從て料理人の如きも昨年の八月に、まりまして、私共どもしては只だ世間の型に嵌らない學校出のホヤ〳〵の人を採用し全く自由な、根本的に新しい方針の下に、從來斯うした營業に伴ふ所の種々な情弊ゝ云つたやうなものから超越して、寧ろそれ等のことを改善して行きたいゝ思ふて居るのであります。



又此の寶塚ゝ云ふ所は大阪、神戸ゝ云ふ兩大都市の中間に在つて、阪急電車に依れば、何れも僅かに三十分間位で往來が出來るゝ云ふ所でありますから之を兩市の延長ゝ見ても一向差支ないのであります、從て一般の旅客どもしては市の騒々しい所に泊るよりも、寧ろ少しく歩を伸して、所謂田舍から、餘り贅澤な部屋は排えなかつたのでありまして唯ホールゝか、食堂、或はスモーキング、ルームゝ云つたやうな、即ちパブリックな所だけを成べくゆつたりゝした氣持の好いものにしたいゝ云ふので、出來るだけ其規模も大きくして居りますが、客室の方は寧ろ成るべく之を小さくして努めて室料を廉くし、氣輕に宿泊の出來るやうにして居る積りであります。

紫水明の此の寶塚まで來て泊る方が遙に氣分も落付いて可い譯でありますが、それには一ホテルどしても一面に於ては市内のそれゝ同じやうに、氣輕な、所謂商人宿ゝしての條件を備へるやうにしなければならないし一面に於ては、ゆつたりゝした郊外氣分の豊な、即ち寶塚ゝ云ふ環境にふさはしい、相當遊樂氣分にも富んだものにしなければならぬ此の二つの異つた方面を如何に調和さして行くかゝ云ふ所に多少の苦心を拂つた譯でありまして、斯點に於て幾分でもお客の滿足を得られゝば、非常に幸だゝ思ふて居ります。

折角の御來訪に對して、お需めに副ふやうな意見を申上げることが出來ず、甚だ恐縮でありますが、此ホテルの建築に付て私共の大體の心構へはさうした所にあるのでありますから、建築設備の微細な點に付ては建築家諸君は固より大方の御批評ゝ御指導を仰ぎたいゝ考へて居ります。

そこで建物に付ても概括的に云へば、成べく之を民衆的のものにしたいゝ云ふゝ申上げるまでが皆中學校の卒業生ばかりであります、從て當分の如きも昨年の八月に、まりまして、私共どしては只だ世間の型に嵌らない學校出のホヤ〳〵の人を採用し全く自由な、根本的に新しい方針の下に、從來斯うした營業に伴ふ所の種々な情弊ゝ云つたやうなものから超越して、寧ろそれ等のことを改善して行きたいゝ思ふて居るのであります。

綠の霞を追ふて

長野から 錦鷄溫泉へ

江村恒一 KO.

長野「觀心寺」に始まる。

「午前十一時長野驛に參集」とのお觸れ出し。接待係の襟に挿せる眞紅の徽章も、薄綠りの樹々に榮へて、遊行氣分は既にこゝから溢れた。

驛頭に、卓子の關所を構へて、電車から吐き出される人の流れに、參會者を物色する、ご案内する、蓋し、接待子の氣骨も、却々であつた。

兎角して、目も綾な鮮まや々々しい綠り葉の香に、氣もすが〳〵しい山道を、風物の狀景に心を遣りつゝ、そゞろ歩きもて「觀心寺」へてくる者、途中の風物などはと、バスで飛ばすエフエセンチストもあり、先づ總勢四十人と註せられた。

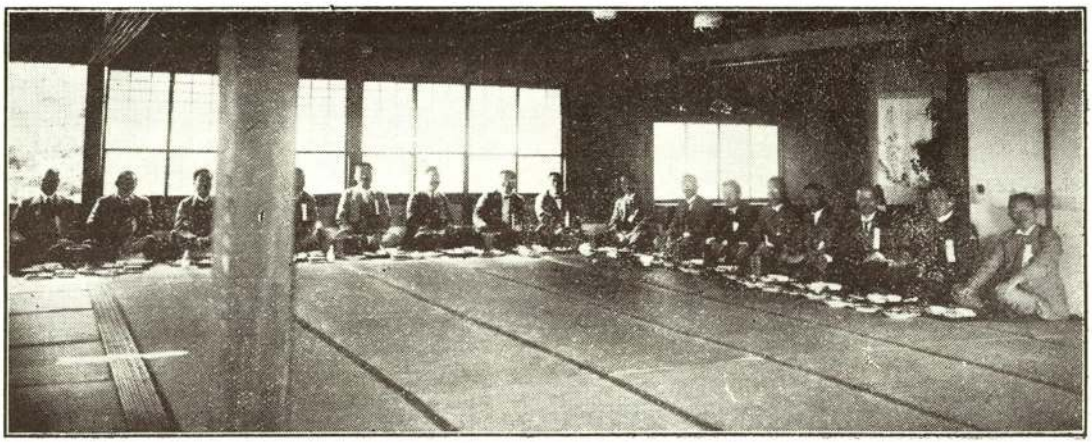
「目に青葉、山ほとゝぎす初松魚」——その山ほとゝぎすもが古い奴だがなと懷はれる目に青葉の沿道の風情は、今夕の錦溪温泉でのご馳走振りに縦しや松魚の刺身を缺ぐとも、電話とベンと、應接と、ごつた返しの雜音と、小刀細工と、頭の上に威嚇的なビームと等、等、ビルディング生活に荒んだ吾等の心を滿たすには充分であつた。

『當山は、文武天皇大寶年中、優婆塞役の小角の創建になりまして、初めは雲心寺と申しました。人皇五十二代嵯峨天皇當山を御崇信遊ばされて、御勅願所となつて居りました。當山に詣でると奈何にも心を照されるようであるとのことから、後ちに「觀心寺」と改められました。此處より二十四丁許りの處に、「水分」といふ邑がご在いますが、楠正成公はそこに御誕生になりまして、正安三年、八歳のときより當寺に寄偶され、院主瀧覺御房について文學を修め、此處から一里餘りの處、舊錦郡加賀田の鄕士大江修理亮時親に就いて十五歳の頃から兵法と武藝を學ばれたのでムいます。大楠公が彼樣に偉大な人格を有たれましたことは、師瀧覺御房の薫陶によるのでムいます。當山は「弘仁の觀心寺」と申しまして、建築彫刻繪畫の多くは弘仁時代のもの許りで、就中、建築は、あの升組みの如きも「觀心寺樣式」と稱へられて居

花には深か還れ綠

りに早きさつきの第三日曜てふ去る日、南河の勝地を遊歷して、日本建築協會の春季大會を開かれた

先づ、プログラムは楠氏の縁りにしるき



ごぞうご

――錦醫――

りますことは建築家の方々でムいますから詳しく申上げるまでもムいません。それから、此の下に在ります「塔堂」は、建武年中、楠公成公が願主となりて三重の塔を建立されましたが、漸く初重が成つたとき、あの湊河の戰が起りましたので、その儘になりまして、俗に之を「建掛の塔」と申します。それから……」

黄色い風薫りて、念



若葉に照ゆる面影

――てに寺心觀――



ゆ　つ　く　り　と
温　泉　で　——

法衣に珠をつまぐりつゝ、師の坊は縷々として説明竭きなかつた。千幾百年の香り高い堂塔、老杉の茂みに法燈搖らぎつつ、唄梵の聲は、閑寂な溪谷に谺して、溶け入るような心境に、文化とかの桎梏から、暫し解放されたのは、何んといふよい氣持ちであつたらう。——紀念にもと、斯うした境地を背景に、一行は御坊をも加へてレンズに入つた。

此處より、一行は、思ひ々々に二手に分れて、バスを飛ばす者、山越へをなす者、斯くて、名刹「藥樹山延命寺」へ落ち合ふた。

寺誌に曰く「昔、弘法大師巡化の砌、藥樹藥草の多く生へたるを見、又靈水の湧出せるを見て眞言密敎を弘むるに至極適當の靈地なりと感想し給ひ一寺を創立し、……佉羅(キャラ)山寶幢寺と名け給へり、又其の靈水は花井戸と名けて寺の門前にあり、毎朝此の水を汲み閼伽香水として本尊に供養す、……爾來學德兼備の高僧續出して法燈連綿たり、殊に先師照遍和尙は明治佛敎界の大偉人にして活佛の稱贊ありしこと世人の知る所なり」

と來た。例によつて種々なる結構を見せられた。何處へ往つても、歷史と結構が命では、何んだか手澤の骨董品でも拜見するような氣持ちしてクラシカルな雰圍境に陶醉氣分を覺へつゝも、聊か「哀傷」奴が頭を擡たげた。——鐘樓を背景に、此處でも一行をレンズに撮つた。

陽差しは やうやく 葉隱れに、山の端近くもなつた。朝まだきより除外例の早起き？に、殆んど飮まず喰はずで、徐ろ々々物足りなきを覺へた。斯くて錦溪温泉——名前といふものは何んとでも麗はしく附けられるものだ——とやらへ、最後のプログラムを辿つた。

錦溪温泉、それは、書くにも餘りに知られ過ぎて居る。温泉がどんなものか、筆者は見參せなかつたが、餘りに紛俗振つてゐたのには、錦溪とやらの自然美に餘りの期待を持つた筆者て於ては、聊か面喰つた、とは云へ、環境、殊に、取り入れた庭の自然美には、流石に斯うした境地でなくばと、階下、離亭に湧く銅羅唄や、三味線を叩く—彈くとは思へない—音に混せ返されながらも、佳い氣持ちになつた。—參會の各位も多分御同感でがなご座らう。

上戸も　何んにしても、一日のピクニックに、淡い汗と、輕い疲れを、
下戸も　此處に卸して、打ち寛いだ、そして、水入らずの宴席は禮に始まつた。

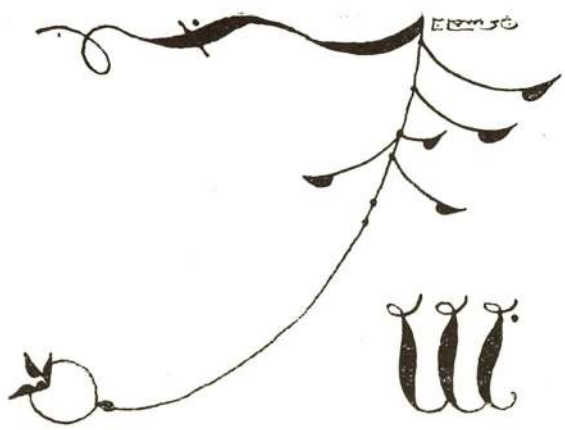
是は恒例とあつて、委員長浦英之助氏が、委員諸氏を代表してあのあいそのよい挨拶が始まつた、そして園部理事長からの祝電を披露された。ほんとうに心から、委員諸氏の當日の勞を謝する拍手は青葉の茂みに谺した。

此處にも、レンズは此の歡樂の場面に向けられて、シヤッターを曳いた。寫眞屋君、此の場面を入れるには可成りの骨であつたらしい二枚に撮つたのは餘儀ないのであつた、餘計な事だが御挨拶を申してちよッと提灯を。



夕陽に彩られて
——延命寺にて——

參會四十名餘り多數とは云へないが、それでも、謂はゞ建築界といふ大家内の人々、斯うした機會に種々の意味に於て佳い効果を作ることは云ふまでもない。一日の麗はしい遊行、一夕の清い歡宴、平和と待望は斯うした事からでも生れると此處にも提燈をもつて、來ん秋季大會を想ひつゝて稿を閉る。



住友ビルディング
新築工事概要

位置　大阪市東區北濱五丁目貳拾貳番地
本建物は住友ビルディングの一部にして南側に略同大の增築をなし以て全部を完成するものとす
起工　大正十一年十二月
竣工　大正十五年四月
敷地面積　貳千五百八拾坪八合九勺
階數　地階附六階建　別に屋階を有す
建物面積　本館　建坪　九五五坪二八
延坪　五、六四五坪八四
內譯
地階　九六九坪一四
一階　九五五坪二八
二階　八四五坪三五
三階　八四五坪三五
四階　八四五坪三五
五階　八四五坪三五
六階　三四〇坪〇二
屋階　六五坪〇七
附屬家　建坪　一〇三坪四九
延坪　二〇三坪七三
內譯
地階　一〇〇坪二四
一階　一〇三坪四九
建物大サ　間口　東西　二百四十四尺（柱眞）
奥行　南北　百五十尺（柱眞）
高さ　地盤より五階軒扶欄上端迄八十尺
ペント、ハウス上迄　百尺

一、設計大要

間取　一階北側中央に正面大玄關、東及西側に側面玄關を設く、各階の配置次の如し
本館
地階　金庫、帳簿庫、書庫、雜庫、印刷室、變電室、蓄電池室、空氣洗滌室、守衞及使丁室
一階　株式會社住友銀行本店事務室、同營業部（假營業所）等
二階　株式會社住友銀行本店
三階　住友合資會社
四階　住友合資會社、住友生命保險株式會社、株式會社住友ビルディング
五階　住友合資會社林業所、住友合資會社製銅販賣店、株式會社住友肥料製造所、食堂等
六階　休憩室、廻廊、昇降機機械室、水槽室、換氣裝置室、青寫眞室等
屋階　物見臺、昇降機機械室、消火水槽室

附屬家

地階　煖房機關室、ポンプ室、石炭庫等

一階　車置場

様式　近世復興式

外裝　東西及北面外壁の乾濠床より一階窓下迄は岡山縣高島産鬼赤花崗石貼付軒抉欄笠石は廣島縣倉橋島産鬼赤花崗石積、玄關周圍及丸柱等は兵庫縣寶殿産龍山石の內白石と稱する淡褐色の石材を貼付す、以上を除く他の外壁は龍山白石に擬したる鐵筋入人造石厚二寸のものを張り、採光庭周圍は卵殻色化粧タイルを貼付す

內裝　一階大廊下の壁全部と事務室及假營業所內の腰羽目、柱型及柱とは伊太利産大理石にして二階以上の廣間及廊下の腰羽目は日華石、重要なる室の腰羽目は鐵製とす、其他一般に室の壁面はプラスター、ペンキ塗仕上とす

床　便所壁はプラスター塗、腰羽目は白色文化タイル張とす

鐵筋コンクリート版上に配管の爲粗コンクリート打の上事務室に在りては厚四分コルク、モルタル塗を施し厚四ミリ、リノリウム敷、一階廣間大廊下及客溜床は岡山縣萬成産花崗石敷、二階及其以上の廊下廣間床は研出人造石敷、便所床は白タイル敷とす

屋根　一階事務室、假營業所、廣間、大廊下及重要なる室の天井は石膏彫刻付プラスターペンキ塗、一階天窓の部分は屋根ブリズム硝子嵌込天井ステーンド、グラス張、其他一般事務室の天井はプラスターペンキ塗仕上とす

天井　鐵筋コンクリート陸屋根とし防水層昔の上素燒タイル敷又は豆砂利コンクリート打洗出仕上とす

建具及防火扉　外部に面する窓には上下スチール、サツシュ及ベルト引防火捲上スチール、シヤツターを用ひ、採光庭に面する窓には上下スチール、サツシュを二重に建込み兩面磨ワイヤーグラスを嵌込む

各室の出入口扉は總て鐵製にして外部に面する出入口扉は鐵扉の外更に防火捲上スチール、シヤツターを附す

二、構造大要

基礎　柱下は生松丸太末口五寸乃至六寸長十尺乃至十五尺の杭を打ち鐵筋コンクリート礎版孤立地形なるも礎版の形狀を八角形とし隣接礎版と互に連絡せり

躯體　鐵骨、鐵筋コンクリート耐震耐火構造にして鐵骨材約一千六百五十英噸を用ひ、鐵柱、鐵梁は總て鐵筋コンクリートにて包む、床版、外壁、小梁及主要なる間壁は鐵筋コンクリート造其他の間壁は煉瓦又はホロータイル積とし補强鐵網を積込む、耐震壁として强大なる鐵筋コンクリート壁を階段室、エレベーターシヤフト周圍其他の箇所に配置せり

金庫室　地階に大金庫室を設け厚十吋ヨーク金庫扉を附し室內面には防盜用特種スチール、ライニングを施す、壁は鐵筋コンクリート造厚約二尺、天井は同上厚約一尺五寸、二階及三階に一箇所宛小金庫室を設け厚六吋ヨーク金庫扉を附す、壁天井床共に鐵筋コンクリート造厚約一尺なり

三、設備大要

煖房　温水强制循環式にして附屬家地階に温水煖房汽罐三基を設置し、温水循環用ポンプ二臺を備ふ、温水は主管により五階天井裏に到りこれより各室の放熱器に送湯す

換氣　地階の金庫、帳簿庫、書庫へは西玄關天井外部より取入れたる空氣を地階空氣洗滌室にて洗滌加熱して送氣す

地階の金庫、帳簿庫、書庫、變電室各階喫煙室、便所厨房等の空氣は換氣筒を通じて六階換氣室のシロツコ型電氣扇によりて排出換氣せらる、各階天井及窓下放熱器の背後には換氣孔を設け自然換氣を行ふ

電氣

電燈及動力用電力として二七〇キロを市電氣局より受電し地階變電室にて變電して各階に送電す、別に蓄電池設備ありて停電の際も自働切替裝置によりて階段室其他主要なる場所に點燈するものとす

動力用モーターは昇降機、換氣扇、給水、排水其他を通じて三十臺三百四十馬力を設備す

照明

電燈約千二百個を配置す

電話電鈴

電話は局線川として四百對ケーブルを引込み約二百個の私設電話を設く局線交換臺は各席毎に、私設線は臺毎に各マルチブルとし二座席のもの五臺を設備す、是等配線の爲床コンクリート上面と床仕上面との間に鐵板製箱溝を約六尺間に埋込み任意の箇所より引出し得る樣にせり

電氣時計

各室及要所に配置す

瓦斯

五階厨房及各階湯沸場へ瓦斯を設備す

給水給湯

水は上水道本管より附屬家地帶に設置せるサクション、タンクに導き此處より六階水槽室に設けたる二箇の鐵板製給水槽に送水し水槽より鍊鐵管によりて各階洗面所、便所並に厨房等へ給水す

洗面所、厨房、スロツプシンク其他への給湯は附屬家地階に設けたる給湯用汽罐に依り、送湯管には眞鍮管を使用す

排水

屋根より導きたる雨水は一階床高にて鐵管により乾濠を横切り下水道へ放流す、乾濠の雨水は之を東西兩サンプ、ピツトに集めサンプ、ポンプにて下水道に放流す

二階以上の洗面所、便所、スロツプシンク等よりの排水は一階天井に沿ひ吊下せる排水主管にて附屬家北側に設けたる汚水淨化槽に導かる

又一階及地階の各排水及採光庭の雨水等は地階床下に設けたるエヂエクター、ピツトに導き此處よりショーン式エヂエクターに依りて淨化槽に送る

淨化槽にて淨化したる水は下水道に放流す

各階便所に設けたる和風及洋風便器は總てフラツシュ、バルブ附洗滌式とし、洗面所内には洗面器の外ドリンキング、フアウンテンを設備す

昇降機

防火壁を設け各階を數區の防火區域に分割す尙階段室、エレベーターシヤフトは完全なる防火構造とす

防火裝置

前揭各換氣筒は勿論各室天井に附せる自然換氣孔にも夫々防火ダンバーを附し熱氣に遭へば忽ち自働的に閉鎖し換氣を防止する裝置とす

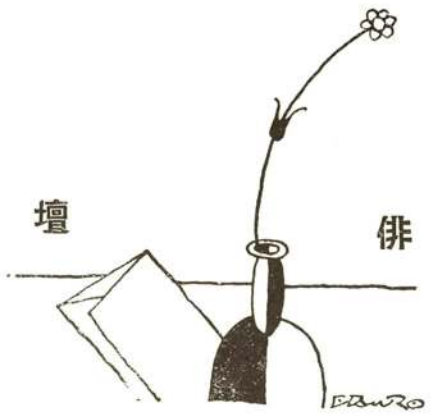
屋階に消火水槽を備へ之より階段室三ケ所に設けたる消火栓に給水す是等と關聯せる高壓消火ポンプを附屬家地階に設け何れの消火栓より放水するも直ちに警鈴鳴りポンプの運轉を開始し最高所の消火栓に於て毎平方吋百ポンドの水壓を生じ消火に遺漏無きを期す

客用五臺はオーチス、トラグションタイプ、積載量二千封度、速力一分間二百五十呎にして內二臺は地階より六階迄他の三臺は一階より五階迄運轉す

人荷用一臺は積載量四千封度（特別積載量五千封度）、速力一分間百五十呎（特別速力七十五呎）、地階より六階迄運轉す

厨房用電力リフト一臺は積載量二百封度、速力一分間八十呎、地階より五階に至る

× × ×



若葉・初夏

齋藤溪舟選

塔の影初夏の水に映りゐて　同
日毎掃く別荘の庭や夏淺し　同
絹裏の肌すが〳〵と夏初め　曠村
水入田の水吹く風や夏初め　同
初夏の物賣通る巷かな　同
魚焼けばいぶる松葉や初夏の宿　未乾子
苗賣の夏めかしたる通り哉　同
初夏のさやかなる音や水餅屋　同

……

初夏の山ワイシャツに松の書贔　菜辻
初夏の外は日ざしや御堂の灯　同
初夏の頂心ひろく立つ宵灯　同
初夏の白粉臭き膚へ哉　同
木の間透いて藍濃き色や初夏の海　紫波
雨癖のけふ晴切つて夏に入る　同
初夏の山々や江の朝かすみ　朝衣
松山の松の翠りも夏に入る　同
人動く河原晒布や夏に入る　宰人
大佛の屋根（一句）
初夏の木の間に光る雕尾哉　魯堂
初夏の虹の輪消ゆる水江哉　同
初夏日々に雨降る河原柳かな　羽仙
初夏の草を出でたる蝶々哉　同
竹伐りに入る竹の中夏初め　當二郎
初夏や額の繪かへて朝に讀む　智美
海景や窓にゐてみる若葉越し　同
寺若葉社地の若葉と日晴れけり　易水
丘の若葉入海近く暮そむる　同
深庭や若葉じめりを導かれ　縫子
若葉の香句座に入りくと覺えり　同
梅若葉覓したゝる蕗の中　羽仙
街路樹も若葉して表通り哉　同
觀心寺にて
首塚や若葉浸りに苔ふみて　菜辻
杉の木にまじる離木の若葉哉　同
ばら若葉垣ぞひに人過りゆく　曠村
窓に倚る憂き人よ若葉陽に濕る　同
十三堤にて
煙突の煙ながるゝ若葉哉　魚樂
堤の下に四五軒並び若葉哉　同
新ラ庭の上土乾く若葉哉　宵灯

初夏

初夏の風あふつ坊の簾かな　保月

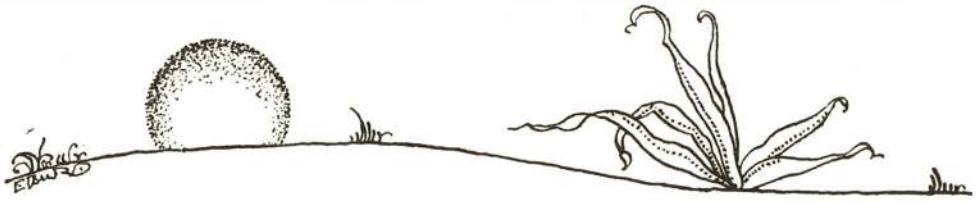
若葉

遠峰になが〻る〻藍や若葉雲　未乾子
すぐ乾く若葉の雨や濱社　同
二三匹ひる蝙蝠や若葉寺　同
やまめ焼く雨の若葉の泊り哉　紫波
寺々や甍かくる〻谷若葉　同
押合て堰の水落つ若葉哉　同
土手若葉渡舟を出て〻上りけり　智美
隧道を出てすぐの驛若葉哉　同
掲示板塗かへてある若葉かな　同
日毎濃くなりゆく濠の若葉哉　石甫
若葉晴石段に淡路近く見る　同
岸若葉繭買船を繫ぐなり　同
生ぬるき養生風呂や若葉風　秋洞
人に問うてアカシヤと知りし若葉哉　同
萩若葉隱れに障子あけてあり　保月
風晴れの赤屋根みゆる若葉哉　同
夜色なほ水を放れず村若葉　告天子

投句を歡迎す

◆課題
『清涼飲料』（サイダー、ラムネ、タンサン又はビイルにてもよし）
『早柳』各五句まで別紙に

◆締切　六月二十日
◆發表　七月の本誌
◆屆先　日本建築協會
堂島ビルデイング内



風流茶飯

溪舟

◎俳句といふものは風流人のやるもので、風流なものでせうれ。

□風流といふことは、一體どういふ工合のものか、私にはちよつと考へつきませんが、よく看板などを見ると「風流御履物」「風流あづまあられ」などと書いてありますが、あなたの考へてゐる風流といふのは、やはりあんな意味の風流ですか。

◎それとは何うも少々ワケが違ふやうです履物屋の風流といふのは、スイ　とかイキなとかいふ意味を含んでゐるだらうと想像しますが、私の考へてゐる風流といふのは、少し斯うサビしいやうな、サビのついた……乏しいやうな、ヒネつたやうな……

□何うも困りましたれ、それぢやア他人にはよく分りませんよ。

◎いや、他人に分らないのは當然です、實は私自身にもよく解釋がついてゐないやうですけれど、強いて云つてみませう、まア風流といふ心もちは、世間の事務から遠ざかつて澁色か灰色めいた衣ものでも着て、茶人のさげるやうな……さうさう、茶人趣味といつたやつが、まア一番風流に近いものでせう、あの風流は寒いものだと云つた人があるさうですが、あの味ひが私のいふ風流に近いものです。

□ははアあの風流ですか、しかし、さうだとすると、あなたはマルで俳句を誤解してゐたといふより外はありませんれ。

◎さうでせうか。

□俳句はそんなものぢやありませんよ。

◎さうですか。

□俳句を作ることを、あるひは俳句の趣味を、あなたのやうに解してゐる人は、かなり世間に多いから困るのです。

◎さうですか。

□俳句の趣味は、そんな詰らない墮落したヒマ人の仕事ぢやないのです。

◎へえ。

□へえぢやありませんよ。尤も十徳を着たり、居士帽を被たりしてゐる連中には、よくさういふ風な考へをもつてゐる人があるものですが、これはそんなものを着るから、そんな考へをするのではなくて、そんな考へ方をしてゐるから、自然そんなものを被たり、ヒネつたものを持つたりするやうにもなるのでせうが、そんな連中は、俳句といふものをよく知つてゐるのではないと思ひます。俳句といふものは、そんな風流なものぢやありませんよ。

◎私は、そのヘンな風流めいた事がきらひですから、實は俳句なんてものをヒ子る事が何んだか隱居仕事かヒマ人茶人のマネでもするやうで、いやなのです。

□けれども眞の俳句といふものは、そんな意氣地のないものぢやありません、それはどんな精力家でも、勤勉家でも、堅藏でも眞面目人でも、さういふ人達から生れてくるのが普通なのです、風流人の風流俳句などは、トテもものになつてゐるワケはないのです。一たい我々は、さういふ連中に俳句を渡してはならないと思ふのです。よく見渡してみると世間で精力家といはれる活動家、有力家と云はれる紳士階級の人たち、學者、教育家、宗教家、軍人などに——これは例外はありますが……この俳句を解しない、またやゝ解してゐるにしても近づかない人達が多分にゐますこの人達は何ぜ俳句などを眼中においてないかと云ひますと、今あなたの云ふ誤つた「風流思想」が祟ひして居るのです、俳句なんてものは、文弱な者のやるもの、茶人ばらのヒネるもの、詰らない遊び事　……といふやうな考へが、その人たちの心持のドコかにある筈です、けれども、俳句といふものは、決してそんな弱いものでも、風流めいたものでも從つて詰らない仕事ではないのです。

◎しかし、實際俳句は風流人がよろこぶやうに出來ちやゐませんか、その味いが。

□それは風流人がよろこぶのは勝手ですが元來が風流人の爲のものぢやありません、私は常に注意して本誌の投句家の俳句の傾向をみてゐますが、何うもあなたのいふ風流人のよろこびさうな趣味のものが、實はかなり多いやうです、それは自然嘆咏もいいでせう、また山林や田舍の情景などを咏ふのもいいでせうが、私の答へとしては、もつと都會の事私たちのしてゐる實際の事、都會人、市人、町人の生活に觸れてゐる現在の事を、もつと澤山に咏んで貰ひたいと思ふのです、兎角俳句といへば、山や野や田舍びた事のみが專一になる傾向のあるのは、俳句といふものは、さういふ風にあるべきものといふ、先入主の考へが祟ひしてゐるのぢやないでせうか。私はもつと市井雜人、常人茶飯の事柄も咏つて貰ひたいと思ひます。

本誌定價表

本誌	冊數	定價	郵稅
	一冊	七拾五錢	貳錢
	十二冊	九圓	貳拾四錢

（毎月壹回一日發行）

大正十五年五月三十日印刷
大正十五年六月一日發行

大阪市東淀川區中津町一九八番地
發行兼編輯人 江村恒一

大阪市東區內淡路町一丁目卅一番地
發印刷人 大阪活版所

印刷所 大阪市北區堂島濱通一丁目二番地堂島ビルヂング 建築協會

發行所 日本建築協會
電話北四二九一番
振替口座大阪三九七五

特約販賣店 大阪市西區京町堀羽子板橋北 柳々堂書店
電話（土佐堀二四四〇番）
振替口座二〇八四番



故會員　谷口廉兒君之照肖

會員谷口廉兒氏本年四月十三日を以て逝く洵に惜悼に禁へず茲に小歷と照肖とを揭げ謹むで弔意を表す。

氏は明治二十二年三月青森縣鯵澤町ノ醫師岸家の次男に生る幼にして父を失ひ兄巖氏（法學士朝鮮銀行整理課長）と共に東都に遊び、明治四十五年東京高等工業學校建築科を卒へ同年七月大林組に奉職す、大正十三年五月本協會理事に當選同年十二月任期滿了、元代議士谷口武兵衛氏の女婿となり谷口家を襲ふ、氏資性豪宕磊落にして友情に篤く又部下を統率す、然かも思慮綿密、氏の手腕に成れる優秀の建築尠からず、彼の大阪ビルヂングの如きは其最後に飾れる氏の遺物たり、遂に攫んせられて大林組工務監督の要職に就き前途爲すあるの志を懷き本年四月十三日溘焉夭折す、惜みても猶餘りあり。行年三十有八。



故終身賛助員　原田金次郎君之照肖

終身賛助員原田金次郎氏大正十四年十二月廿五日疾を以て逝く寔に惜悼に禁へず、茲に氏の小歴と照肖とを掲げ謹んで弔意を表す。

氏は應慶二年福島縣若松市に生る。資性達識明敏、若年にして東都に出づ。明治二十一年田中製作所（現今の芝浦製作所）に入り會計係長を勤む、同二十七年三好電氣工場に轉ず、同三十年原安商會を創業開店し大正八年組織を株式會社に變更し其社長となり今日に及ぶ。氏はまた岩手縣氣仙水力電氣株式會社福島縣大戸電氣株式會社、鹿兒島縣西加世田水力電氣會社の各社長となりて顯著なる事蹟をあらはし、更に東京商業會議所議員として東京商業界に多大の貢献を貽す。享年六十。



故會員　玉川卓一君之照肖

會員（地方）玉川卓一氏大正十五年二月三日疾を以て逝く寔に哀悼に禁へず茲に略歴と照肖とを掲げ謹むで弔意を表す。

氏は明治三十三年六月三日千葉縣山武郡東金町に生る。大正七年三月千葉縣立成東中學校卒業。大正九年四月東京高等工業學校建築科に入り同十二年三月同校同科を卒業。大正十二年四月十日株式會社大林組に奉職。同十三年十一月病氣ノ爲休職歸郷大正十五年二月三日夭折す。行年二十有七。

會報

一、入會金免除期間滿了の件

當協會本年二月例會並通信決議に依り新入會者の爲に本年三月八日より同五月末日迄入會金を臨時免除することに致しましたが該期間も最早滿了になりましたから左樣御了承を願ます此期間中會員諸賢の熱誠なる御勸誘により四十餘名の新入會員を得ましたことは本會の篤く感謝する所であります

一、會員逝去の件

會員吉木久吉氏は五月十日、地方會員大森喜一氏は五月十一日逝去されました洵に惜悼に堪へざる次第でありますす本協會は何れも〳〵直に弔狀を贈り弔意を表しました

會合

○緊急理事會

△日　時　四月二十四日午後五時——七時三十分
△會　場　本協會會議室
△出席者　片岡會頭、園部理事長、小川理事、須川理事、光安理事、酒井理事、横濱法人組織委員
△議　事
一、社團法人設立申請に付定款並細則修正案に關する件

社團法人設立申請に關し先般大阪府内務部より申請書整備方通牒に接したるにより横濱勉氏上京の際内務省に出頭を煩し當局の意嚮を聞き歸阪後修正したる定款及細則に付再度當局に内示方照會し今回其回答に接したるにより之れを基礎として更に修正したる定款及細則案に付協議し尚修正する個所に付協議決定せり尚當局の内示に基き總會員の委任狀を蒐集することに決す

一、會員銓衡

○臨時春季大會委員會

△日　時　五月三日午後五時三十分——十時
△會　場　本協會會議室
△出席者
委員　小川　久市　渡邊　源治
坪井　誠一　村野　藤吉
浦　英之助　矢木　英夫
兒玉廣太郎　森本　藤吉
理事　園部理事長　澁谷　理事
須川理事　八木　理事
△記　事
一、園部理事長より本年春季大會擧行に付委員として御盡力を願ふ謝辭、希望等一場の挨拶ありて先づ委員長の互選を希望し左の通決定す

委員長　浦英之助氏

一、浦委員長座長席に着き簡單なる就任挨拶ありて協議に入り先づ見學旅行方面に付審議したるも經費の關係上南河内郡觀心寺方面と決定し左の事項を協議決定す

一、日　五月十六日の日曜日（晴雨を論ぜず擧行）
一、集合地　南海高野線長野驛前（此處にて會費と會員章及附近地圖と引換へ）
一、集合時　午前十一時
一、見　學　觀心寺（長野驛より東南廿五丁自動車の便あり）延命寺（觀心寺より歸路新線佳絶の風光を眺めつゝ當寺に至り見學をなし三日市町に出づ此間二十五町）
但し降雨の際は見學見合せ旅館にて宴會
所…三日市町錦溪溫泉油屋旅館
一、宴　會　時…午後二時半　同五時
閉會解散
一、電車其他乘車賃　自辨のこと
一、晝　食　辨當の用意は差控へ各自隨意のこと、觀心寺休憩所には湯茶の準備をなすこと
一、會　費　金一圓五十錢
一、夫れより委員長の指名により各係を左の通決定せり

見學係　小川委員　中尾委員
村野委員　矢木委員
宴會場係　坪井委員　渡邊委員
井上委員
庶務係　兒玉委員
會計係　森本委員

一、次いで豫算を作り坪井、渡邊兩委員は宴會場料理其他交涉することに決し其他準備に關し種々協議の上次回本委員會を來る五月十四日開會のことに決し解散せり

○定例理事會

一、日　時　五月八日午後五時——九時
一、會　場　本協會會議室
一、出席者　片岡會頭　園部理事長
和田理事　澁谷理事
須川理事　光安理事
酒井理事
一、報　告　四月分會計報告
一、議　事
一、修正したる社團法人定款並細則案に付審議の件

修正したる個所に付審議をなし異議なく可決

一、社團法人設立申請に關し總會員よ

り委任狀徵收の件
當局の內示に基き總會員より委任狀を徵する事に決し委任狀案に付可決
一、實費精算式施工契約書起草聯合委員會委員選出に關する件
協議の結果左の三氏に依囑することに決定
渡邊節氏　安井武雄氏
瀨戸文吾氏
一、會員銓衡

○構造計算調査委員會

△日　時　五月十日午後六時——八時
△會　場　本協會會議室
△出席者　委員長　增田清
委員　池田宮彦　谷田實
△記　事
一、セメントに關し調査研究上資料として左の成績表の送付方を住友合資會社工作部建築課に依頼することに決す
セメント試驗成績表
但し明治四十一年頃よりのもの
一、本夕は委員出席者少數に付調査研究を見合せ意見の交換をなして解散せり

○臨時春季大會委員會

△日　時　五月十四日午後五時——八時
△會　場　本協會會議室
△出席者　委員長　浦英之助　委員　小川久市、渡邊源治、坪井誠一
兒玉廣太郎、森本藤吉　理事
須川理事、光安理事
△記　事
一、浦委員長より宴會場油屋旅館と交涉結果を坪井、渡邊兩委員より報告ある旨を述べ次いで坪井委員より前回委員會に豫定せし宴會場桶舘の變更其他見學場所の增加等の理由及油屋旅館との交涉顚末を委細報告あり
一、右の報告に基き森本會計委員に於て豫算の組換をなす
一、其他見學寺院との交涉結果及徽章等の準備に付報告あり
一、當日全委員及職員は會員集合時一時間前難波驛を先發して長野驛前に集合することに決す
一、其他當日の準備に付遺漏なきを期し種々協議打合せをなして散會す

○春季大會

△日　時　五月十六日の日曜日
△目　的　見學旅行
△旅行地　親心寺等河南地方
△出席者　（三四名）
會員及賛助員
福澤谷藏　古橋剛丸　城口龜吉
八尾常次郎　大倉直三　川野平造
藤村愛資　白川雄一　增本榮六
呼子正　高橋清光　朝永國治郎
山添繁藏　永田三次郎　加藤善吉
前田武正　左谷米三郎　小林悉
伊東宗太郎　大澤幸平　高橋君三
寺田熊雄　高田利一郎
役　員
和田眞治郎　須川廉太郎　池田谷久吉　酒井勇三郎
大會委員
浦英之助　渡邊源治　森本藤吉
矢木英夫　小川久市　坪井誠一
兒玉廣太郎（次第不同）
職　員
江村郊郵　西谷節　大和榮衛　薦田夏治郎　鷹取陽　山口スエ
△記　事
一、當日初夏絕好の旅行日和に午前十一時前後南海鐵道高野線及大阪鐵道により長野驛着電車には參加會員を乘せ來り同驛前に一同集合し夫れより徒步或は自動車により二十五丁の山路を新綠を眺めつゝ快談の裡に觀心寺休憩所に入り各自携帶の晝食をなす
一、次いで一同觀心寺本堂に集り同寺住職の沿革、同寺と楠氏との關係、同寺建築物等の說明を聽き本堂前石段に於て記念撮影をなし後村上天皇御陵を參拜して三々五々境內の建築物及遺跡を調べ最後に寶物を參觀して同寺を辭す
一、同寺前より十數丁の間新緑佳絕の風光を眺めつゝ山を越へ谷を涉り延命寺に到る同寺庭前に於て再度記念撮影をなし建築物寶物等見學して同寺を出づ
一、是より坦々たる道路十二丁にして三日市町に出で宴會場たる錦溪溫泉油屋旅館に足を休む時に午後三時半
一、溫泉に入り一日の疲勞を慰する間もなく懇親宴會に移り浦大會委員長の挨拶ありて獻酬交歡長野町の校者其他十數名此間を斡旋し各自歡を盡して午後六時半歸途につく
一、本日は和氣靄々の裡に見學旅行を終へ宴會亦大盛會に無事閉會を告ぐるを得しは本協會の欣幸とする所にして大會委員諸賢の勞を多謝する次第なり

○新入會々員及賛助員

會員の部

山田　重藏君　東區清水谷東ノ町四六〇
三浦　尙史君　住吉區天王寺町一三二五
上野伊三郎君　京都市上京區竹屋町通河原町東入宋丸町
大曾根昌平君　北區神山町二六
寶田信太郎君　此花區上福島北三ノ一二
六

地方會員の部

大森　喜一君　東京市四谷區右京町一六
堀越　三郎君　東京市小石川町駕籠町一九四
大江新太郎君　東京市小石川區原町一二
渡邊　讓君　東京府下代々幡町幡ヶ谷一〇
金澤　孝治君　東京府下下荻窪二一六
葛西　萬司君　東京市麴町區三年町二

吉武　長一君　東京府下調布田園都市四〇九

橫山　鹿吉君　東京府下巢鴨町巢鴨一ノ七一

高橋貞太郎君　東京市赤阪區檜町一二

中村　傳治君　東京市四谷區坂町八七

黑田　竹二君　東京市四谷區坂町八一

山本外三郎君　東京府下馬込村一三四七

古橋桝太郎君　東京府下落合六〇四

福井　房一君　東京市芝區三田松坂町一七

近藤　十郎君　東京府下下荻窪五二

佐藤　茂助君　東京府下日暮里渡邊町一〇四〇

瀧水　幸重君　東京市麹町區四番町一一

今川　鎭夫君　東京府下大森新井宿九九七

藥師寺主計君　東京市小石川區林町六二

糟谷　謙二君　東京市麻布區森元町一ノ二八

西原吉治郎君　名古屋市東區千種町元古井八二

萩一　郎君　東京府下大久保百人町二五二

石原　信之君　東京府下大森町新井宿長田四一

普通贊助員の部

白石　竹松君　東京市芝區白金今里町四四

○退會者

會員　松本一太郎君

○死亡會員

地方會員　玉川　卓一君　大正十五年二月三日逝去

會員　吉木　久吉君　大正十五年五月十日逝去

地方會員　大森　喜一君　大正十五年五月十一日逝去

○任所及勤務先移動

會員の部

笠井　正一君　神戸市湊町四ノ一六

山本　千吉君　西宮市壽町三〇堀口方

工藤榮治郎君　府下豊能郡北豊島村神田藤ノ棚一四七八

中村　昌三君　西成區粉濱町七六四

高橋　君三君　西淀川區浦江町三八七

河盛熊太郎君　府下豊能郡箕面村新稻六七五

地方會員の部

小松　靜君　東京市牛込區原町一ノ一

藤田　茂君　神戸市川口町三ノ四一

竹平清四郎君　橫濱市西戸部町一本松八八八

淺井　新一君　臺灣臺北市大正町三條通一ノ三四

坂口　正雄君　今治市藏敷天保山濱大阪合同紡績今治支店第二工場建築場社宅

佐藤　榮吉君　右同

普通贊助員の部

江藤　猛夫君　東京府下中野町雜色四四

影山　丈夫君　港區田中元町三ノ一四五

西野　清直君　西成區旭北通四ノ一〇八二

間瀨　禎三君　京都市東山縣松原西入小鳥町一寶福寺内

伴仲　信次君　此花區下福島三ノ八八山本組内

高橋　義隆君　今治市御厩通竹中寮内

石原　政三君　東京府下代々幡町代々木深町一六一三

石田　敏樹君　府下豊能郡豊中新免三二

中西　徹君　尼崎市竹谷新田南出屋數二八ノ一

荒谷　五郎君　愛知縣福川電話中經所新築場清水組作業所

友淵　義延君　宮内省工匠寮工務掛

小林己之造君　橫濱市北方町小湊四六

近藤　淑一君　東京府下目黑町下目黑六七

鈴木　定吉君　農林省經理課建築部

渡邊　謹作君　東京市深川區中島町三倉澤方

安田　繁藏君　岡山市内山下三〇ノ九

石白　竹松君　山形縣酒田町光ヶ丘農林省農務局經理課建築係出張所

堤　越　郎君　港區市岡町住友職工養成所内舍宅

杉山　愛三君　滋賀縣滋賀郡下阪本村田中卯三郎君　府下豊能郡中豊島村曾根中方(勤)鐘紡阪本工場現場竹中工務店出張所一一一八

役員及職員

會頭　片岡　安

副會頭　宗　兵藏

理事長理事園部　文雄

主記理事　和田貞治郎

同　理事　小川安一郎

主計理事　澁谷　五郎

同　理事　須川廉太郎

編輯理事　古塚　正治

同　理事　光安楫之助

同　理事　池田谷久吉

同　理事　八木幸次郎

同　理事　酒井勇三郎

編輯係

江村　郊邨

蔦田夏治郎

庶務係

西谷　節

靈取　陽

會計係

大和　榮衛

山口　スエ

會員	四〇二	會員(地方)	一九八
名譽贊助員	七〇	終身贊助員	五三
特別贊助員	二七	普通贊助員	四九五
合計(五月二十日現在)			一二四五

●第九集　第六号　掲載広告一覧（掲載順）

近江セールズ
大野正営業所
日本エレベーター製造
浅野スレート
日本スレート販売
日本化学産業
東洋コルク工業
伊丹商店大阪出張所
カール・ツアイス
中央火災傷害保険
大阪ビトロライト工事
南満鉱業
浅野物産
ベニス工房
木下謹三商店
米本商店
田村商会
東亜鉄工所
大平工業所
油脂化工社
日本ホロタイル
KENSEISHOKAI

玲光社
浅野スレート販売
鈴鹿工務所
原田商会
日本セメント防水剤製造所
岡本好文園
日本洋瓦大阪出張所
金剛商会
大阪陶業
浅海商店
桐田商会
阿部鉄工所
日本工剤
岡田建築材料店
日本建築紙工
島田硝子製造所
日本ペイント製造
穴原商会大阪支店
中村グラニット商会
三菱造船神戸造船所
シーベル・ヘグナー商会
森川組

田中昌司商店
大福海上火災保険
伊奈製陶
HANKEN SEISAKUSYO
三井物産
小野田セメント製造
永柳商店
城口研究所
出浦建築事務所
新海建築工務所
大阪建築相談所
池田建築事務所
小笠原建築事務所
岡部建築事務所
大阪建築所
和田建築事務所
葛野建築事務所
片岡建築事務所
横河工務所
横浜建築事務所
竹内建築事務所
宗建築事務所
国枝工務所
野村、橋本建築事務所

安井武雄建築事務所
柳下建築事務所
増田清建築事務所
真水工務所
真水三橋建築事務所
遠藤於菟
遠藤、南建築事務所
設楽建築工務所
西原衛生工業所大阪支店
大阪窯業
池田勘蔵
大倉土木大阪出張所
大阪橋本組
大林組
竹中工務店
長瀬組
中新
佐伯組
野村組
久保田組
熊取谷熊次郎
山本組
松村組
藤木工務店

正木工務店
岡本工務店
鴻池組
有山組
駒井喜商店
安藤組大阪出張所
辰巳吉之助
森本建築社
清水組大阪支店
銭高組
山田大理石製作所
矢橋大理石商店
大阪耐火リノリウム工業
須賀商会
栄進社
松尾鉄骨橋梁
新田ベニヤ製造所
大阪青写真調製所
山本窯業商店
常盤貿易商会
高島屋呉服店
日米建築資料社
河村青写真調製所
デウエット商会

渡辺久雄商店
大阪鉄扉製作所
萩原煖房工務所
東洋建材工業所
東洋リノリューム
田中源太郎商店
建築金物商会